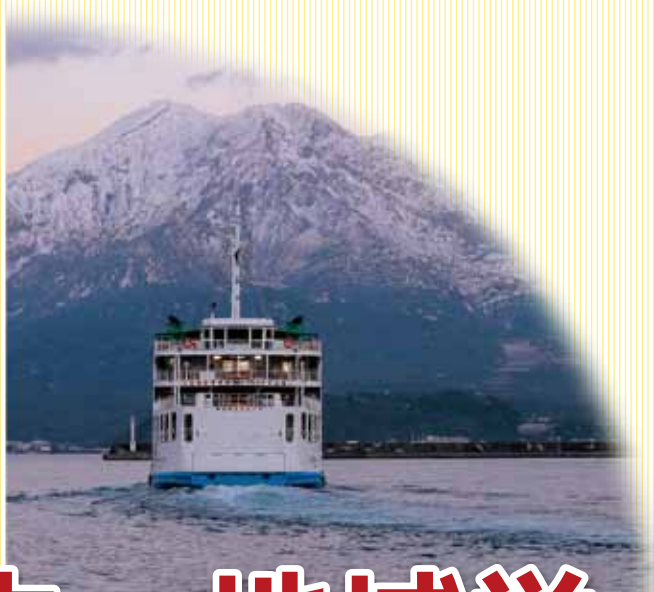


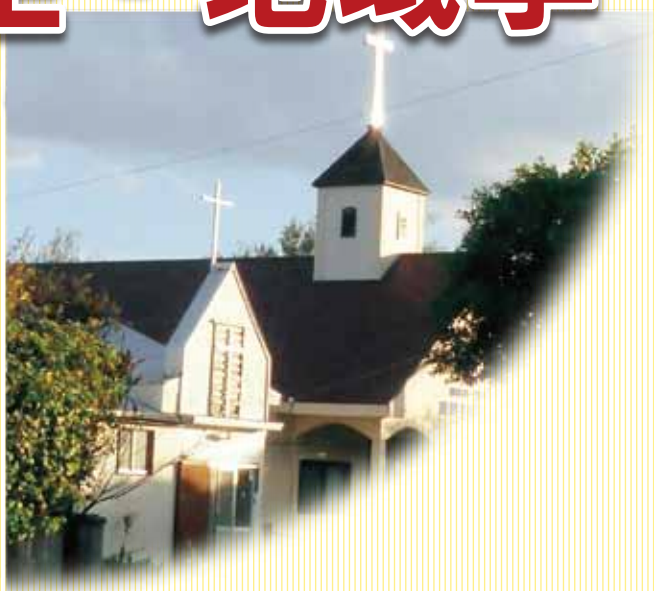
鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
(博士後期課程) 地域政策科学専攻

プロジェクト研究報告集

2015.3 No.12



受容・共生・地域学



鹿児島大学大学院
人文社会科学研究科 地域政策科学専攻

将来をしっかりと見据えた研究を、輝かしい未来へ

市川英孝
(プロジェクト研究担当)

プロジェクト研究のために、今回7名の学生は約半年間、報告会に向けて日々努力をしてきました。テーマは『受容・共生・地域学』とし、発表者各自の研究内容に即した発表となっています。彼らの研究フィールドはさまざまです。統一テーマを設定しても、各自の発表内容とどれだけ親和性があるかどうかわかりません。しかし今回の準備のなかで、他の6人の発表等を聞き、これまで接することがない領域について見聞きし、そこから新しい発見があればプロジェクト研究を実施した甲斐があると考えます。本専攻の教育目標は、「地域の抱える社会的、文化的問題を自ら発見し、解決する能力を備え、既存の学問の枠組みを超えた広い視野からこれらの問題に取り組み解決する能力を有する人材の養成」とあります。このことから地域政策科学に在籍する学生には広い視野をもつことを期待します。

当専攻の教育目標にもある“既存の学問の枠組みを超えた広い視野から”に、このプロジェクト研究の本来の趣旨があると私は考えます。良くも悪くも後期課程では自身の研究領域を突き詰めるために、たこつぽ状態に陥ると言われています。このことは研究対象に対する深い理解の実現を意味するでしょう。他の研究発表は自身のものとは一見まったく関係ないものと思うかもしれませんが、そこに新たなモノの見方を得、今後の研究に新たな視点をもたらしてくれる可能性は非常に大きいと私の経験からも思います。

これらのプロセスがどのように影響するかは、発表者次第だと思います。今回の発表に向け地道にデータ集めをし、関連研究からいくつかの知見を得ることが何を意味するのか。しかし発表者全員が共通に目指す、本専攻に在籍する最大の目的

である、学位取得のための博士論文作成です。博士後期課程に在籍する学生は、学界では研究者として扱われます。研究者は地道な努力を積み重ねて、研究をおこなっています。簡単そうに見える三段跳びでは、得られるものもそう大きくないのではと感じます。

今の段階でじっくり問題を捉えることは非常に有益です。これからますます時間や雑務に追われるようになります。この苦労は必ず自身の糧になるでしょう。そのためにも今しっかりと地に足をつけて、問題解決ができる人材を目指してください。

今回の報告会では、コメンテーターを財部めぐみさん、萩原和孝さん、町泰樹さん、当専攻に在籍した3名の方が担当してくれました。彼らもプロジェクト研究での経験がいま非常に役立っていると感じているのでしょうか。だからこそ、後輩のみなさんに協力したいと今回の役を引き受けてくれたのではないのでしょうか。ぜひ多くの方々の期待に応えることができる人材を目指してください。このプロジェクト研究が自身のこれからの研究に非常に役に立ったと、これから入って来るであろう後輩の方々に胸を張って言えるように。

今年度のプロジェクト研究は、文化政策コース丹羽謙治教授、島嶼政策コース長嶋俊介教授、地域政策コース市川が担当しました。

いちかわ ひでたか
市川 英孝 鹿児島大学法文学部経済情報学科
准教授、大学院人文社会科学研究科地域政策科学
専攻「地域情報論」担当。

目 次

巻頭文

- 将来をしっかりと見据えた研究を、輝かしい未来へ 市川英孝

報告

- 中国における日本 SF 作品出版状況の比較 丁 茹 1

- Young People and Coexistence: Kadai Case Study Survey
若者と共生：鹿児島大学ケース・スタディ ギュレメトヴ ニコライ 9

- 幕末薩摩藩の対外関係に関する一考察
—— 薩英友好関係の構築と発展 —— 橋口正樹 13

- 律令国家形成期における蒸し調理技術の境界 松崎大嗣 21

- 奄美におけるプロテスタントの受容と現状
—— 喜界島の事例をもとに —— 中村敬子 31

- 都市の商業立地パターンと地域構造
—— 中国重慶市区を事例として —— 張 秋菊 41

- サステイナビリティを実現する地方企業
—— 連続型イノベーションによる企業経営 —— 馬場 武 49

コメント

- 「研究者を志す後輩達へ」 町 泰樹 57
「自らのプロジェクト研究を振り返り感じたこと」 財部めぐみ 59
「報告の整理および感想—総合テーマをふまえて—」 萩原和孝 61

- プロジェクト研究報告会概要 福ヶ迫加那 63

- プロジェクト研究を振り返って 67

中国における日本 SF 作品出版状況の比較

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース 2 年
丁 茹

中国の SF 小説は文化大革命をはさんだ長い沈滞のあと、1976 年から再び復興し始め、20 世紀 80 年代はじめに SF 出版ブームの時期を迎えたと言われている¹。このブームの中で、多くの SF 雑誌や小説などが出版された。同時にショートショートブームも起こり、多くの新聞や雑誌などが全国的にショートショートを掲載し始めた²。日本の作家星新一の小説もこの時期から中国に紹介され、翻訳され始めた。小説の翻訳集が出版されたばかりでなく、雑誌や新聞など他の出版物にも星新一の小説の翻訳、紹介文、作家及び作品についての論文が掲載された。こうして、星新一は日本の SF 作家、且つショートショート作家として中国でよく知られるようになった。

中国における星新一小説の受容には、彼の小説が中国語に翻訳された最初の段階からいくつかの特徴が見られる。且つ、星新一は専門的なショートショート作家と言えるが、同時に SF 作家としても認められている。したがって、本研究はその受容³特徴のひとつとして、星新一小説の中国語訳出版物の大陸⁴での出版状況を他の日本の SF 作品の中国語出版物の大陸での出版状況と比較し、分析する。

1 比較対象

以下、今回の研究対象を説明する。

1 林久之・武田雅哉著『中国科学幻想文学館（下）』大修館書店 2001 P72「七九年から八一年にかけて科幻小説雑誌の出版ブームが起こった」。

2 呂植家著『微型小説の雕龍藝術』广西人民出版社 2009.06 P10；刘海涛著『規律与技法 转型期的微型小説研究』中国社会科学出版社 2002 P8

3 鑑賞の基礎をなす作用で、芸術作品などを感性に受け入れ、味わい楽しむこと。（『国語大辞典』小学館）

4 星新一の中国語訳の小説集は大陸の翻訳本が中心となるので、台湾及び香港の部分は参考として触れながら主に大陸の翻訳状況をめぐって研究する。故に、他の日本 SF 作家と比較する時も大陸の出版状況をめぐって行う。

1.1 範囲

比較する作家の範囲としては、専門的な「SF 作家」に限定するより、SF を書いたことがある作家とした方が妥当かもしれない。多くの SF 作家は SF 小説を書くと同時に推理やファンタジーなどの作品も書いている。しかし、比較する場合、できる限り誰もが認める「SF 作家」を比較対象として研究をするべきである。したがって、今回は日本 SF 作家クラブ（略称は SFWJ）⁵の会員のみを考察対象にすることにした。日本 SF 作家クラブの 242 名の作家（星新一を除く）の中には、小説作家ばかりでなく、漫画家、評論家、編集者などもある。本研究では、星新一と同様の、小説を書く作家を対象として考察する。

次に、比較する内容であるが、主に SF を書く作者の SF 小説について、関連する著書（作品集）、雑誌や新聞、その他の出版物に収録された作品を比較する。作品以外にも、作家あるいは作品を紹介する出版物、作家あるいは作品について研究したものも含まれる。

本来ならば SF 作品のみを比較するべきところであるが、SF 作家の作品中に SF 作品以外の作品もあり、その中国語翻訳も存在する。一方、星新一の中国語翻訳作品中にも SF 以外の作品（推理やファンタジー）がある。また、SF と非 SF 作品の区別も必ずしも明確ではない。故に、大体の傾向を見るために、今回の考察では他の日本 SF 作家（あるいは翻訳された SF 作品を持っている SFWJ の作家）の SF 以外の中国語訳作品も含んだ統計を使用する。

5 日本 SF 作家クラブは、1963 年 3 月 5 日石川喬司、小松左京、川村哲郎、斎藤守弘、斉藤伯好、半村良、福島正実、星新一、光瀬龍、森優、矢野徹の 11 名で発足した、日本随一の SF& ファンタジー親睦団体である。法人格のない任意団体で、現在 250 名近い作家、アーティスト、評論家、編集者が在籍している。星新一は初代会長であった。現在の会長は東野司で第 17 代である。

1.2 状況

日本SF作家クラブの242名の会員(星新一を除く)の中で、現在までに収集した資料によると、中国に翻訳された小説を持つ作家は41名のみである。

表 I 中国語に翻訳された SFWJ 作家

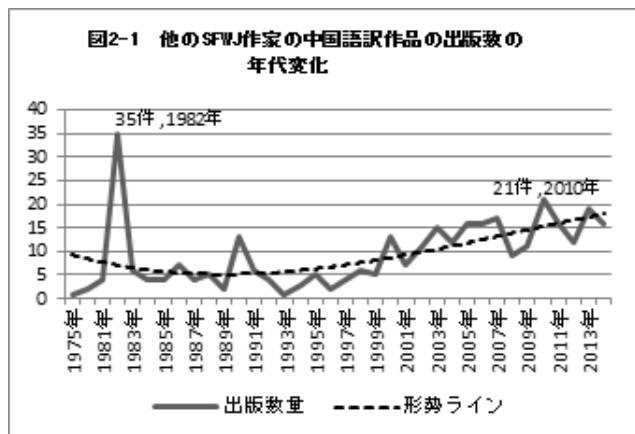
半村良	北野勇作	草上仁	柴野拓美	沖方丁
谷甲州	光瀬龍	貴志祐介	荒巻義雄	小松左京
立原透耶	栗元薫	眉村卓	若木未生	山野浩一
石川英輔	石原藤夫	矢野徹	田中光二	梶尾真治
篠田節子	野田昌宏	小林泰三	火浦功	石川喬司
飛浩隆	豊田有恒	福島正実	高斎正	山口優
津守時生	井澤元彦	鏡明	菊地秀行	三雲岳斗
筒井康隆	長山靖生	月村了衛	山本弘	椎名誠
伊藤計劃				

彼らの作品中、翻訳された作品(集)は、1975年に出版された小松左京の『日本沈没』から最新の2014年10月に出版された伊藤計劃の『虐殺器官』まで、計202篇がある。雑誌の場合、翻訳が一番最初に雑誌に掲載されたのは1980年8月の『外国文学報告』

(外国文学報告)第4期に掲載された小松左京の「美国之壁」⁶(アメリカの壁)である。最新のものは2014年9月の『科幻世界』第9期に掲載された梶尾真治の「玲子の箱宇宙」(玲子の箱宇宙)で、計115篇⁷にのぼる。以下、具体的に比較分析を行う。

2 時間と数量

収集したデータから見ると、中国における日本SF作品の出版時期1975年から現在までを見ると、主に1980年代前半と2000年代以降に集中している。中国

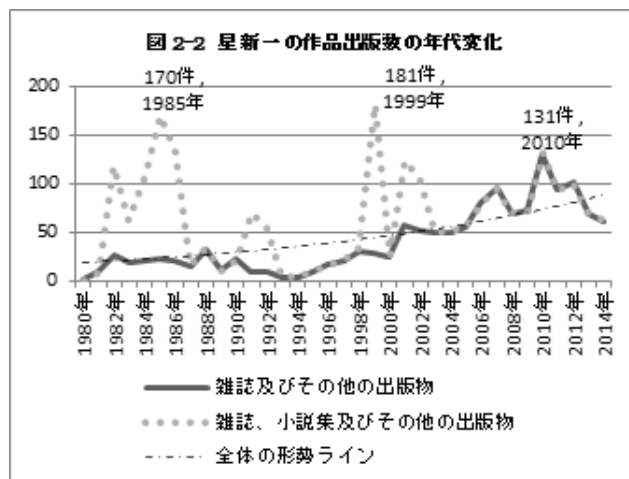


におけるSFブームとその停滞期に従い、翻訳と出版量にも変化があった。図2-1のように、SF出版ブームの80年代のはじめに大量出版があったが、SF論争⁸後、長期間にわたって、出版量は回復できなかったようである。1990年ごろに少し回復したが、また出版量は下がっている。

317篇のSF出版物中、紹介文は63件、論文は24件、SFに関わるニュースは15件ある。小説の翻訳は215件で、その中には抜粋など部分的な翻訳も含んでいる。一方、星新一の翻訳作品は全てショートショートで、「抜粋」という翻訳形式は存在していない。

図2-2は星新一作品の変化であり、1980年代に明らかに出版ブームが起こっている。2000年ごろ、小説集の出版によって、再びブームが始まった。更に2000年以降、しだいに出版量も回復し、上昇してきた。中国語小説集、雑誌に掲載された作品、その他の出版物に収録された作品、これら三種から見ると、星新一作品の出版数は1980年から現在まで千件以上存在する⁹。

出版時期から見ると、SFWJの作家たち(星新一を除き)の作品は1980年代はじめ、中国SF出版ブーム¹⁰が起こった時期以降次々と翻訳紹介された¹¹。



6 小松左京著・莫邦富＝楼志娟訳・瞿翁校：「美国之壁」、『外国文学報告』1980年04期。

7 重複する作品も含まれる。

8 「SFは文学か科学か」という論争であり、1982年に発端があり、1984年から情勢が悪化し、SF出版物は姿を消すことになる。中国大陸では、四川省の『科学文芸』雑誌及び上海市の『少年科学』雑誌にSFコラムが残されただけである。(筆者注)

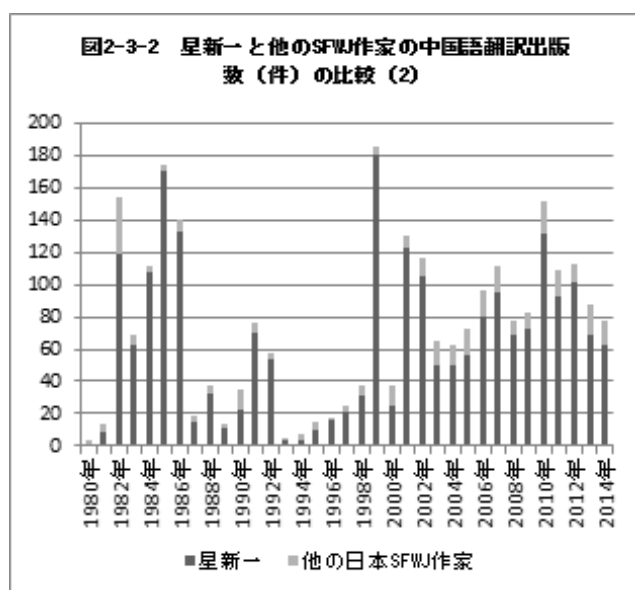
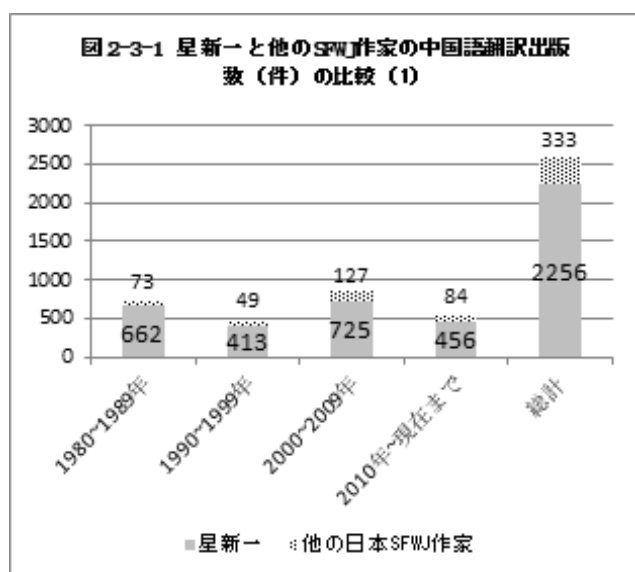
9 重複する作品も含まれる。

10 林久之、武田雅哉著『中国科学幻想文学館(下)』大修館書店2001 P72「七九年から八一年にかけて科幻小説雑誌の出版ブームが起こった」。

11 ただし、1975年には北京人民文学出版社から李徳純訳の『日本沈没』(小松左京『日本沈没』)が出版された。

しかし、出版数量から見れば、日本 SF 作品の出版ブームは 1983 年ごろまでで終わり、2000 年からやや回復の兆しがあったが、依然として低調である。星新一作品の出版には、図 2-2 によると、ほぼ三つのブーム¹²があり、更に 2000 年代以降の回復に伴い、出版数もしだいに上昇し、2010 年には、三つ目のブームが出現した。

全体的な出版数から両者を比べると、両者は形勢ラインの変化傾向は類似しているが、数量的な「差」が存在している。具体的な様相は以下の図 2-3-1 と図 2-3-2 に示される。

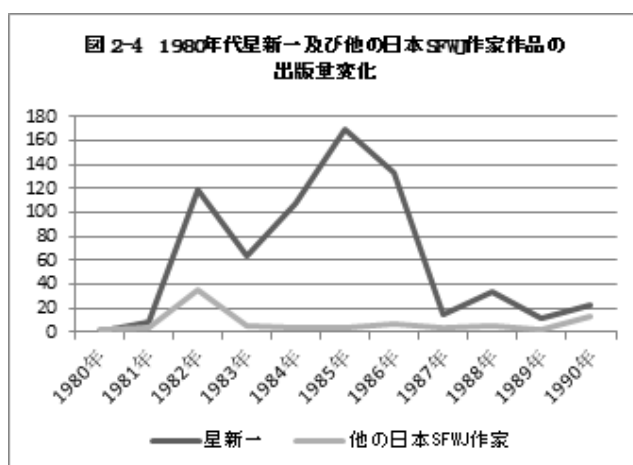


上図からは、両者ともに毎年翻訳作品が出版されているが、星新一の中国語訳作品の出版数が他の SFWJ 作家の出版数に比べて圧倒的に多かったことが

わかる。この「巨大」とも言える差はやはり「ショートショート」という小説形式と関係があると考えられる。例えば小松左京のような SF 作家は作品の多くが長編であり、翻訳にかかる時間、出版費用の点でショートショート作品に数倍する手間がかかっている。言い換えれば、一人の作家の「翻訳される作品の基数」という要素の存在がそこには見られるのである。また、それ以外に、読者の受容の問題とも関係がある。翻訳と受容の要素については以下詳しく説明する。

以上の考察から、両者の差には顕著な特徴が存在していることが分かる。すなわち、星新一の中国語翻訳の最初の出版ブームは 1985 年にあたっているが、当時はちょうど SF 論争の情勢が悪化し、SF 出版物が停滞期に入った時期であった。しかし、下図（図 2-4）に示されているように、この時期に星新一作品の出版数は、他の SFWJ 作家の作品出版数に比べ飛躍的に伸びている。

つまり、中国の「SF 論争」は、星新一の作品の出版数に全く影響を与えなかったと言えるのである。



その原因は、中国に紹介された星新一は「SF 作家」でありながら、「ショートショート作家」でもあったことによる。故に、1980 年代はじめから SF 作家として中国に紹介された星新一は SF 論争中に「ショートショート作家」に変貌し、紹介され続けた。こうして、星新一作品の出版は維持されたのに対し、他の SFWJ 作家の SF 作品はこのような柔軟性がなかったため、SF 論争の衝撃を受けなければならなかったのである。

12 ひとつ目は 1980 年代中ばにあり、二つ目は 1991 年 -1993 年、三つ目は 2000 年以降に始まる。

もう一つの原因は星新一作品の「内容」と関わりと考える。星新一作品の特徴の一つとして、彼自らが課した三つの創作条件がある¹³。この条件によって星新一の作品は多くの読者に対し、配慮した内容となったことで、出版に際して他の SFWJ 作家の作品に比べ優位な位置を占めることになったのかもしれない。例えば、他の SFWJ 作品中、中国で最初に翻訳された小松左京の『日本沈没』（李徳純訳・北京人民文学出版社 1975 年）は一般の読者を対象とした翻訳作品ではなく、「資本者階級を批判する」という目的で出版された¹⁴ものであったことが挙げられる。

3 翻訳者と読者

以下、翻訳者と読者という側面から、星新一及び他の SFWJ 作家の中国語訳作品出版状況あるいは作品の受容状況を比較し、分析する。

3.1 翻訳者

SFWJ の中国語翻訳作品について、判明した翻訳者は計 97 人¹⁵で、共訳が 36 件がある。星新一の中国語翻訳作品の場合、判明した翻訳者は計 253 人で、21 件の共訳が存在している。

したがって、まず共訳という点から見れば、他の SFWJ 作家の作品は中国への紹介時、より多くの共訳者が存在している。星新一の小説はショートショートで字数も少なく、翻訳はより容易であるという特徴が見られるのである。

翻訳者全体から見て、翻訳された作品数と翻訳者人数とを比較すると、下表の結果となった。

表Ⅱ 星新一及び他の SFWJ 作家作品の翻訳数の比較

	作品数 ¹⁶	翻訳者人数 ¹⁷	翻訳数 ¹⁸
星新一	870	253	3.4
他の SFWJ 作家	138	97	1.4

13 その一、性行為と殺人シーンの描写をしない。その二、時事風俗を扱わない。その三、前衛的な手法を使わない。(星新一著「創作の経路」『星新一の作品集 第 8 巻』新潮社 1975 P185)

14 小松左京著・李徳純訳『日本沈没』北京人民文学出版社 1975 年の出版説明：「本書共两部、第一部四十余万字、第二部尚未出版。现将第一部节译出版，供批判用。」（本小説は二部分に分かれ、第一部が四十万字程度で、第二部はまだ出版されていない。ここで第一部を部分的に翻訳して出版したのは、批判に供するためである。）（筆者訳）

表Ⅱから見ると、「星新一の作品の翻訳者は他の SFWJ 作家の作品の翻訳者より少ない」。すなわち、一人の訳者が星新一の作品を数多く翻訳しているのである。

他の SFWJ 作家の場合、作品には長編、中編が多く、一方、星新一小説は特に中国語に翻訳されたのは周知のようにすべてショートショートであるという特徴がある。更に、星新一小説の表現は簡潔且つ理解しやすい特徴があり¹⁹、翻訳に際して、時間があまりかからないという傾向がある。これも 1980 年代初頭より、翻訳者たちが星新一の小説を選んだ原因のひとつだと考えられる。

3.2 読者

上述のように、星新一の作品も他の SFWJ 作家の作品もともに 1980 年代のはじめから「SF」として中国に紹介され、翻訳された。まず、作品を掲載する出版物のジャンル区分から見てみよう。

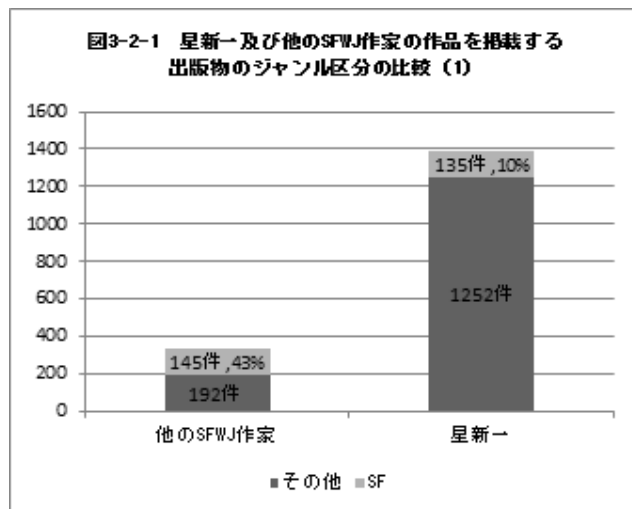


図 3-2-1 に示されているように、他の SFWJ 作家の作品を掲載する出版物（小説集、雑誌及び他の出版物）中、明確に「SF」と明示するもの²⁰は 145 件あり、総件数 192 件²¹中の 43% を占めている。星新一のほ

15 共訳の場合、共訳者全員を一人の翻訳者と見なしている。

16 異なる出版物に掲載された、同じ翻訳者による同一の作品は除いた。

17 重複する翻訳者を除いて、共訳の場合は一人の翻訳者と見なす。

18 一人の翻訳者が翻訳した作品数を指す。

19 大西赤人著「開拓者星氏の惹き起こした副作用」『星新一の世界』新評社 1980 P143：「（星新一の小説は）とにかく平明簡潔である。修飾語が大変に少ない」。

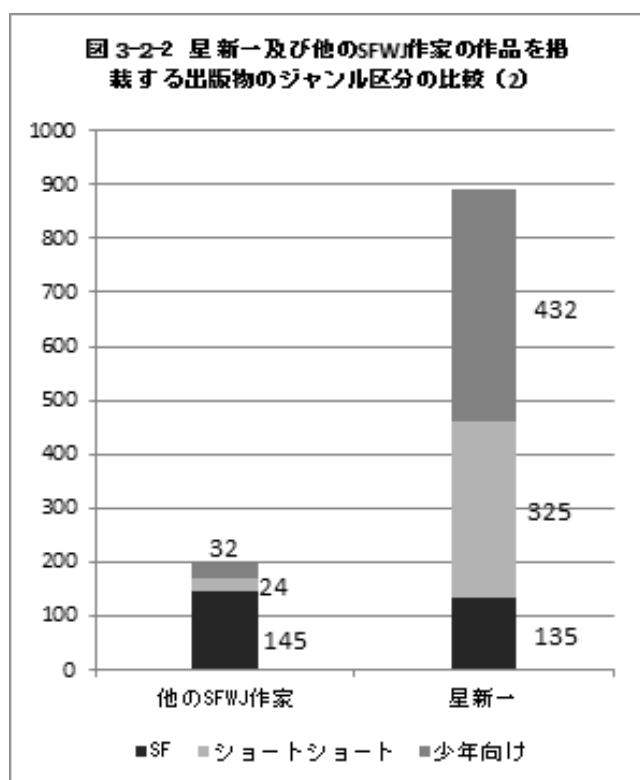
20 タイトルや表紙に明らかに「SF」と明示する出版物を指す。

21 重複作品も含む。星新一の場合も同様である。

うは135件で、総件数のわずか10%である。

したがって、他のSFWJ作品に比べると、星新一の作品はSF専門誌以外の出版物に掲載されたものが多いと言える。言い換えれば、星新一作品のSF指向性は他のSFWJ作家の作品より弱いのである。この特徴もより広い読者層が星新一小説に触れ、受容する契機となったにちがいない。

また、SFジャンル以外にも目を向けてみよう。以下、両者の作品をショートショート、少年向け、SFという三つの区分に分け、比較する。



表Ⅲ 星新一と他のSFWJ作家ジャンル区分の比較 (3)

	他のSFWJ作家	星新一
SF	43%	10%
ショートショート	7%	53%
少年向け	9%	31%

図3-2-2と表Ⅲに示されているように、他のSFWJ作家の作品は中国に紹介されるに際して、明確なSF傾向を持っているが、星新一の作品はそれと異なっている。「SF」よりもショートショートや少年向けという傾向がある。

また、「図書への収録」と「雑誌への掲載」という二種の出版形式についての比較から見ると、星新一と他のSFWJ作家の間には相違点が存在している。他のSFWJ作品の中国語訳の主な出版方法は小説集や図書への収録(222件)であり、雑誌への掲載作品数(115件)は少ない。星新一の場合はこれとは異なり、雑誌への掲載が主要な出版形式である²²。星新一作品に見られるこうした出版形式の傾向も星新一作品がより広い範囲の読者に受容されることを促した点と考えられる。

中国国内におけるSF文学の低調な現状²³の中で、星新一の作品は確実に他のSFWJ作家の作品よりもいっそう多様な読者に受容されやすいという面を持っている。

訳者と読者の面から見れば、星新一及び彼の作品には他のSFWJ作家と作品が持っていない柔軟性がある。これこそ星新一作品が中国で受容される際の優位点の一つだと考えられる。

4 教育界からの受容

教育界からの受容も星新一の中国における受容状況中の重要要素である。現在までに収集した資料によると、1983年から、星新一の作品は次々と中国の教科書や副読本に採用されていった²⁴。最新の2011年『日本語総合教程 第六冊』(上海外語教育出版社 2011年)には「企业里的圣人」(企業内の聖人)が採用されており、これまで教科書等に採用された作品は計19篇(22回)ある。

星新一作品中で学生に最もよく知られているのは人

22 星新一の作品について、小説集及び図書収録の件数は657で、雑誌掲載の件数は758である。

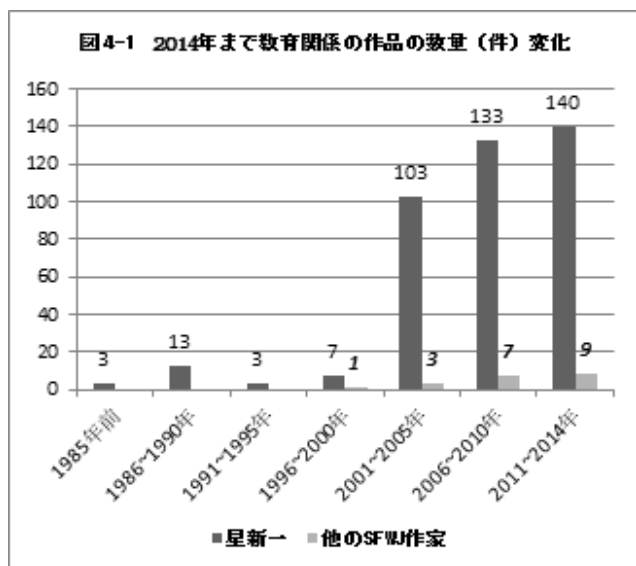
23 楊鵬著『科幻類型学——幻想帝国・科幻卷』福建少年儿童出版社 2009年 P57:「中国的纯文学作家一般视科幻小说为通俗文学或者儿童文学…但是,退一步说,即使在大陆的通俗文学领域,科幻小说依然没有什么分量。……在人们的观念中科幻小说与儿童文学离得更近。……(但)科幻小说在儿童文学领域里事实上也是缺席的。」(中国の純文学作家は一般にSFを大衆文学や児童文学と見なしている…しかし、一歩しりぞいて言えば、たとえ大陸の大衆文学界においてもSFが依然としてそれほど重みを持っていない…人々の観念の中では「SF」が児童文学と極めて近いものと考えられている。…しかし実際にはSFは児童文学の領域においても一定の地位を占めてはいない。) (筆者訳)

24 最初に採用された小説は「七个罪犯」(七人の犯罪者),『初中实验课本・语文第五册』(中学校実験教科書・国語第五册),教育科学出版社 1985年。

民教育出版社²⁵の『人教版課程標準実験教科書・語文八年級下冊』（以下、人教版『語文』と略称する）に採用された「おーい、でてこーい」である。また、次によく知られた作品は「アフターサービス」で北京師範大学出版社の『義務教育課程標準実験教科書語文八年級下冊』（以下、北師版『語文』と略称する）に採用された。このように、2000年代はじめ以降、星新一の作品は教育と関係ある図書や雑誌にしばしば収録、採用された。

他のSFWJ作家の作品が教育関係の雑誌や図書に採用された例は存在するが正式に教科書にテキストとして採用された例は存在しない。且つ採用された二篇の星新一小説はともにSFと認められる作品である。星新一は中国義務教育国語教科書に正式に採用された²⁶唯一の日本SF作家となる。

他のSFWJ及び星新一の作品を収録した教育関係の出版物の数量的変化を年代順に示すと、下図（図4-1）のようになる。



2000年以前、星新一以外のSFWJ作家の作品は中国の教育関係出版物に収録されることはなかった。最

初に収録されたのは小松左京の『日本沈没』の抜粋²⁷（2000年）で、これ以降、他のSFWJ作家の作品も副読本や練習問題、教育に関わる雑誌などに採用され掲載されたり、あるいは紹介された。

表Ⅳ 収録された他のSFWJ作品²⁸

採用された作品			
作家	タイトル		回数
眉村卓	时间銀行	時間銀行	7
矢野徹	密友	—	1
小松左京	日本沈没	日本沈没 ²⁹	4
福島正実	时间偷渡者	—	1
	启明星	夜明けの惑星	1
筒井康隆	追赶时间的少女	時をかける少女	1
	模拟人	擬似人間	2
紹介された作品			
山本弘	艾比斯之梦	アイの物語	1
山口優	Arve Rezzle	アルヴ・レズル	1

星新一のSFショートショート「おーい、でてこーい」が最初の教科書に登場したのは2001年である。この教科書は2001年秋から現在まで20省以上の学校で使われている。また、前図2-2によれば、星新一作品の掲載数は2000年から明らかに増加している。

星新一作品が教科書に採用されることによって、彼のほかの小説も教育関係の雑誌や図書に多く収録されるようになり、こうして、星新一の作品は、学生あるいは青少年により広く知られるようになったのである。

この点も他のSFWJ作家の作品が有しない受容面における優位性であると考えられる。

5 結論

以上述べたように、星新一の作品は中国における受容過程で、他の日本SF作家に比べ独自の特徴や優位性を有していた。

25 人民ネット北京11月24日電文（趙英梓）：60多年来，人教社一直负责编写全国的中小学教材，直至上个世纪80年代末，教育部推行“一纲多本”，它对教材的垄断才被打破。时至今日，人教社仍是业界公认的中小学教材编写实力最强、最权威的。（60多年来，人民教育出版社是一贯着全国中小学校的教科书的编集に責任を負っていたが、20世紀80年代末に教育部が「一綱多本」政策を推進したことによってその独占状態は終わった。現在も人教社は依然として教育界で公認された中小学校教材編集の實力を最も有する権威のある義務教育教科書編集の出版社である。）（筆者訳）

26 副読本ではなく、教科書にテキストとして正式に採用され、教師と学生によって読解が行われることを指す。

27 葉永烈編集『中国学生必读书库：科学卷（下）』北京語文出版社2001 P211-P222

28 教育関係の雑誌に掲載された内容も含めている。副読本に採用されたのは「時間銀行」及び「日本沈没（抜粋）」、計2篇4回がある。それ以外は全部教育関係の雑誌に掲載されたものである。

29 採用されたのは小説の一部（抜粋）である。

第一に、星新一作品は中国で紹介される過程で、他の日本 SF 作家の作品とは異なる特徴を有した。彼の作品は、SF 停滞期においても翻訳及び出版量を維持し、場合によっては一時的にその上昇傾向さえも見られたのである。したがって、星新一作品の出版件数は他の SF 日本作家に比べると格段に多い。

第二、翻訳者及び読者の面から比較すると、星新一の作品は SF でありながら、ショートショートでもあるという特徴を有する。したがって、翻訳者の翻訳においても読者の読者行為においても他の SF 作品（長編や中短編を主体とする）に比べて容易であり、このことが作品の受容の面での助力になったと考えられる。また、作品がどのようなジャンルと認識されて雑誌、図書などに掲載されたかを比べると、星新一作品は普遍的に SF ジャンルに分類される他の日本 SF 作品とは異なり、ジャンル区分において柔軟性を持つ。

第三、星新一の作品は他の日本 SF 作品に比べ、中国の教育界、特にその義務教育段階において独自の地位を有している。それは星新一が中国義務教育国語教科書に正式に採用された唯一の日本 SF 作家だということである。これは同時に学生や教師の読者群における他の日本 SF 作品の受容を促進することに貢献した。

星新一は中国で紹介された日本 SF 作家の中で非常に独自の受容がなされた作家であると考えられる。

参考文献

林 久之・武田雅哉

2001『中国科学幻想文学館（下）』大修館書店

呂 植家

2009『微型小说的雕龙艺术』广西人民出版社 2009.06 P10

刘 海涛

2002『规律与技法 转型期的微型小说研究』中国社会科学出版社

小松左京（莫 邦富＝楼 志娟訳・瞿 翁校）

1980「美国之壁」、『外国文学报告』1980 年 04 期

眉村 卓

2014「时间银行」、『小学阅读指南 3-6 年级版』2014 年 10 期 6

星 新一

1975「創作の経路」『星新一の作品集 第 8 卷』新潮社

小松左京（李 徳純訳）

1975『日本沈没』北京人民文学出版社

大西赤人

1980「開拓者星氏の惹き起こした副作用」『星新一の世界』新評社

楊 鵬

2009『科幻類型学——幻想帝国・科幻卷』福建少年儿童出版社

葉 永烈（編）

2001『中国学生必读文库：科学卷（下）』北京語文出版社

参考資料

読秀：<http://www.duxiu.com/>

中国国家図書館：<http://www.nlc.gov.cn/>

中国国家知識基礎施設：<http://www.cnki.net/>

全国図書館参考諮詢連盟：<http://www.ucdrs.net/>

星新一公式サイト：<http://www.hoshishinichi.com/>

日本 SF 作家クラブ会員名簿：<http://sfwj.jp/members/>
人民ネット北京 11 月 24 日電文（趙英梓）：小学语文课本想说爱你不容易（<http://edu.people.com.cn/n/2014/1124/c367001-26084391.html>）

てい じょ
丁 茹 中国山東省棗莊市生まれ。鹿児島市在住。
山東師範大学日本語言語文学研究科日本文学専攻修了。

Young People and Coexistence: Kadai Case Study Survey

若者と共生：鹿児島大学ケース・スタディ

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース1年
ギュレメトヴ ニコライ

はじめに

近代国際社会において、他文化との繋がりを確立することはきわめて重要である。多くの利点として挙げられるのは：相互理解と受容、インテグレーションと協力など。これらの繋がりが不足すると、誤解と重大な対立を生じる可能性がある。よって、できれば学校教育の制度に取り組むなど早い段階でこの繋がりの基礎をつくりあげることが必要である。

近代教育は文明の最大の業績であり、社会と文化の発展に必要不可欠である。すべての教育制度の目的は、社会に貢献する人材を育てることである。教育は個人の世界観や全体的な能力を形成するのに影響している。また、他方で教育は、プロパガンダとして使われることでネガティブな作用をもつこともできる。これは、外国人と外国における固定観念を形成し、理解と共生に支障をきたすことがある。本研究では、国際共生の視点からイメージと固定観念のネガティブな影響を調査し、それらがいかに形成され、また変化するかを研究する。

調査方法と目的

鹿児島大学は日本ではそれほど大きな大学ではないが、外国人留学生の割合は比較的多い。40カ国から約280名の外国人留学生が鹿児島大学でそれぞれの学部・研究科に所属している。同時に鹿児島大学に在学する日本人学生たちに対するいくつかの海外交換留学プログラムがある。短期または数年に及ぶ留学先にはオーストラリア、アメリカ、スウェーデン、イギリス

など様々な国がある。このプログラムに参加する学生たちは海外に行く前から、既存のアイデアやイメージを持ち、その中に固定観念も含まれる。しかしながら、海外での生活を経験すると、学生の持つイメージや意見に変化が生じることがある。学生たちの海外留学の前後の意見の変化とその変化の理由を研究するために、アンケートを行った。個人情報を守るため、アンケートは匿名だったが参加者籍、年齢、性別、教育背景そして留学先についての記入をお願いした。

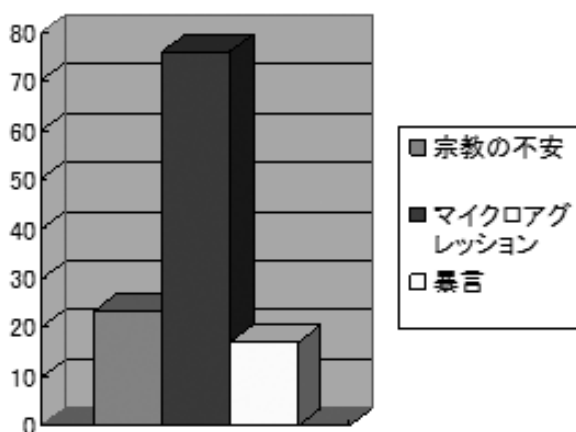
アンケート内容と参加者について

内容の主旨は学生たちのもつ意見の中にみられる固定観念を見つけ、またそれらがどのようにして得られたかを知ることである。また、同じように学生たちには学生自身が訪問した国で受け入れられていると感じたかどうかについての質問も行った。もうひとつの重要な質問として、海外留学中に差別（人種・性別など）を経験したかどうかについてをあげた。もし、経験がある場合には具体的な内容の記入もしてもらった。そして、鹿児島大学で得られた経験があなたをもっと国際的な人になることに役立ったかどうかについての質問も行った。2週間で33名（在学中または同大学出身者の日本人12名、外国人留学生21名）による匿名のアンケート（半数以上回答のあるもの）を回収した。アンケート結果から得られた情報を以下にまとめた。

調査結果 A：外国人留学生

アンケートに回答した学生たちはそれぞれ、イギリ

ス：4名、ドイツ：3名、中国・韓国・フィリピン：2名ずつ、オーストラリア：3名、バングラディッシュ・パキスタン：2名ずつ、スペイン：1名 全員が半年以上鹿児島大学に所属し少なくとも日常的な日本語を話すレベルを有していた。多くの学生（21名の中から16名）が日本で受容されたと感じていた。しかしながら、21名のうち17名の学生が日本に在る間に差別を実感していると回答した。以下のグラフは学生の経験した差別を表している。



数名のイスラム教徒の参加者が日本のメディアによるイスラム教の否定的な報道によって不快感を感じていると回答した。その報道が日本人の意見に影響を与えイスラム教徒に対し国際的な交流の可能性を減らしているだろう。しかし、この流行は現在日本だけでなく世界中にも存在する。

西洋人の参加者の大半（52%）はマイクロアグレッション（意図しない差別的発言）に失望したと回答した。マイクロアグレッションとは、行動心理学の用語であり、Dr. Derald Wing Sue¹によって以下の説明がなされている。

"Microaggressions (are) the brief and everyday slights, insults, indignities, and denigrating messages sent to (visible minorities) by well-intentioned (members of an ethnic majority in a society). The members of the majority are often unaware that they are communicating

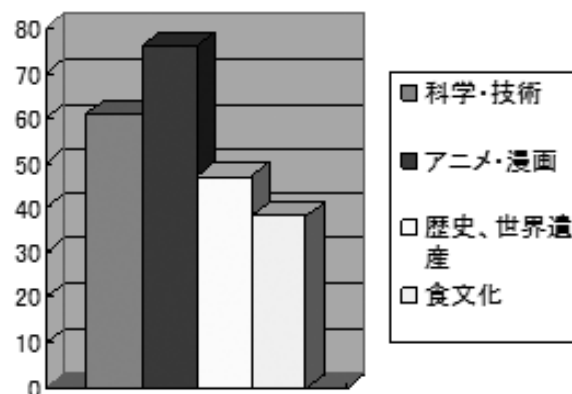
potentially offensive messages."

“マイクロアグレッションとは善意ある大多数からマイノリティに対して送られる日常のわずかな中傷、軽視、侮辱である。大多数のうちの一部が意図せずに差別的な表現を送る。”

日本における事例では日本国籍をもつアメリカ人の有道出人（アルドウ・デビト）によると、「マイクロアグレッションが言葉の合図（ひとことふたこと話ただけで「日本語が上手ですね」といわれる）、ボディランゲージ（外国人を見るなり盗まれないように財布をしっかりと抱える、または電車の中などで外国人の隣に誰も座らない）と環境的合図（メディアによる外国人の風刺：外国人の大きな鼻、肌の色など）を含む。」と述べている。多くの日本人がそれが差別的、攻撃的な意味であることを理解していないために起こる。

一方でほとんどの（21名のうち18名）外国人留学生在が日本に来る前に前向きなイメージをもち、それぞれ帰国後もそのイメージが持続していた（18名のうち17名）。多くの人（73%）が日本人の親しみやすさや礼儀正しさがその学生の日本への滞在をより快適で便利なものとした。

それらの学生による、日本に来る前の日本のイメージは発達した科学や技術、アニメ・漫画、歴史的・文化的遺産、寿司やラーメンといった多様な食文化を含んでいた。これらの回答内容を以下のグラフに表している。



1 Racial Microaggressions in Everyday Life

しかしながら、韓国人と中国人の学生たちは日本に来る前に第二次世界大戦中の戦争犯罪を学び、日本に対してネガティブなイメージを持つことになった。戦争の遺恨や現在ある国家間の問題（領土問題など）が教育として新しい世代に影響を与えているだろう。

外国人学生の圧倒的数（21名のうち20名）が鹿児島大学に在学することで国際交流に必要な能力に対しポジティブな影響を与えていると回答している。理由として、国際交流イベント、日本人の学生・先生たちからの支援を挙げている。

調査結果 B：日本人学生

アンケートに協力した日本人学生たちは全員20代で在学中に短期海外留学を経験している。うち、オーストラリアへ5名、アメリカ、カナダ、イギリスへ2名ずつであった。日本人学生の回答は似通っていた。彼らは全員、海外に旅立つ前に安全に対する懸念を表していた。そして、58%（12名のうち7名）の学生が自らの内気な性格と低い言語能力を挙げ、外国で調和することができるかどうかの心配をしていた。

外国の既存のイメージに関して、70%の学生は彼らの学校教育を主要な情報源としてあげている。学生は地理学や歴史の授業と国際交流のイベント（外国人の外国語指導助手、ALTを参加した授業とイベントも含む）が海外について重要な知識源であったと回答した。

“オーストラリアはいつも暑い”、“アメリカは銃社会で治安が悪い”といったイメージをそれぞれ25%、33%の学生たちが回答した。また圧倒的な割合（83%）の日本人学生がそれぞれの留学予定先の国に対して前向きなイメージを持っていたこともわかった。しかしながら、“高い物価”（イギリス留学をした1名），“文化的な違い”（イギリス、アメリカ留学をした2名）などの理由により33%の学生は留学後にネガティブなイメージに変わってしまった。

イギリスに留学した2名の学生が外国人から頻繁に

中国人として対応されたと言及したが、差別の問題に関して大部分の主題は否定的に回答した。2名の学生の報告を除けば他の差別的な出来事はなかったが、“アジア人はすべて中国人である”という固定観念はまだヨーロッパに残っているだろう。

しかしながら、すべての日本人学生が鹿児島大学に在籍することでより国際的感覚を養うための支援を実感している。学生たちは多くの異文化交流イベントや、交換留学プログラム、外国人留学生と共に授業を受ける機会などの前向きな経験を経て、多くの異なる文化について知ることができた。3名の学生が鹿児島大学の外国人教師が学生の意見にポジティブな影響を及ぼしたと回答した。

終わりに

調査結果から、参加者の大半は外国にたいしてポジティブなイメージを持っていたと明らかになる。しかし、多くの学生は差別を受けた経験があった。

紛争や誤解を避けるためには、外国の文化、理解と受容に関する教育制度が非常に重要である。そして日本社会の中にもっと多文化的な環境を作らなければならない。そのために、大東文化大学の教授川村千鶴子さんは2つの方法を提案した。

ひとつは新しいポリシーである：外国人と日本の国際協力・交流に対処する政府機関（多文化共生庁）を設置すること。もうひとつは多文化社会環境創造のモデルである：教育制度とNGOとNPOと国民の協力に基づいている草の根活動。

しかしながら、平和で共存が可能な多文化社会をつくるための最も重要なツールは、次の世代に教える教育システムである。国際交流と教育を使用して、学生は異なる文化を理解しながら受け入れることを学ぶことができ、そして彼らは国際の社会や環境に適応することができるようになる。

参考文献

Arudou, Debito,

Yes, I can use chopsticks: the everyday
'microaggressions' that grind us down, Japan
Times Online, 01/05/2012

Derald, W. S.

2010, Racial Microaggressions in Everyday Life,
Psychology Today

川村千鶴子

2001「創造する対話力—多文化共生社会の航海術」
税務経理協会

ギュレメトヴ ニコライ

ブルガリア生まれ。鹿児島市在住。鹿児島大学文社会
科学研究科国際総合文化論専攻修了。

幕末薩摩藩の対外関係に関する一考察

——薩英友好関係の構築と発展——

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース 1 年
橋口 正樹

1. はじめに—本報告の目的

文久二年（1862）、武蔵国生麦村（現：神奈川県横浜市鶴見区生麦）において、島津久光の行列に騎馬で乱入したイギリス人を、供回りの藩士が殺傷するという事件が発生した。世に言う生麦事件である。この事件を受けて翌年には薩英戦争が勃発、イギリス側においては戦艦の乗員が戦死あるいは負傷したことによる人的被害が目立ち、一方で、薩摩側においては城下町の一部を焼失したように物的被害が大きかった。双方痛み分けの形で講和へと至ったが、その結果として後の薩英友好関係の構築に繋がったことを鑑みれば、確かに生麦事件及び薩英戦争は日本と西洋の価値観が衝突した末の悲劇だったが、図らずも薩摩藩とイギリス双方がお互いを「受容」するきっかけになったとも言えるのではないかな。

その後、両者の関係は一層親密なものになり、薩摩藩英国留学生の派遣（慶応元年・1865）や鹿児島紡績所の開業（慶応三年・1867）など様々な展開を見せたが、これらは、薩摩藩が薩英戦争後に、手を組むべきパートナーとしてイギリスを選び、「共生」の道を歩む過程での産物であったと言える。その中でも、慶応二年（1866）の英国公使ハリー・パークス¹の鹿児島訪問は、生麦事件から薩英戦争を経て、薩英友好の機運が高まる中で象徴的な出来事とされている。

本報告では、当時の史料を基にパークス一行の鹿児島訪問の実態を明らかにすることで、薩摩藩とイギリ

スが友好関係を構築し、相互交流（相互受容）を重ねることで関係を発展・深化させていく過程を考察する。

2. 鹿児島訪問の前段階—口永良部島の英商館

慶応元年（1865）の頃まで口永良部島には英商館が存在し、薩摩藩はそこを拠点にイギリス人相手の密貿易を行っていたという。密貿易という性質上、史料は残されていないが、以下のような古老の話が伝わっている。

一、藩廳にては帆船をして、日本海を経て北海道に航さしめ、昆布、其の他の海産物を移入し來り、更に鹿児島より米穀醤油の如きものを満載して、口永良部島に於て茲に假住する英人と交易をした。

一、其の當時彼等の使用したものは何物をも残さぬことにした。之より先加賀金澤に於いて、錢屋五兵衛なる者密貿易を營み、事露見に及び遂に牢死するに到つたが、此の事早くも我が藩廳に聞えたので、同島の密貿易所たる英國人居住の洋館は唯の一日で取毀し殊更にその趾を湮滅したので、器材等何物をも残さない。

⇒但し、五兵衛の牢死は嘉永5年（1852）なので、商館の取り壊しが慶応元年頃だとすれば約13年の差がある。直接的な影響があったとは考えにくく、幕府の追及を逃れるために取り壊したとする方が自然²。

1 ハリー・スミス・パークス（1828～1885）：英国の外交官。1865（慶応元）年から1883（明治16）年まで駐日英国公使を務めた。

2 若林喜三郎『新版銭屋五兵衛』（北国出版社、1982年）。

一、當時英人の主任とも云ふべき者同島の婦人を入れて妾とせしと云ふ。

一、英人の飲料として携帯せるものは、麥酒、葡萄酒、ブランデーの如きものなりしが如し。

一、昔は口永良部島の密貿易を一口に白糖方^{はくとうほう}と稱した。一時白砂糖を製したことがある由。(後略)³

薩摩藩は日本海経由で帆船を北海道まで航行させ、昆布その他の海産物を入手、更に鹿児島からは米穀・醤油等を運び、口永良部島において英国人と取引していたという。そして、そこに加賀金沢の商人銭屋五兵衛の廻船が寄港して抜荷取引(密貿易)を行っていたとされている⁴。

しかし、五兵衛の牢死以前の時期に英国と薩摩の関係が見られたとするのは現実的ではなく、口永良部島での五兵衛の取引自体も島民に直接伝承されていたわけではない⁵。更に、上述のようにこれを裏付ける史料も存在しないので、その信憑性については疑問が残る。

ただ、この記述を見る限りでは、密貿易という形ではあるが、薩摩藩とイギリスが緊密な関係を築きつつある様子うかがえる。商館自体がいつから置かれたかは定かでないが、わざわざ商館を建設したというよりは、元々他の目的で存在した建物を商館として転用したと考えるのが自然ではないか⁶。商館としての機能を持つようになったのは、やはり両者が関係を深めた薩英戦争以降と考えるのが妥当だと考えるが、その場合、商館が機能していたのはわずか2年足らずということになる。いずれにせよ、口永良部島での密貿易に関しては詳細が明らかではなく、更なる考察の必要がある。今後の課題としたい。

3. パークス一行の鹿児島訪問

3.1 藩内への注意喚起と意識統一

英国公使パークス一行の鹿児島訪問が決定したところで、薩摩藩では家老の名で達書が出されている。それらはいずれも、鹿児島訪問に際して失礼な振る舞いがないよう注意を喚起し、藩内の引き締めを図ろうとするものであった。まず、以下に示すのは、慶応二年五月十五日に家老新納久脩^{ひさのぶ}の名で出された達書である【史料1】。(傍線及びカッコ内は筆者による。)

【史料1】英国公使来ニ就テ達書

英国軍艦、近々長崎ヨリ前之濱へ来着之賦ニ候、右ハ御両殿様(島津久光・茂久)深 思召之訳被為在、於彼ハ重任之者乗組居、夫々至当之御会釈被為在筈候、尤軍艦之儀ハ、何ソ祝事向等付、祝炮打候万国通例之式礼ニテ、於此御方モ右仕向ニ応シ発砲相成筈ニ付、自然人心動揺騒々敷成立候テハ、屹ト不相済候間、一統右之趣明察平易可罷在候、依時機上陸被差免儀モ可有之候間、万一^{そぼう}兇暴之振舞有之、御難題筋釀出候儀共致到来候テハ、別テ不容易事態、剩御命令不被為行届場ニ相当リ、万国中ヘノ御国恥何共奉恐入候間、決テ見物ケ間敷ハ勿論、聊不勘弁之儀有之間敷候、此旨向々ヘ申渡、末々之者共ヘハ奉行・頭人・主人ヨリ^{きつ}屹ト可申渡候、

寅五月十五日

刑部(新納久脩)⁷

傍線部に着目すると、まず「右ハ御両殿様深 思召之訳被為在」とあるが、これは「右(パークス一行の鹿児島訪問)は御両殿様の深い思い入れがあつてのことなので」と解釈することができ、薩英親善が御両殿様の意思によるものだということを初めに述べることで達書により重みを持たせていると考えられる。次の傍線部「万一^{そぼう}兇暴之振舞有之、…屹ト可申渡候」は、「万一粗暴な振る舞いがあつて国際問題になるようなことがあったら、それは由々しき事態であり、御両殿様の顔に泥を塗るばかりか、世界中に日本(薩摩)の恥を晒してしまう。だから、一行を軽々しく見物するのは勿

3 和田佐也「口永良部島と銭五の密貿易」(『三州』昭和13年8月号)。

4 川島元次郎「銭五の密貿易船の行方を尋ねて」(満川亀太郎『南国史話』平凡社、1926年)。

5 深井甚三「銭屋五兵衛と抜荷」(富山大学人間発達科学部紀要2(2)、2008年3月)。

6 藩政期、口永良部島は屋久島と共に屋久島在番奉行という責任者の下で統治されており、口永良部島在番と呼ばれる現地役人も存在した。また、外国船監視のための「異国船番所(御番所)」も設置されており、屋久島在番奉行の口永良部統治の拠点を兼ねていた(『上屋久町郷土誌』、P189～194)。

7 『鹿児島県史料 忠義公史料』第四巻、P125。

論、許されざる事が少しもあってはならないという旨をここに申し渡すので、末端の者へは奉行や頭人、主人からしっかり申し渡しなさい。」ということであり、強い調子で厳命しているのがうかがえる。

パークス一行を招待するにあたって、藩の上層部には一抹の不安があった。当時、薩英戦争から三年ほどが経過していたものの、戦争により町を焼かれた一般庶民、あるいは藩内部にも、未だイギリスに対する憎悪の念が拭いきれず、友好を深めることをよしとしない人々が存在したであろうことは想像に難くない。藩当局は、そうした者たちがパークス一行に対して非礼な行動を起こすのではないかと危惧していたのである。

新納の達書の翌月、今度は同じ家老の喜入久高の名で達書が出されている【史料2】。

【史料2】英国軍艦渡来ニ付

此節英国軍艦渡来ニ付テハ、水師提督并公使乗組居、近日ノ内磯御茶屋江モ被招呼候ニ付テハ、御両殿様深キ 思召之訳被為 在、態々被招呼候儀ニ有之、時宜ニ依リテハ乗組兵隊上陸調練被付 御覧可被遊、又ハ諸所見物ヲモ被差許儀モ可有之候ニ付、若年之者共粗忽之儀共万一有之候テハ、決テ不相済訳候条、親兄弟又ハ身近キ親類等ヨリ不行儀共無之様厳敷申聞、御受書可為差出候、其上ナカラ若不行儀共有之候ハ、其身ハ勿論親兄弟身近キ者迄モ、屹ト可及迷惑候、此旨銘々組頭ヨリ厚ク可申渡候、

但調練之節ハ見物致候儀ハ不苦候、

(慶応二年) 六月 日 撰津(喜入久高)⁸

大意としては新納の達書とそれほど変わらない。ここでも傍線部に着目すると、初めの「御両殿様深キ思召之訳被為 在」は新納の達書とほぼ同じである。しかし、次の傍線部「若年之者共粗忽之儀…厚ク可申渡候」は新納に比べると若干趣が異なる。解釈すると「万一、若年の者たちが粗相をするようなことがあっては、決してただでは済まされないので、不行儀な振る舞いがないように、彼らの親兄弟や親類が厳しく論

し、受書を出させなさい。それでもなお不行儀があつては、彼ら自身は勿論、親兄弟や身近な者にも迷惑が及ぶので、この旨を組頭より各自へ厚く申し渡しなさい。」ということで、全体として、若年の者たちが血気に逸って軽挙に走ることがないように、彼らの親兄弟に諭させるべき旨が書かれている。文中の「御受書」は、恐らくは誓約書のようなものではないだろうか。

もう一つ着目すべきは最後の「但調練之節ハ見物致候儀ハ不苦候、」という記述である。「但し、調練の時は自由に観覧して構わない」という意味だと考えられるが、新納の達書で見られた「決テ見物ケ間敷ハ勿論、聊不勘弁之儀有之間敷候、」という記述と比較すると藩当局の方針転換がうかがえる。この方針転換にはどのような背景があったのだろうか。

喜入の達書には、続けて以下のような記述がある。「〔前略〕從覧^{ゆる}允サレタルハ、藩庁ニ於テ厚ク議スル処アリ、若シ之ヲ制止スルトキハ、少壮ノ輩却テ忿^{いか}ル処アラン、寧ロ允シテ從観セシメ、而シテ警誡^{いか}ヲ嚴ニセンニ若シトノ議ニ出タリト云フ、〔後略〕」

つまり、「調練の観覧を許可することについては、藩庁にて大いに議論されるところであつたが、もし観覧を禁止しては、かえって若年の者共を怒らせることになるので、むしろ許可して自由に観覧させ、その代わりに警備を厳重にするべきだ、との結論に至った」ということである。パークス一行に気を遣つてのこととは言え、当初の強硬な姿勢からすると大分譲歩した妥協策であり、また、賭けでもあつた。

ただ、その懸念は杞憂に終わったようである。「〔前略〕然ルニ諭達ノ如ク、少年ノ輩モ循守シテ、敢テ異状ナク、穏静ニシテ観覧セルニハ、英人モ大ニ感賞ノ言ヲ述タリト云フ、国老其他吏員ハ大ニ杞憂ノ心ヲ用ヒシニ、豈ニ料ラン静々瀟々タリシニハ、意外ノコトナリシト云フ、〔後略〕」とあるように、彼らは諭達を遵守して静かに調練を観覧し、その様子にイギリス人達も感心したという。

新納・喜入の達書が出された後、六月になると具体的な招待次第書が出され、藩内の歓迎ムードの高まりが感じられる。その構成としては、①「遠客廻船ニ付御次第(一行の接待次第 - 料理・御囃子の準備、集成館視察、家老衆以下接待役の服装等)」、②「遠客廻

8 『忠義公史料』第四巻、P182。

船ニ付手當之事（接待準備 - 一行の出迎え、町役への街路清掃の指示、各所での給仕の手筈等）⁹、③「祝砲（祝砲や軍事訓練の手順 - 祝砲撃ち方、演習視察時の対応及び演習場での接待）」の三つに分かれていた⁹。

こうして、歓迎の準備が整いつつある鹿児島へ向けて、一行を乗せたプリンセス・ロイヤル号、サラミス号、サーペント号の三隻の船団が長崎を出帆したのは、慶応二年六月十五日のことであった。

3.2 鹿児島での日々

慶応二年六月十六日、英国公使パークス一行が鹿児島を訪れた。薩摩藩では藩主茂久（のちの忠義）やその父久光を筆頭に、藩を挙げてパークス一行を歓待しており、歓待の様子が当時の新聞記事に以下の通り詳細に記されている【史料3】

【史料3】

「〔前略〕二十六日（7月26日）午後、鹿児島ヲ去ルコト八九里ノ所ニ投錨シ、…陸上ノ台場ノ英ノ国旗ヲ引揚ケ、十五発ノ祝砲ヲ為セリ、…午後シルハルリパルクス并ニ水師提督諸士官ト共ニ上陸シ、…市中ヲ巡行セシニ、其様子他ノ日本ノ都府トハ更ニ相異ナリ、其一條ヲ言ヘハ、江戸市中ニテ外国人ヲ見レハ、往来ノ人皆苦々敷顔色ヲ為シ、或ハ大声ヲ発シテ、粗暴ナル挙動ヲ示スノミナルニ、鹿児島ニテハ然ラス、市中ノ人余輩ニ逢ヘハ、笑ヲ含ミ懇親ニ挨拶ヲ為シ、談話甚愉快ナリ、…侯（茂久）ノ様子ヲ見ルニ身体長大、骨格強壯ニシテ、自ラ君将ノ威風ヲ備ヘリ、其顔色純粹ノ日本人ニテ、眼目長シテ斜ナリ、嘗テ日本人ノ図画ニ見タルト異ナルナシ、島津三郎（久光）…此人ハ薩侯ヨリモ身体短クシテ肥大、其挙動ハ…勇武ニシテ君主ノ風アリ、蓋シ三郎ハ、日本国中ニテ最モ才略アル政事家ノ一人ト云ヘル人物ナリ、…翌日…城内ニ入り、ハルリパルクス并水師提督ハ、…嶋津三郎并ニ薩侯ト語話シ、…既往ノ事ハ既往ノ事トシテ、後来双方ノ間ニ好誼懇親アラントノ趣ヲ告ゲタリ、…半時計ニシテ談判終リ、一統一ト間ニ集リテ饗応アリ、此饗応

ニハ四十五品ノ珍味ヲ供ヘ、其調理日本ノ精巧ヲ極メ、日本酒・チャンパン・セリ・ヒール備ラサル者ナシ、…ハルリパルクス…宴ヲ撤シテ園庭ヲ見物センコトヲ請ヒ、…山水明媚之ヲ観テ、帰ルコトヲ忘ル、程ノ景色ナリ、…翌日製造局（集成館）ニ行キシニ、…午後第四時侯ノ兄弟五人ニテ欧羅巴流ノ料理ヲ馳走セリ、…第三日プリンセスロイヤル船ニテ、調練発砲シテ、薩侯及ヒ其五兄弟ニ見物セシメタリ、…ハルリパルクスハ、サラミス船ニ乗テ出帆セントシ、別ヲ告ケタルニ、嶋津三郎ハハルリパルクスノ手ヲ取テ別ヲ惜ミ、速ニ再会センコトヲ懇ニ述ヘ、終テ台場ヨリ十五発祝砲セリ、…此日ハ大ニ遊獵シ、朝三時ヨリ始メ、英ハ二十人・日本人四拾人ニテ、海湾ヨリ六里計ノ地ニ到リシニ、此地ハ横濱近傍ノ地勢ニ似テ、樹木繁殖テ猪・猿ノ類多シ、獵犬勢子ヲ以テ追立テ、鹿七疋・猪四疋ヲ獲タリ、本日ハ家老ニテ余輩ヲ饗応シ、翌日告別シテ出帆ノ時水師提督ノ旗章ニ祝砲シ、プリンセスロイヤルヨリ之ニ応砲セリ、…シルハルリパルクスガ此度鹿児島ニ行キシハ、甚善キ取計ナリ、…薩摩侯ハ日本国中最モ文明寛大ノ君ト云フベシ、…¹⁰」

この記事の他にもパークス一行の鹿児島滞在に関する記述は比較的多く残されており、当時の具体的な交流の様子をうかがい知ることができる。ここでは敢えて傍線部の箇所に着目したい。

最初の傍線部「市中ヲ巡行セシニ、…談話甚愉快ナリ、」は、「鹿児島城下に上陸して市中を見物していると、日本の他の町とは様子が違っていた。それを敢えて1つだけ言うならば、江戸市中においては、外国人を見るや道行く人々は皆苦々しい顔をするか、あるいは大声をあげて粗暴な振る舞いに及ぶばかりであったのに、鹿児島においてはそれが見られず、むしろ市中の人々は自分たちを見ると笑顔で懇ろに挨拶をして、気さくに話しかけてくれた。」と解釈することができる。

このようにして、人々が彼らなりに歓迎の意思を示したということは、藩にとっては計算通りであった

9 「英人招待次第書」（『鹿児島県史料 玉里島津家史料』四、P633）。

10 「英国公使鹿児島二来ル（外国新聞抄訳）」（『忠義公史料』第四卷、P251）。

が、一方で嬉しい誤算であったかもしれない。くれぐれも失礼な振る舞いがないよう、重ねての達書で念を押してはいたものの、実際人々がパークス一行を見かけてどのような反応をするか、大いに心配していただろう。しかし、人々の反応を見る限り、何の抵抗もなくパークス一行を歓迎しているのは明らかである。達書が奏功したのは勿論だが、薩摩の人々が持つ大らかさや異文化への寛容さが垣間見えた場面であったようにも感じられる。

次の傍線部は、この訪問のハイライトとも言うべき、全45品、延べ5時間にも及んだ大宴会に関する記述である。

当時の献立が以下の通りに残されている【史料4】。

【史料4】英国公使パークス一行招待献立書

遠客参上付御献立

- 一 御熨斗
- 一 御茶
- 一 御菓子 紅木工造 切竹
駿河の里
- 一 御吸物 鯛切日 鰯

御掛盃

- 一 御銚子
- 一 御肴 鯛刺肉
若はし
- 一 絵御盃

(中略)

御料理之内
御五つ目

- 一 御春かん 鴨 舞草 芹
大明竹之子 水巻鮓
- 一 御鉢 鱈蒲焼
山 椒
- 一 御吸物 薄火取鯛 胡椒
之粉 初霜昆布
- 一 御井 鶏
新半蒟いり上

(中略)

御料理
御本膳之内

- 一 御坪皿 山吹鯛 ミヤ
うか 刺丁子
- 一 御井 海老 鰯 菊之
芽 生薬 付揚
- 一 御吸物 蒸蛤
木の芽
- 一 御井 むし章魚
葉 山 椒

(中略)

御間之御菓子
子 御碗盛

- 一 御菓子 琥珀糖 小倉
野 千代結

御料理三汁九菜

御鱈 鯛造り身 白毛大根
紫蘇 若はし 金柑

御汁 家鴨 松露
波牛蒡 嫁菜

御香物 味噌漬大根
奈良漬 高な漬

山吹鱈

御坪皿 蕪荷
刺丁子

御飯

御二

御平皿 小蒸鯛 しほり海老
重ね松茸 かさね鮓 紫蕨

御汁 鱈御身
焼昆布 ゆす

御大千代久 福多目 針生姜
紅くらげ 甘酢

御三

(中略)

御汁 片にし
紅 梅

御碗 花古多井
神馬藻 ゆす

御四ツ目

小鯛
振塩焼

御大皿 御猪口掛塩

御五ツ目

御春かん かも 舞茸
大明竹之子 水巻鮓 せり

御洲浜 一大蒲鉾
一伊勢蝦うに焼

御肴 巻玉子

御吸物 熨斗 青みる
半弁 ひれ

御掛盃

御盃土器 鳥台
高砂

御押 鯛 水から昆布
花三方 花鳥飯

御茶菓子 紅牛肥
川茸 水栗

御濃茶

御茶菓子 相生羹 翁糖
鶴寿糕 最中月 紅吹よせ

御薄茶

御間之御菓子

御煮染 甘鯛合焼 甘露梅
湯葉香々 酢浸若はし

御碗盛 琥珀糖
小倉野 千代結

御猪口氷卸

一 御菓子 菅原羹
西王母

御後段

御千代久氷卸

御碗 紅浮鮓
八重成下地

御小皿漬大根

御吸物 そはろ 湯引
多井 紫蘇

やはり品数の多さが目を引くが、それ以外にも特徴的な点が多々ある。まず、郷土料理・郷土菓子が随所に見られる点である。例えば、三番目の御菓子に「紅木工羹」というものが見られるが、これは、鹿児島の郷土菓子の一つである「もくめ空目かん」のことではないか。もっとも、現在は「きもくかん」あるいは鹿児島弁で「きもっかん」とも呼ばれているが、この当時は「空目かん」と表記されていたらしい。厳密に言うと、「木工羹」を「もくめかん」とは読めないが、斉彬期以降、「紅もく目かん」なるものが作られるようになり、斉彬の初入部の記録に頻出していた¹²ことから、恐らくは「紅木工羹＝紅もく目かん」であろう。また、「御春かん」という料理が二回出されているが、これも「しゅんかん（筍羹・筍寒・春羹）」という郷土料理のことで、いわゆる煮しめである。さらに、中盤に見られる「御井」は、やはり郷土料理の「酒寿司」のことではないだろうか。海老やきす鱈といった魚介類、つけあげ（さつまあげ）が入っている点が酒寿司とも一致するが、紅木工羹や御春かんほどの確証は持てず、推測の域を出ない。とはいえ、郷土料理が随所に見られる中で、酒寿司が出されたとしても何ら不思議ではないだろう。

次に献立の様式に注目すると、中盤に「御料理三汁九菜」と書かれているのが見える。江後迪子氏によると、近世以降の島津家の饗応様式は、最初の本膳に七品、二の本膳に五品、三の本膳に三品が出され、三代將軍家光の桜田藩邸への御成の際に見られた最上級の七五三の膳から、関狩や馬追の際に見られた二汁三菜といった比較的簡素なものに至るまで多岐にわたっていた。その中で三汁九菜は、琉球王子の接待や大納言家重の若君出生祝い、二十六代齊宣の家督相続祝儀などの重要な場面で見られ、比較的格の高い様式であったという¹³。つまり、藩がパークス一行の接待を、

これらの事例と同じくらいに重視していたことが分かる。

菓子の存在も重要なファクターの一つである。菓子が六回出されているのが見受けられるが（御菓子三回、御茶菓子一回、御後菓子一回、御間之御菓子一回）、これもまた江後氏によると、茶菓子が出された上に後菓子が用意されるような菓子の数が多い献立は三汁七菜以上に多く、やはり將軍宣下祝いや琉球王子の接待など大切な饗応のときに見られたという。つまり、菓子の多少が献立の軽重を表していたのである¹⁴。

パークス一行の鹿児島での日々を概略的に振り返ったが、やはり随所に薩摩側の気遣いや心配りが見られたのが印象的である。そうした姿勢がイギリス側に好印象を与えたのは確かであり、滞在中の好誼に対してイギリス側から御礼状が送られた¹⁵ことも、薩摩に対する心からの感謝の表れであろう。藩を挙げての歓迎の甲斐あって、鹿児島訪問は成功に終わり、薩英双方の友好により一層弾みがついたのであった。

4. ウィリアム・ウィリスの存在

パークス一行の中で異質な存在とも言えるのがウィリアム・ウィリス¹⁶である。彼は生麦事件の際、医官として実際に現場に駆けつけて惨状を目の当たりにしていたので、最初鹿児島に行くことを頑なに拒絶していた。

鹿児島訪問後、彼は義姉のファニーに宛てて以下のような手紙を書いている。

「…私が感じていることをお伝えすると、私たちの薩摩訪問はかなり欺瞞的なもので、東海道でリチャードソンの殺害を命令した悪人（島津三郎）などと食事を共にするなんて、まともなことではありません。少なくとも私の立場なら、あんな悪人面は見たことがないという表現が許されるでしょう。もしも私が英国公使だったら、あんな人間からの歓待など絶対に受けな

11 『玉里島津家史料』四、P645～648。

12 江後迪子、岩田泰一『かるかんの歴史』（合名会社明石屋菓子店 岩田泰一、1999年）、P34。

13 江後『大名の暮らしと食』（同成社、2002年）、P80、203。

14 江後、岩田前掲書、P87。

15 「英国公使等ヨリノ挨拶状」（『玉里島津家史料』四、P712～720）。

16 ウィリアム・ウィリス（1837～1894）：幕末から明治維新にかけて日本での医療活動に従事したイギリス人医師（医学博士）。パークスの下で医官として働いた。

かったでしょう。魚料理に、気持ち悪い水のように見える酒の宴会が、吐き気のするほど長く続きました。魚に海藻、茸になまこなどの料理が40種類も。想像してみてください。これが日本のご馳走なのです。…私自身の感想は、親善のためとはいえ殺人犯と接触したのですから、我が身が穢れたような気分です。…鹿児島に別れを告げた時はほっとしました。しかし、鹿児島は大変風光明媚なところであることは認めざるをえません。…¹⁷⁾

島津三郎（久光）に対して相当な嫌悪感を抱いていることがうかがえる。しかし、彼は明治3年（1870）に西郷隆盛らの招きにより鹿児島医学校及び附属病院長に就任、翌年には薩摩藩士江夏十郎の娘・八重と結婚。明治10年（1877）、西南戦争勃発を機に東京に戻るまで鹿児島への医学の普及に貢献した。最初の出会いこそ最悪の形であったが、彼こそ薩摩における「受容」と「共生」の象徴的存在といえるかもしれない。

5. おわりに

「受容」という言葉の解釈は人によって様々である。私の見地から言えば、それまで敵対関係にあった薩摩とイギリスが、薩英戦争を経て互いの実力を認め合ったように、異なる価値観の下にある者同士が、時には衝突しながらも互いの存在を認識し、理解しようと努めることが「受容」ではないかと考える。全く価値観の違う者同士が会おうと、最初のうちは大なり小なり何かしらの軋轢が生じるものだが、生麦事件と薩英戦争も恐らくはそうだったであろう。そして互いの受容を経て、より成熟した関係性として「共生」に至る。薩摩藩がイギリスの力を借りて近代化に邁進する過程は「共生」そのものであり、本報告で触れてきたのは、そのような薩摩とイギリスとの「受容」と「共生」の過程であった。

初めにも述べたように、生麦事件及び薩英戦争は日本と西洋の価値観が衝突した末に起こった不可避の悲

劇であったと言える。ただ、図らずも薩摩とイギリスが出会い、お互いを「受容」するきっかけになったのも事実である。「昨日の敵は今日の友」という言葉があるが、その後の両者の関係発展を思えば、こうした過程を辿ったことは必然であったかもしれない。

幕末から明治維新をリードしたとされる雄藩（薩摩・長州・土佐・肥前）は、いずれも中央（江戸）から見れば周縁であり、中でも薩摩は本土最南端の「最周縁」に位置する。その薩摩が何故いち早く西洋という異質なものを取り込み得たのか。開明的な藩主（島津斉彬）の存在、薩英戦争のような外圧（長州にも通じる）など、理由はいくつか挙げられるだろうが、決してそれらのみに帰する問題ではない。地勢上、南に大きく開けた薩摩では、鉄砲やキリスト教の伝来、琉球との関係などその歴史は常に「海」とともにあった。海を介して様々な交流を重ねることで、異質なものを受容する素地が何かしら備わっていったと考えるが、推測の域を出ない。そうしたことも含めて、改めて薩摩の地域性を見つめ直す必要がある。今後の課題としたい。

近年、鹿児島においては、幕末維新期の顕彰に関する様々な動きが見られる。まず鹿児島市においては、2012（平成24）年から2018（平成30）年までの6年間にわたり、その年ごとに鹿児島と関わりが深い出来事を題材とするイベントを開催する「明治維新150年カウントダウン事業」を実施中である¹⁸⁾。折しも今年は薩摩藩英国留学生の派遣から150年、来年はパークス一行の鹿児島訪問から150年である。その英国留学生出航の地である、いちき串木野市羽島には昨年7月に「薩摩藩英国留学生記念館」が開館¹⁹⁾。さらに、「九州・山口の近代化産業遺産群」は、今夏の世界遺産登録に向けて既に秒読み段階に入っている。明治維新からまもなく150年が経過しようとしている現在、鹿児島でこのような顕彰の動きが活発に行われるのは、この時代を研究する者としては喜ばしい限りである。これから幕末維新史の更なる研究が成され、それに伴い多くの人々が関心を持ち、理解を深めていくことを願

17 大山 瑞代訳、吉良 芳恵解説『幕末維新を駆け抜けた英国人医師―甦るウィリアム・ウィリス文書―』（創泉堂書店、2003年）。

18 鹿児島市ホームページ。

19 いちき串木野市ホームページ。

いつつ、筆を擱くことにしたい。

参考文献

河内和夫

2006『玉里島津家文書』南方新社

宮澤眞一

1987『生麦事件 薩摩とイギリスの出会い』高城書房出版

1988『英国人が見た幕末薩摩』高城書房出版

大山瑞代訳（吉良芳恵解説）

2003『幕末維新を駆け抜けた英国人医師一甦るウィリアム・ウィリス文書一』創泉堂出版

アーネスト・サトウ（坂田精一訳）

1960『一外交官の見た明治維新』上 岩波書店

B・M・アレン（庄田元男訳）

1999『アーネスト・サトウ伝』平凡社

J・R・ブラック（ねず・まさし・小池晴子訳）

1970『ヤング・ジャパン 2 横浜と江戸』平凡社

E・V・ディキンズ（高梨健吉訳）

1984『パークス伝 日本駐在の日々』平凡社

飯田 鼎

1995『英国外交官の見た幕末日本』吉川弘文館

萩原延壽

1998『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社

深井甚三

2008「銭屋五兵衛と抜荷」富山大学人間発達科学部紀要2（2）

川島元次郎

1926「銭五の密貿易船の行方を尋ねて」（満川亀太郎『南国史話』平凡社）

若林喜三郎

1982『新版銭屋五兵衛』北国出版社

和田佐也

1938「口永良部島と銭五の密貿易」（『三州』昭和13年8月号所収、三州社）

川越政則

1949「口永良部物語り」（『産業南日本』昭和24年8月号所収、南日本新聞社）

安山 登

1966『口永良部島の歴史』

上屋久町郷土誌編集委員会

1984『上屋久町郷土誌』

江後迪子

2002『大名の暮らしと食』同成社

江後迪子・岩田泰一

1999『かるかんの歴史』合名会社明石屋菓子店 岩田泰一

参考史料

『鹿児島県史料 玉里島津家史料』四

『鹿児島県史料 忠義公史料』第四卷

はしぐち まさき
橋口 正樹 鹿児島県生まれ。鹿児島市在住。鹿児島大学人文社会科学部研究科博士前期課程修了。

律令国家形成期における蒸し調理技術の境界

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース 1 年
松崎 大嗣

はじめに

本発表の目的は九州南部において甗を使用した蒸し調理がどのように受容され、在地の調理技術と共生したのかという点を明らかにし、蒸し調理技術の境界を検討することである。

古墳時代中期に、渡来系集団によって「竈・長胴甗・甗」を基本的なセットとした「蒸す調理方法」が日本列島にもたらされた。この蒸す調理方法は、人々の食生活に新たな調理技術を加えた点で大きな画期と言える（宇野 1999, 亀田 2003）、近畿地方の渡来系集落における外来の調理様式や土器製作技術の受容過程などについても研究が進展している（大庭ほか 2006, 中久保 2009, 中野・中久保 2013 など）。また、この新しい調理方法の導入後は、東日本・西日本を問わず米を蒸す調理方法が日常食として普及していた可能性が高いことも指摘されている（望月 2006, 小林 2008, 2014）。

全国的な蒸し調理技術の復元および普及過程について研究が進展する一方、九州南部では甗形土器（以下、甗）と竈の出土が少なく、先行研究では「造り付け竈、移動式竈、甗のいずれもがその受容を拒否される」（杉井 2004；p.309）とあるように、基本的に大陸系の蒸し調理方法は行われなかったとする考え方が一般的であった。しかし、近年の発掘調査例からは、甗の出土数も増加しており（藤井 2012）、旧来の認識を再検討する必要があると言える。

九州南部において古墳時代～古代初頭の土器様式は、成川式土器と総称され、突帯や脚台をもつ甗、幅広突帯を巡らす大型壺などがよく知られている。特に脚台をもつ甗に関しては、その使用方法が炉に伴うものであり、基本的に成川式土器の終焉は竈の導入に

よって起こるものと考えられてきた（平田 1978）。そのような在地伝統的な生活を送っていた社会の中で外来系の蒸し調理の受容過程を検討することは、人々の生活様式の変化や外来系文化との関係性を考える上でも重要であると考ええる。

1. 対象資料

【対象地域】 えびの盆地

【対象時期】 6 世紀後半から 7 世紀初頭

【対象資料】 えびの市天神免遺跡における住居跡出土の甗、甗（甗 A 類に関しては、口径が復元できるもの、甗 B 類・C 類については頸部径が計測できるもの、甗についてはススの付着が認められ二次的被熱を受けていないものを対象とする。

2. 分析方法

甗を使用するためには、底部にスノコを敷き、水の入った甗に設置する必要がある。九州南部以外の地域では、竈・甗・甗といった 3 点のセット関係で調理が行われるが（図 1）、天神免遺跡では造り付け竈・移動式竈は検出されていないため、別の調理方法を想定しなければならない。

そこで、まず天神免遺跡出土の甗の形態的なバリエーションを確認するために、杉井健による甗の分類（杉井 1994・2002）を参考に、分類を行う。その後、甗に付着したススの下端径、甗の頸部径・口径を計測することによって、甗がどの甗に設置されて使用されたかを検討する。最終的には、天神免遺跡の事例をもとに、えびの盆地以外の地域（ここでは現在甗の出土が認められている都城盆地・肝属平野を対象とす



図1 大阪府伏尾遺跡のカマド使用方法（財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1993）

る）の甑の導入過程・使用方法について言及する。

（1）甑の分類

杉井による分類を参考に以下の4類に分類した（図2、表1）。九州南部では、在地土器様式である成川式土器の影響を受け、突帯や文様をもつ甑が出土している（藤井 2012）ため、これらも分類の基準とした。

- A-1 類：つつぬけタイプ把手無甑
- A-2 類：成川系つつぬけタイプ把手無甑
- B-1 類：棧（半月孔）タイプ把手無甑
- B-2 類：成川系棧（半月孔）タイプ把手無甑

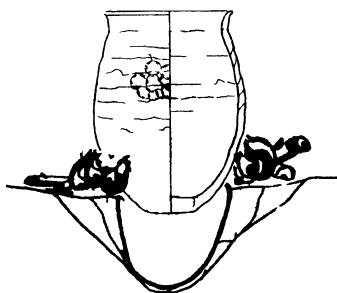


図3 土器埋設炉の使用想定図（今塩屋 2004 より引用）

（2）甑の抽出基準

資料を抽出する際の基準として、甑に残された使用痕から使用状況を把握するために、a) 全体形が復元できるもの、b) 二次的な被熱を受けていないと考えられる「土器埋設炉」（図3、今塩屋 2004）として使用されたものを抽出した¹（表1）。

（3）天神免遺跡から出土した甕の分類

天神免遺跡から出土する甕は、器形から大きく以下の3つに分類することができる（図4）。

A 類：中村編年（中村 1987）における笹貫式甕に比定できるもの。口縁が開くバケツ状の形態を呈し、口縁部形態が内湾する

B 類：肩部は張らず、胴下部から口縁部まで緩やかに外反するもの。

C 類：成川式土器の甕の要素である突帯と、土師器甕の要素である屈曲する頸部をもち、胴部が張る。下山寛によって報告された「成川式土器と土師器の折衷型」（下山 1992・1993）として位置づけられる。

（4）甑に付着した帯状ススの径を計測

天神免遺跡出土の甑には帯状ススが付着しているものが多い²（図6）。これは、甑がなんらかの形で被熱した状態を表していると考えられる。そのため、「帯状ススの下端径」を計測し、分析方法（3）で分類した甕との組み合わせを検討する。

（5）天神免遺跡から出土した甕の口径を計測

天神免遺跡で出土した甑は、分析方法（3）で分類した甕の上部に設置され、使用されていたことが予想される。そのため、甑が甕に設置されたと想定される部分（甕 A 類：口縁部径、甕 B・C 類：屈曲部）の径を計測し、甑に付着したスス下端径との相関関係を検討する。

1 「土器埋設炉」に転用された甑は、土中に埋没しており、「土器埋設炉」として使用される際は、胴中部・胴下部に二次的な被熱を受けないことから、使用時の状況を表しているものと判断した。
2 基本的に竈で甑を使用する場合は、甑外面にはススが付着しないことが指摘されている（外山 1989）。

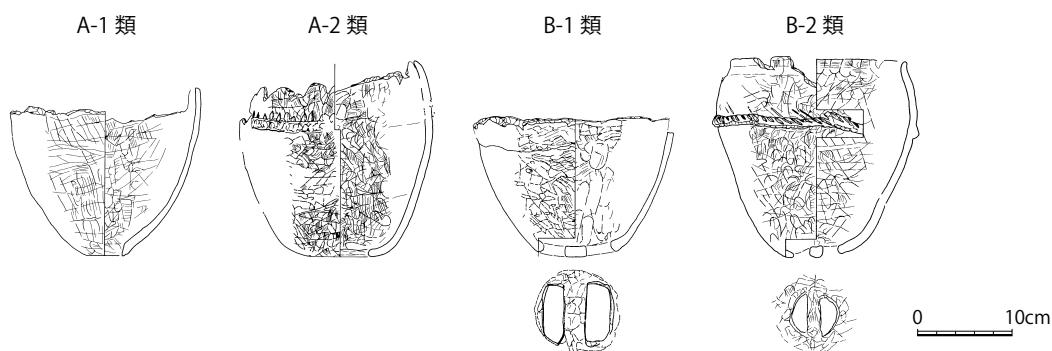


図2 神免遺跡出土甑の分類 (S=1/8, 中野 2010 をもとに作成)

3. 分析結果

笹貫式甑の口径と、くびれ甑・折衷甑の頸部径、甑に付着したスス下端径を比較した。その結果、笹貫式甑の平均口径は約248mm、くびれ甑頸部の平均径は

約234mm、折衷甑頸部の平均径は約136mm、スス下端の平均径は約154mmという結果となった。しかし、いずれの径にもばらつきが認められるため、最大値、最小値の測定値をもとに箱ひげ図を作成し、グラフ上で比較を行った。(図5)。その結果、スス下端径と近

表1 天神免遺跡出土甑一覧

遺構	遺物番号	出土状況	分類	穿孔部形態	突帯・文様	使用痕跡		欠損	備考
						外面	内面		
SA-06	79	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	刻目突帯	帯状スス	ヨゴレ	口縁部	
SA-07	93	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	円形ヨゴレ	口縁部	
SA-28	702	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目・突起	帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-31	783	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	帯状ヨゴレ	口縁部	甕C共伴 (773・775)
SA49	1299	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-52	1373	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状ヨゴレ	帯状コゲ	口縁部	
SA-57	1427	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状ヨゴレ	帯状コゲ	口縁部	甕C共伴 (1421), 入れ子状土器埋設炉
SA-62	1550	土器埋設炉	A-1	つつぬけ				口縁部	
SA-66	1610	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	ヨゴレ	口縁部	甕C共伴 (1672)
SA-70	1676	土器埋設炉	B-1	栈渡し		ヨゴレ		口縁部	
SA-74	1705	土器埋設炉	B-1	栈渡し		帯状スス	帯状コゲ	口縁部	甕C共伴 (1693)
SA-75	1755	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-94	2050	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状ヨゴレ	帯状コゲ	口縁部	
SA-96	2126	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-96	2127	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	ヨゴレ	口縁部	住居拡張後の土器埋設炉
SA-101	2249	土器埋設炉	B-1	栈渡し		帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-106	2423	埋土	A-2	つつぬけ	器体刻目			口縁部	甕C共伴 (2411)
SA-117	2846	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状ヨゴレ	ヨゴレ	口縁部	甕C共伴 (2843)
SA-121	2902	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	刻目突帯		帯状ヨゴレ	口縁部	
SA-122	2912	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状スス	帯状コゲ	完形	
SA-125	2955	土器埋設炉	B-2	栈渡し	刻目突帯	帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SA-125	2979	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状スス	帯状ヨゴレ	口縁部・胴部	
SA-139	3210	土器埋設炉	B-2	栈渡し	刻目突帯	帯状ヨゴレ		口縁部	
SA-144	3272	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目		ヨゴレ	口縁部	
SA-148	3336	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目・把手			口縁部	
SA-157	3616	埋土	A-2	つつぬけ	器体刻目	帯状スス	帯状ヨゴレ	完形	甕C共伴 (3594-3596)
SA-170	3888	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	器体刻目	ヨゴレ	帯状ヨゴレ	口縁部	土器埋設炉併設
SA-189	4114	土器埋設炉	A-2	つつぬけ	突起	帯状スス	帯状コゲ	口縁部	
SK-712	4314	土器埋設炉	A-1	つつぬけ		帯状スス	帯状コゲ	口縁部	土器埋設炉併設

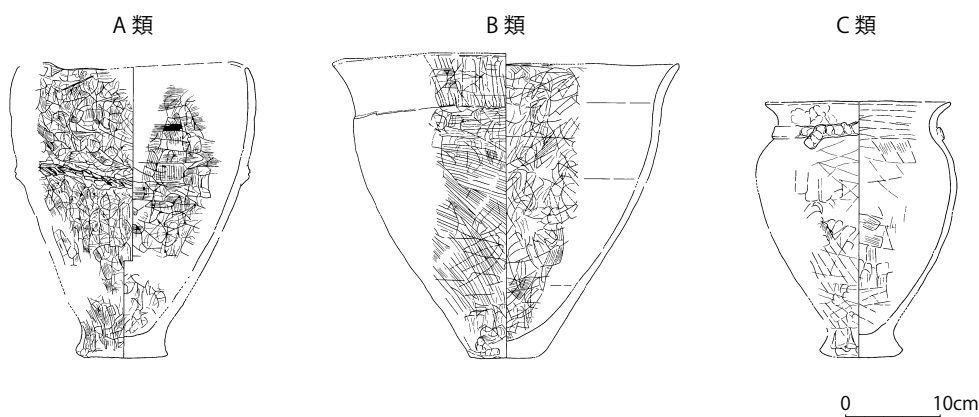


図4 天神免遺跡出土甕の分類 (S=1/8, 中野 2010 より引用)

似した値を示すものは甕Cの頸部径であり、甕A・甕Bには近似しないという結果となった。

また、内面の使用痕跡にも着目した結果、29点中16点において底部から7～13cmの高さにおいて、帯状コゲやヨゴレがみられた。このヨゴレの実体については特定されていないが、使用時の内容物の成分が染み付いた可能性が指摘されていることから(外山1990)、何らかの食物を蒸した証拠として考えたい。

4. 考察

(1) 甕の使用方法

分析結果から甕のスス下端径と整合性をもつ甕は甕C類であることが明らかとなった。この結果から、くの字に屈曲する「折衷型」甕が、甕を使用する際にもつ

ともふさわしい器形であることが推察される。甕A類・甕B類のように器形がバケツ状を呈する甕では、同形の甕を乗せようとしても容器内に深く没入してしまい、調理を行う上で適正な器形とは言えない(岩崎1966, 中村2004)。そのため、甕の上部に甕を乗せて使用するには、甕C類のような屈曲した口縁をもつ器形が最も適していると考えられる。また、甕外面には厚くススが付着している個体もあるため、竈を使用したのではなく、炉に甕C・甕を設置し、直接火を受けるような調理を行っていた事が想定される。

(2) 甕Cの成立背景

当該期の九州南部では、口縁部が内湾する笹貫式甕が一般的に製作・使用される。そのため、甕Cは、これまで当地域では製作されていない器形であり、他地域の土師器の特徴である「屈曲する頸部」を持ちつつも、文様帯という成川式土器の要素をもつことから、「折衷型」甕として位置づけられてきた(下山1992, 1993)。そこで、以下からは甕Cの成立背景について考察したい。

筆者は以前、指宿地域の「折衷型」甕の製作技法に着目し、九州南部の人々が外来系の文化とどのように接触したのか検討を行ったことがある(松崎2014)。その結果、「折衷型」甕は他地域の土器の形態的模倣だけでなく、製作技術についても模倣し、製作されていることが明らかとなった。この結果から、独自性の強い社会を営んでいたと考えられていた九州南部においても、外来系の文化とは必ずしも排他的ではなく、ある程度の文化的接触を通してみずからの生活様式を

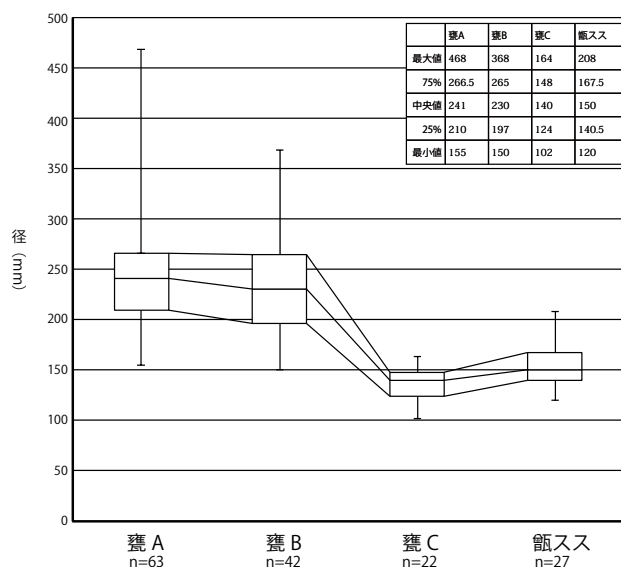


図5 各種甕の口径・頸部径および甕のスス下端径の比較

	北薩地域・えびの盆地	都城盆地・肝属平野
五世紀中頃～後半	甕 A 類 	甕 A 1: 下鶴遺跡 17 号住居, 2: 麦之浦貝塚 1 号住居, 3: 佐牛野 SA3, 4: 天神免 SA57, 5: 天神免 SA28, 6: 天神免 SA74, 7: 佐牛野 SA9, 8: 天神免 SA170, 9: 天神免 SA148, 10: 天神免 SA101, 11~13: 大 島 6 号住居, 14: 大島大型竪穴状遺構, 15: 東田 13 号住居, 16: 外戸口 3 号住居, 17: 中尾 4 号住居, 18: 安楽 1・2 号住居, 19: 上苑 A5 号住居, 20: 中 尾 4 号溝状遺構, 21・25: 鶴喰 6 号住居, 22・24: 鶴喰 24 号住居, 23: 鶴喰 23 号住居, 26: 飯六 8 号 住居, 27・28: 宮脇包含層
六世紀前半		
六世紀後半	甕 C 類 甕 A-2 甕 B-1 	
七世紀前半	 	甕 C 甕 A-1 甕 C-2
七世紀後半		
八世紀	 	 ※甕 C 類は底部穿孔形態が、「棧渡し 用小円孔タイプ」、甕 D 類は「把手 付きつづぬけタイプ」

S=1/20

図 6 北薩地域・えびの盆地および都城盆地・肝属平野における甕の出現

確立させていたと結論づけた。

上記の検討と今回の分析結果を統合すると、「折衷型」甕成立の背景には「外来系の調理方法である蒸し調理を導入する際に、他地域の土器の形態や製作技術を在地の土器生産に組み込んだ結果」と解釈することができる。つまり、甕を用いた蒸し調理を行うためには、在来の笹貫式甕ではその使用が困難となることから、外来系の土器製作技術・器形を模倣する必要性があり、甕を用いた蒸し調理を行うための機能的な変化

であることが考えられる。このように外来系の文化を受け入れつつも、一方では九州南部在地の土器製作において普遍的にみられる「突帯・装飾の付加」を行っており、機能的側面に影響しない部分では在地の土器製作技術を踏襲していたと言えるだろう。

以上のような甕と甕 C が連動した変化は、えびの盆地に限定されたものではなく、都城盆地・肝属平野でも 7 世紀の前半に同様の現象が認められる (図 7)。よって、都城盆地・肝属平野地域においても「折衷型」

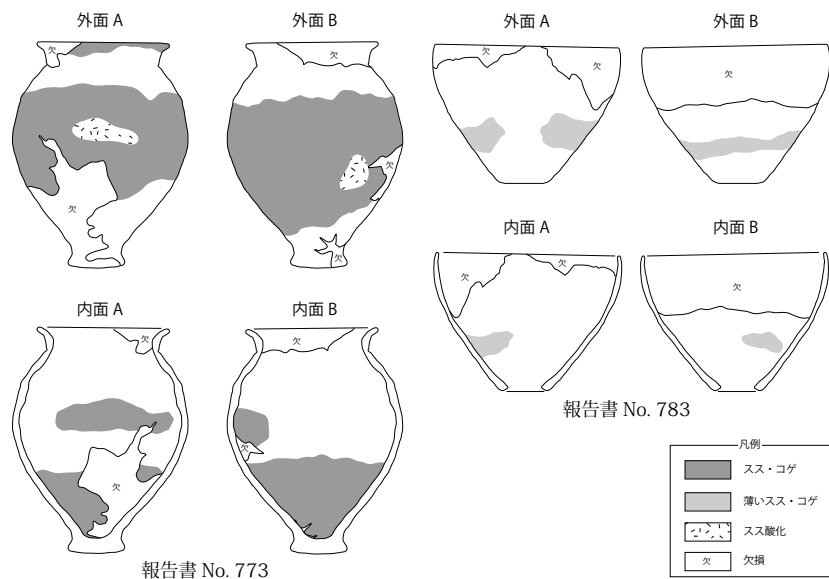


図7 天神免 SA-31 出土の甕 C と甑 (S=1/8)

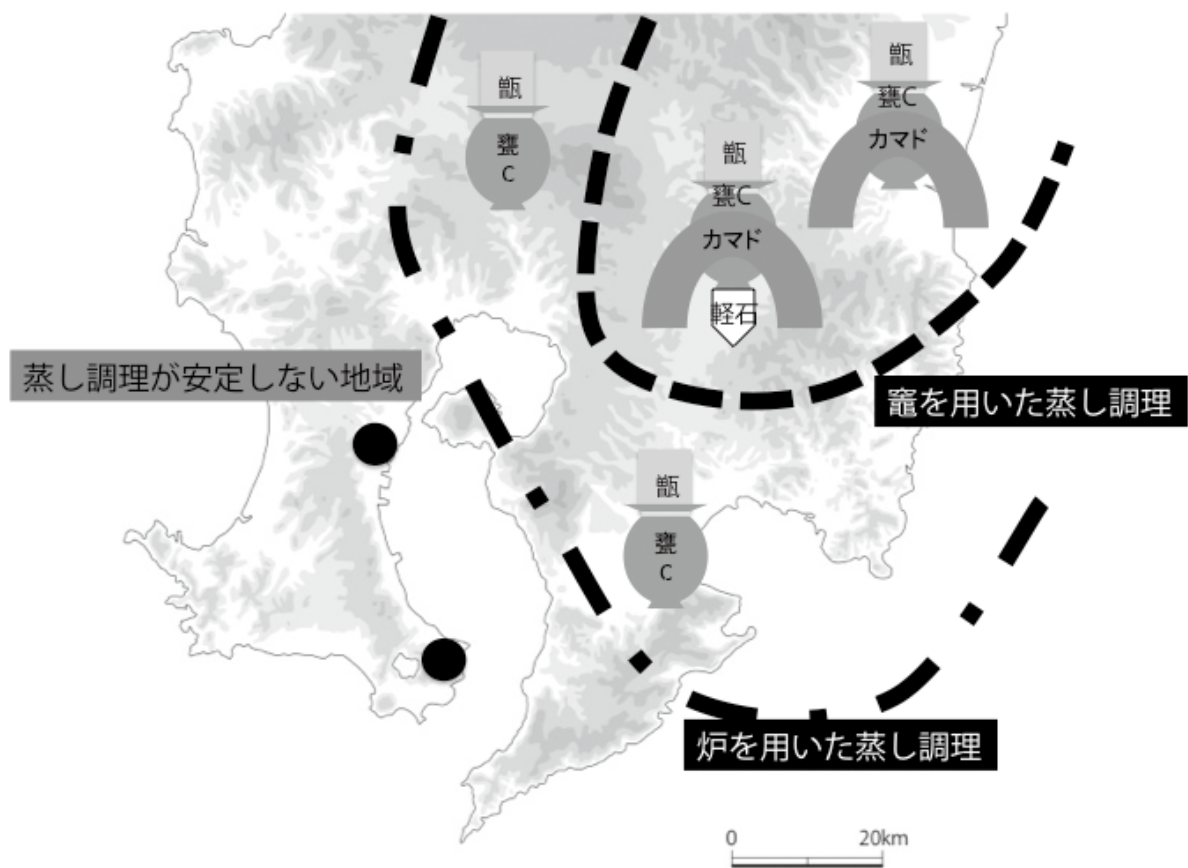


図8 九州南部における蒸し調理技術の地域性

甕出現の背景には、「甑の利用」・「蒸し調理の導入」という生業的变化が想定できる³。

³ 蒸し調理導入期におけるカマド掛けの甕の中には、内面にコゲが付着する例も確認されている(中野2012)。これは、カマド導入期による特異な現象として捉えられており、新来の火処で旧来の調理を行っていた痕跡と判断されている。

(3) 甕 C の使用痕分析

上記において、甑と甕 C の使用方法を検討した。しかし、天神免遺跡の竪穴住居総数 197 軒に対して、甑が出土した住居は 45 軒と全体の 4 分の 1 程度である。また、甕 C の出土数も 22 点と極めて少ない。そ

こで、九州南部で安定して蒸し調理を行っていたかを検討するために、甕Cの使用痕分析を行った。九州南部以外の地域で蒸し調理に使用される長胴甕は、「湯沸かし」用の湯釜であると考えられており、外面にはススの付着がみられるが、内面には基本的にコゲの痕跡はみられない⁴（坂井 1988, 外山 1990, 宇野 1999）。そのため、天神免遺跡から出土する甕Cにおいても同様の痕跡がみられれば、甕Cは湯沸かし用に特化した器種であると考えられ、恒常的な蒸し調理を行っていた事が推測できる。

対象資料は、調理時の使用状態がよくわかる甕C17点を抽出した。実見の結果、炊飯の痕跡を示す甕Cは12点、外面にはススが付着し、内面にコゲが形成されず湯釜に使用されたと考えられる資料は3点みられた。図8に例示したものは天神免遺跡SA-31出土の甕Cと甕のセットである（図8）。この甕Cをみると、胴中部外面にススの酸化がみられ、それに対応する形で内面にも円形コゲが形成される。また、胴下部にはバンド状コゲもみられることから、この資料は炊飯に伴う「側面加熱を伴うオキ火上転がし」（小林編 2011）を行った可能性が高い。

これらの資料を参考にすると、甕Cは湯釜として特化した器種ではなく、伝統的な煮炊にも使用されていたことが明らかとなった。この現象を解釈するために、ここでは奈良盆地の事例を参照したい。

奈良盆地における蒸し調理導入期の甕の使用痕を検討した中野咲は、「蒸し調理への転換はカマド（と甕）、長胴甕、調理方法の順に行われ、火処や調理道具といったハードが変化しても、調理方法というソフトの変化は保守的で緩慢であった」（中野 2012；p.48）と述べている。つまり、導入期の調理方法の変化というものは必ずしも一様に展開したのではなく、ある程度の偏在性をもちながら進行したことが明らかとなっている。この現象は、天神免遺跡の事例と同様であると考えられ、甕Cを伝統的な炊飯調理に用いる場合もあ

れば蒸し調理に使用されることもあったという導入期の一つの現象として理解できるのではないだろうか。

また、筆者は甕Cの使用痕分析に加えて、九州南部在地の調理技術（中津野式～笹貫式新段階）についても検討している（鐘ヶ江・松崎 2014）。詳細は別稿を参照して頂きたいが、分析の結果、当地域の調理技術は弥生時代から古代初頭まで大きな変化は無く、「側面加熱を伴うオキ火上転がし」（小林編 2011）を継承しながら炊飯調理を行っていたことが明らかとなっている。これは、甕が導入された後に、伝統的な笹貫式甕から、「折衷型」甕と考えられている甕Cへ徐々に変遷したのではなく、両者が共存、あるいは伝統的な調理方法が優勢的な状況を保持しながら、炉という火処は変化せずに日常の調理を行っていたと考えられるだろう。

（4）都城市鶴喰遺跡の事例

最後に、都城市鶴喰遺跡の事例との比較を通して、九州南部における蒸し調理技術の境界について検討したい。鶴喰遺跡は、都城市横市町字鶴喰に所在し、横市川の左岸奥部、月野原台地南端部に位置している（米澤 2004）。

本遺跡では、68軒の住居跡が検出されており、そのうち28軒の住居で造り付け竈が確認されている。住居跡からは笹貫式甕（本論の甕A）、折衷型甕（本論の甕C）、甕が出土していることから、竈を使用した蒸し調理を行っていた可能性が考えられる。そこで、甕Cに付着したススコゲを確認したところ、胴上半部に直線的なススの付着を確認することができたが、内面にはコゲの付着が見られなかった。このことから、鶴喰遺跡における甕Cは、湯沸かし用の鍋として使用した可能性が考えられ、安定的な蒸し調理を行ったことが推測できる。また、竈内部からは軽石製支脚も出土しており、甕Cの底部を支えるために使用されたと考えられ、直線的なススが胴上半部に付着していることから、甕を取り外ししない調理方法がとられていたことが予想される。

以上の点から、天神免遺跡と鶴喰遺跡を比較した場合、九州南部における蒸し調理技術の受容には地域差・時期差を持っていたことが考えられる。また、薩

4 藤井大祐による集成によると、薩摩半島中南部地域で干迫遺跡、萩原遺跡、石峰遺跡、柳ガ迫遺跡、外園遺跡で認められる（藤井 2012）。いずれの資料の破片資料が多く、全体形を把握することが困難であり、当該地域における甕の受容については課題としたい。唯一入来遺跡6号住居（共伴する須恵器からTK10型式段階）の例が報告されているが（河口 1978）、同時期の遺跡では甕が確認できないため、単発的なものとして捉えたい。

摩半島地域では、基本的に同時代に竈・甑の受容はみられず、本地域では弥生時代から続く伝統的な調理方法を保持していた可能性が高い。この調理方法に見られる地域差が生まれる背景として、食物の差異や地理的な環境など様々な要因が考えられるため、今後はその背景に関しても分析を行っていききたい。

おわりに

本論では、これまで「甑・竈の非受容地域とされてきた九州南部」において、徐々に資料が増えてきた甑を対象に、その使用方法・導入過程を検討してきた。その結果、えびの盆地では6世紀後半から7世紀前半にかけて、「竈を使用せず在地の炉を用いる蒸し調理」・「弥生時代から古代まで変化のない炊飯調理」という2つの調理方法が並存し、在地の調理技術と共生していた可能性が高いことを指摘した。また、都城盆地では、「竈を使用した蒸し調理」を行っており、蒸し調理技術の受容には地域差・時期差が存在することが明らかとなった。

今後はこのような地域差・時期差が生まれる要因や、竈・土器埋設炉・炉が偏在する宮崎平野の様相も検討しながら、九州南部における調理方法の実態に迫りたい。

参考文献

岩崎卓也

1966「甑小考」『信濃』第18巻第1号 信濃史学会 227-245 頁

今塩屋毅行

2004「南部九州古墳時代の火処―「土器利用炉」に着目して―」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―』小田富士雄先生退職記念事業会 517-546 頁

宇野隆夫

1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新―律令制の食器様式の確立過程―」『日本考古学』第7号 日本考古学協会 25-41 頁

大庭 重信・杉山 拓己・中久保 辰夫

2006「スス・コゲからみた長原遺跡古墳時代中期の煮炊具の使用法―小型鍋（平底鉢）を中心に―」『大阪歴史博物館研究紀要』第5号 大阪歴史博物館 21-40 頁

亀田修一

2003「古墳時代中・後期の土器」『考古資料大観』3 小学館 41-48 頁

河口貞徳

1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会 5-130 頁

小林正史（編）

2011『土器使用痕研究―スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元―』北陸学院大学

小林正史

2008「古墳時代後期から古代の米蒸し調理」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』449-471 頁

2014「古墳後期から古代の米蒸し調理における東・西日本間の違い」『新潟考古』第25号 47-66 頁

財団法人大阪府埋蔵文化財協会・弥生文化博物館

1993『「須恵器の始まりをさぐる：平成5年夏期企画展」』

坂井秀弥

1988「古代のご飯は蒸した『飯』であった」『新潟県考古学談話会会報』第2号 12-15 頁

下山 寛

1992「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 人類史研究会 65-80 頁

1993「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年的考察―「日本三大実録」貞観16年7月29日条についての考古学的アプローチ―」『古文化談叢』第30号 九州古文化研究会 1179-1193 頁

杉井 健

1994「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 大阪大学文学部 31-56 頁

2002「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『第5回九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』第5回九州前方

後円墳研究会実行委員会 1-20 頁

2004「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会 307-314 頁

外山政子

1989「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要』第 6 号 財団法人群馬県埋蔵文化座調査事業団 95-115 頁

1990「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から—古墳時代を中心に—」『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 500-509 頁

中久保辰夫

2009「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」『考古学研究』第 56 巻第 2 号 考古学研究会 62-82 頁

中野和浩（編）

2010『北岡松地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財発掘調査報告書（48）えびの市教育委員会

中野 咲

「古墳時代における火処について」『立命館大学考古学論集 V』立命館大学考古学論集刊行会 195-215 頁

2012「蒸し調理の普及からみた渡来系文化の受容過程—古墳時代中・後期における奈良盆地の事例について—」『考古学論攷：橿原考古学研究所紀要』第 35 号 橿原考古学研究所 33-61 頁

中野 咲・中久保辰夫

2013「韓半島系土器のあり方からみた集落分類」『古代学研究』第 199 号 古代学研究会 3-8 頁

中村直子

1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第 6 号 鹿児島大学法文学部考古学研究室 57-76 頁

2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めて コミュニケーションのかたち—ことば・もの・メディア』鹿児島大学全学プロジェクト報告書 47-62 頁

平田信芳

1979「隼人が用いた土器—成川式土器—」『隼人文化』第 5 号 37-44 頁

藤井大祐

2012「大隅・薩摩の諸勢力と対外交渉」第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会 575-593 頁

松崎大嗣

2014「成川式土器と古代土師器の折衷型—指宿市敷領遺跡十町地点の資料を中心に—」『Archaeology from the South II—新田栄治先生退職記念論文集—』205-220 頁

望月精司

2006「煮炊具使用痕跡と造り付けカマドの機能」『額見町遺跡』小松市教育委員会 264-268 頁

米澤英昭・下田代清海

2004『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書（61）都城市教育委員会

まつさき ひろつぐ
松崎 大嗣 鹿児島県生まれ。鹿児島市在住。鹿児島大学人文社会科学研究科人間環境文化論専攻修了。

奄美におけるプロテスタントの受容と現状

——喜界島の事例をもとに——

人文社会科学研究科 博士後期課程 島嶼政策コース 1年
中村 敬子

1. はじめに

地域社会と共に生きるキリスト教、多様性に富むプロテスタント教会を喜界島から考察する。喜界島は主島と言われる奄美大島に近く、カトリック同様に宣教は歴史の荒波を乗り越えてきた。離島は過疎化や高齢化に直面しながらも独特の歴史や文化を持つ。

奄美大島がカトリックの島と言われる一方で喜界島はむしろプロテスタントが地道な宣教で活躍をしている。

本研究では喜界島で受容と共生についてプロテスタント諸教派はどのような関係を築いてきたのか、そしてキリスト教は地域社会とどのように関わってきたのかを検討したい。聞き取り調査と参与観察で得た事例に即して明らかにする。

事例をもとにプロテスタントと喜界島、さらに近くに位置する奄美大島にも照射して、地域の受容と教会形成過程や諸活動、現状と今後の可能性を検討する。

2. プロテスタント

世界の宗教に占めるキリスト教の割合は33%でカトリックと東方正教会、プロテスタントに大別される。数多くの教派があり、分離していくように見えるが、歴史を通して周期的に信仰改革や刷新をし、教会に新たな回復力や生気を吹き込む。動的にダイナミックに途上にある宗教である。

人間の救いを基礎づけるのはキリストの十字架に現された神の愛であり、そこに神の人への「受容と共生」があり、人のできることは信仰を持って受け入れるこ

とで、それは恵であるとする。

2.1 日本におけるプロテスタント合同の歴史¹

ここで日本のキリスト教プロテスタントの合同の歴史と、現状において起きている教派間の受容や共生を考えてみる。奄美にも少なからず影響をもたらしている。

明治に入り、国内外の事情で禁教が許されなくなり、最初の信者は1865年に宣教師バラより受洗した。バラ学校に学ぶ人々やその他が無教派で1872年に教会設立し、日本基督公会と称した。1890年前後に聖公会、メソジスト、バプテストその他の諸教派が開教した。諸教派の親睦大会があり、福音同盟会、基督教連盟は基督教協議会の起源となった。

1941年に政府は宗教団体法を発令し、日本基督教団が設立され、全教会が戦時体制へと組み込まれていく。1945年に敗戦後、離脱していく諸派が出てくるが、そのまま残留する諸派教会が日本基督教団として今に至る。

宗教団体法が廃止され、新憲法が信教の自由を保証し、「国家の神社」問題が解決する。しかし、伊勢神宮、靖国神社などを国家管理下にという動きや、新興宗教などの問題に直面している。

2.2 奄美についてのプロテスタント研究

木ノ脇悦郎による研究²がある。奄美におけるプロ

1 日本基督教協議会文書事業部キリスト教大辞典編集委員会 1991「キリスト教大事典」教文館 p.785 要約

2 木ノ脇悦郎 1998「奄美大島におけるキリスト教受容とその展開の研究(3) —プロテスタント教会の宣教—」『キリスト教主義教育研究室編キリスト教主義教育研究室年報 26』1998、p.1-24

テストントの歴史を取り上げ、喜界島についても開拓時の様子や弾圧の歴史を記述している。

「喜界教会の中心になったのは磐井静治である。1913年（大正3年）、台南市日本基督教会において洗礼を受けて次の年に帰島している。大正5年に大朝戸において日曜礼拝が始められ、6年からは日曜学校も開始されている。磐井師は教職者ではなく、求道者が増えても洗礼を施すことはできないので、その間は日本基督教会か、ホーリネス教会の牧師によって洗礼を授けてもらっていたようである。

昭和10年には教会堂の完成を見ているが、時局の切迫、特に奄美大島におけるカトリック教会への弾圧への嵐の中で、喜界教会も同じ弾圧を強いられることになったのである。……戦後、1956年に日本基督教団、福井次郎牧師の着任まで組織的伝道は中断するが、信徒たちは礼拝を欠かさず、教会活動を続けたとある³」。

木ノ脇氏は奄美全体のことを包括して課題としている。「離島の貧困、黒砂糖、大島紬意外にこれといった産業がなく、輸入や国内の需要に打撃を受ける。奄美特別振興法による土木工事が経済の柱である⁴」。

研究から離島の宿命ともいう本土への転出者、送り出す教会については、名瀬と喜界島との差異が詳細ではないが、本土の迎える側の責任や島と共にある姿勢を問えるであろう。

「カトリック教会の現地適応主義、宣教主体の意識構造が奄美におけるカトリック教会の隆盛と無関係ではないと思われる⁵」と述べるが、奄美大島と喜界島の状況は異なる。

及川高氏が「地域社会と宗教の受容」で喜界島を扱い、その一部にホーリネス教団喜界キリスト教会の創立者である兼山常益師について調査している⁶。しかし、彼はもう一つの教会形成ルーツである日本基督教団につながる磐井静治師には触れていない。さらに兼山家系譜を扱うことで、奄美地方の布教の限界と個人伝道の限界を親族組織（ハロージ）関係にあることを

記した。

今日まで教会が継続されているのは親族関係が主たる要因とも限らないし、そういう証拠や統計があるわけでもない。「イエスの宗教」として継承されないキリスト教は、神と個々人の信仰として向き合っている。

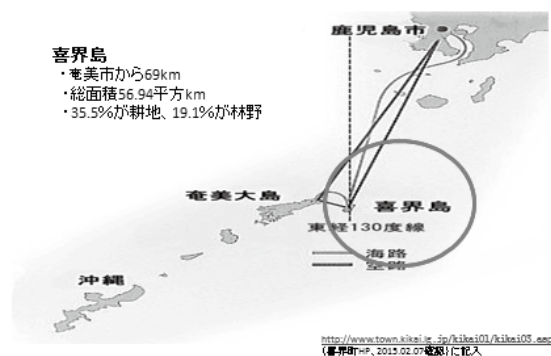
3. 調査地の概要

喜界島は奄美大島と島嶼間で近い距離にあり、奄美群島の中で鹿児島寄りに位置する。そのことは螺旋的に二つの島を関係付ける。

3.1 地形

喜界島は大島本島の東北端にあり、奄美市から69キロメートル、海岸線に沿う各集落の背部は農耕地で、東南から南北に走る百之台丘陵に連なる⁷。

調査地の概要



地図1

概して平坦な島であり、大半は隆起サンゴ礁である。奄美大島は鹿児島から380キロメートル、面積712.39km²であり、多くの集落は海岸線に沿い、山林が迫る。地形の違いはプロテスタントの場合、奄美大島では名瀬市街地に教会が集中するが、喜界島は集落の大小に影響されていない。

3.2 人口

人口は以下の図のように、喜界町世帯数3474戸、

3 前掲 p.9-10

4 前掲 p.16 一部引用。

5 前掲 p.18 一部引用。

6 及川高 2011「地域社会と宗教の受容 喜界島における宗教言説の再編を事例として」(修士論文) p.1-11

7 喜界町役場

<http://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/kikai03.asp>「ようこそ喜界町へ」

7432人で奄美大島は其の約9倍である⁸。人口減少の島で会員数も減少してきているが、奄美大島がカトリックを主として近年の人口比6パーセント⁹のクリスチャンであるのに対し、喜界島では、およそ2パーセント¹⁰である。戦後本土での0.84パーセント¹¹からすると基督教に受容的と言える。日本ホーリネス教団喜界キリスト教会を例にとると、地域の人口減少¹²にもかかわらず、戦後、教会員およそ50人余り、現在活動会員その半数を推移している¹³。地域の教会として内容、質的に定着している。

人口

- 喜界町は世帯数3474戸、人口7432人。
(喜界町広報の推計人口、2014年10月1日現在)
- 奄美大島の人口は64,092人。
(鹿児島県企画部統計課2013/3/1現在)

クリスチャンの人口比	
奄美大島	喜界島
6% (カトリックが主)	2% (プロテスタントが主)

以下は日本基督教団(湾)と移転前(大朝戸)、日本ホーリネス教団(花良治)の教会所在地である。

喜界島の特徴としては、小さな集落から開拓が始まっている。現在の奄美大島では中心部に教派が集中している。



3.3 歴史

歴史は先史時代、古代、中世、琉球時代、近世、近代、現代はアメリカ占領時代、本土復帰後と分けられる。古代では喜界島と太宰府との繋がりが文献上の記録にある¹⁴。1446年、琉球王国支配下に入るが、1609年に薩摩藩の侵攻を受けて直轄領となる。1693年に代官所が設置される。1871年、廃藩置県により鹿児島県となる。1945年の第二次世界大戦敗戦で、奄美群島で共にアメリカの軍政下に入る。1953年、日本復帰する¹⁵。

喜界島では1908年から教会活動開始する。教会活動に対する弾圧も経験し、プロテスタントはここ100年で定着した。

3.4 宗教

集落ごとに神社が見られ、ほとんどは、江戸時代頃に土着の信仰から移行している。公的行事を扱うノロやユタによる民俗信仰が残存しなくなっている。他にも仏教などがある。カトリックでもプロテスタントでもない独自の教会とする「イエスの御霊教会」が戦後入っている¹⁶。

奄美大島にカトリック信者の割合が多いが、喜界島のカトリック教会は奄美市のマリア教会の巡回教会となっている¹⁷。ホーリネス教団と日本基督教団系の教会はその前身の活動から100年以上の協力関係の歴史がある。

4. 事例

4.1 日本ホーリネス教団 喜界キリスト教会 (花良治集落)

地域の人口減少にもかかわらず、戦後、会員数およそ50人、現在活動会員はその半数を推移している¹⁸。他集落からの教会員が増加し、地域の教会として内

8 奄美市人口は45,277人、男21,511人、女23,766人、世帯数23,649世帯(奄美市広報2014年11月末日現在)である。

9 鹿児島カトリック教区2014「鹿児島カトリック教区報」11月発行p.2

10 キリスト教年鑑編集委員会2012「キリスト教年鑑2012年版」と喜界町誌、教会資料を参考にする。

11 キリスト教年鑑編集委員会2012「キリスト教年鑑2012年版」キリスト新聞社p.7

12 喜界町(2000)「喜界町誌」p.16-20, p.460

13 教会伝道師の聞き取りと教会教勢資料による。

14 『日本紀略』長徳4年(998年)の記述から、喜界島には、それだけの機関や勢力が存在していたと考えられ、奄美大島人と喜界島人が区別されていたことがわかる。

15 喜界町役場 <https://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/default.asp> から略記(2014年2月7日)

16 喜界町2000「喜界町誌」p.898参考。

17 喜界町2000「喜界町誌」p.894参考。

18 伝道師の話とその教会教勢資料による。

容、質的に定着している。

事例1 ピアノリサイタル 2014年12月14日

喜界キリスト教会献堂2周年記念リサイタルが行われた。それは羽佐田弘牧師、公子伝道師夫妻や教会員の地域での教派を超えた種々の活動や奉仕と繋がっている。60 - 70 人は入る会堂で開演時にはほぼ満席であった。

出演者は村田正男氏と村田孝史父子で、カトリック信者で奄美市の聖心教会オルガニストである。新民謡をピアノ、エレクトーンで演奏し、楽譜を出版している。孝史氏のショパンピアノ曲から始まり、次に新民



写真1
日本ホーリネス教団
喜界キリスト教会

謡の部へと移行した。貴文氏がジャミ線をひき、正男氏がピアノで演奏する。来ていた聴衆も皆で島唄を歌う。「磯の松風」、「月の白浜」、「島育ち」、「本茶峠」と続く。信者が讃美歌を喜ぶように島人が島唄を歌う喜びがあふれる。最後はクリスマスソングを歌い、牧師の祈りで締めくくった。

花束贈呈は、日本基督教団の喜界教会牧師、バプテスト奄美キリスト教会牧師から行われた。カトリックの神父や他教会の信者たちも集い、教派を超えた参加協力があり、様々な集落から信者、非信者を問わず参加していた。

これまでも教会関係の本土からの種々なゴスペルコンサート¹⁹が、喜界町自然休養村や中学校、高校などで行われていた。教会も島の一部となっている。

19 ユーオーディア喜界島コンサート (2010 年)、レプタコンサート (2011 年)



写真2 蛇味線とピアノ

100 年以上続く歴史も島にある教会として受け入れられている。

4.2 インタビュー 1

103 歳の得本維宗夫さん 2014 年 10 月 27 日

赤連集落に在住し、戦前戦後の喜界島のキリスト教会を知り、そして語る唯一の生き証人である。以下を証言した。

「1920 年頃。家庭集会は家にいっぱい人が集まっていた。10 歳の頃で、庭にもいっぱいだった。毎週火曜日の夕方には花良治の教会から兼山先生²⁰が赤連に來られて母の食事を召し上がった。薄暗くなって、父母の兄弟、7、8 名近所の熱心な方が來られた。夜の 10 時半には歩いて 2 時間もかかるところを、石油ランプを灯して歩いて歸られた。大朝戸にも信者が多かった。大朝戸では日本基督教団の前身の集会で磐井師ともお会いしたことがある。

私が生まれる以前から日曜学校が母の実家で開かれていた。そのことは折田旅館の勝さんから聞いた。母が妻に話したことだが、戦前、兼山牧師がアメリカ人を連れてきて夕食を共にした。名瀬から小倉先生（名瀬の大島ホーリネス教会）が來られて家庭集会をすることがあった。

戦中、耶蘇教の家ということで石を投げられたこともあった。戦後、兼山先生による家庭集会が再び始まった」。

20 奄美大島でも伝道をしている。



写真3
得本さん
2014年10月
27日撮影

100年の年月をたぐりながら、戦前、戦中、戦後と揺れ動く時代の波と弾圧があり、その中で喜界島や奄美大島両島で宣教した兼山牧師や小倉牧師、赤連の人たちのことを一生懸命に語ってくれた。音楽に関しては楽器のない時代でも集会和讃美は欠かせない。

聞き取りでは以下のことが明らかになる。

- ・ホーリネス教団と日本基督教団の前身の教会で開拓者たちに会っていて、集会の様子や行き来が推察できる。
- ・2教派が受容し合っていたことを知る。
- ・奄美大島から小倉牧師の島を超えた宣教の協力があった。初代の兼山牧師は奄美大島での開拓にも関与しており、名瀬のホーリネス教会はほぼ同時期の1908年に開始している。

4.3 日本基督教団 喜界教会（大朝戸）

開拓においては信徒伝道者であった磐井静治氏の尽力が大きい。台湾から大朝戸に帰郷後、1916年に礼拝を開始し、自宅集会や日曜礼拝は集落の人でいっぱいになった。夜学会での学びの場、図書の開放、主婦会の設置など地域に大きく貢献している。



写真4
故磐井静治氏レリーフ

本土との行き来が困難な時代に、洗礼授与や告別式を島のホーリネス系の兼山牧師に頼んでいる。2教派の協力は島に共に生きる特殊性がある。

事例2 牧師就任式（済） 2014年9月15日

式順の基づいて行われる中で大切なのは誓約である。牧師誓約の中でも「あなたはこの教会に招聘されたことを神のみ旨として心から信じ、喜んで主の栄光のために忠実にその努めを果たす決意がありますか。牧師の務めを誠実に遂行することを誓約しますか」に対し、牧師は「神と教会との前で謹んで誓約いたします」と答える。

教会員誓約として「主から牧師として遣わされた原牧師をあなたがたは謙遜と善意とを持って、その教え勧める福音の真理に耳を傾け、使徒たちが命じたようにその指導に従うことを誓約しますか」に対し、教会員は「慎んで誓約します」と答える。

誓約は教会によって若干の違いがあるが、その地域にある教会に牧師が就任するにあたり、教会内外のことで持ち込まれた問題で紛争や分離を図ることがないように励まし支えて、牧師の職務を全うさせることを約束するものと筆者は考える。

就任式には、日本ホーリネス教団、カトリック教会、バプテスト教会からも出席していることは、教派を超えて教会の牧師就任式を共に喜ぶことの表れである。就任式後に祝会が行われた。食事とともに、音楽会があり、教派を超えたメンバーのコーラスや楽器演奏など行われた。

祝会の後に原牧師に話をうかがう機会があった。牧師によると昨年から喜界教会に通い、病床にあった前



写真5 就任式後祝会での教派混合の讃美

任者はこの5月に天に召されたが、その働きを継いでいる。前任者は43年間牧師をされていた。教会には音楽の賜物を持つ方が多く、事あるごとに楽器演奏が行われ、島の人々が集まってくる。喜界島は人々がとても親近感がある。教会の外で地域の人々がよく声をかけてくれると話された。

4.4 インタビュー2

10月15日 日本基督教団喜界教会前任牧師故丸山師の妻文子さん（70歳代）を訪ねる。

喜界教会前任牧師については名瀬教会の青山牧師が喜界教会支援委員会発行の通信にこう記述している。

「教会のご奉仕とともに、平和の取り組み、喜界島における自衛隊通信基地「象のオリ」建設反対運動の責任を担いつつ、全国各地に出かけ、ご自身の喜界伝道の困難と喜びについて、語り続けてくださった。『奄美の苦難の歴史』を背負いながらお働きくださった先生ですが、全ての人に暖かく接する円満なお人柄でした」²¹。

故丸山牧師の妻文子さんからの聞き取りは以下である。

「地域で牧師と共に働いた。この地で43年である。湾はよそから来る人が多く、まとまりがよいとはいえない。赤連は『象のオリ』反対でまとまりがあった。地域とつながる音楽伝道をした。はまゆうコーラスは37年前に始まり、今7、8人いる。島おこしや地域



写真6 教会隣の若葉音楽教室

の文化祭など、コンサートや入社式など行事があるたびに歌っている。必ず讃美歌を一曲入れることにしている。公民館講座の一環としてのオカルナ教育も心がけている。

大朝戸で当時はピアノを弾ける人がいず、ピアノ指導者を求めている。私はピアノを教えた。5、6人から始めて、5年いて教会が湾に引越しをした。ピアノを教会において教室を開いた。しばらく空白があったが、一昨年教会員の妻が後継者となった。

地域の子どもと母親の会ができた。教会堂に隣接する教育館では「どんぐり会」が行われている。1980年代は転勤族の子どもたちが集まった。島の子どもたちは祖父母や親戚など家族が面倒を見るので、銀行員や学校の先生、土木関係者などの子どもが集まっていた。今は子どもが少なくなった」。

地域の人の言葉に耳を傾け、「この地で泣くものと共に泣き、喜ぶものと共に喜び」一緒に労苦を担おうとした²² 故丸山牧師の妻の言葉に重みがある。

5. 地域と教会

喜界島を含む奄美地域であるが、日本基督教団名瀬教会にて2014年度「地域と教会」伝道協議会が信徒修養会と合わせて開催された。奄美地区の歴代牧師に感謝し歴史を覚え、教会の課題や地域伝道を協議した。

特筆すべきは戦後、奄美復帰後に名瀬（奄美市）で開拓伝道をした故雨宮恵初代牧師の地域での事業展開である。地域のニーズに応える福音の働きは戦前からカトリックが展開しているが、プロスタントでは本土復帰後に伊津部保育所から始まる。働きの一つ、特別養護老人ホーム奄美佳南園の話を伺うことができた。

インタビュー

雨宮努園長（50歳代） 2014年12月10日

「初代牧師である父は伝道者として自治会、刑務所の教誨師、保護司、民生委員、学校関係、PTA会長など広く地域で働いていた。保育でも『のぞみ園』で病院内で入院の子供たちの教育を始めた。名瀬市委託で伊津部保育所をつくり、1974年に奄美の福祉を向

21 日本基督教団奄美地区喜界教会支援委員会発行 2014「喜界教会通信」No.2より抜粋

22 日本基督教団九州教区 2007『日本基督教団奄美伝道50年記念誌』p.61

上させるために、キリスト教の聖隷事業団の協力で、奄美佳南園を設置した。高齢者福祉のための誘致、地域奉仕と当時の人々への雇用も考えて手がけている」と語る。

そこには礼拝の場もあり、「夕暮れになっても光がある」が掲げられている。その意味は、高齢者と職員が共に生きる中で、高齢者の余生は夕映えの美しさを



写真7 奄美佳南園



写真8 奄美南園

発揮することである。現在では入所、短期入所、通所介護、訪問介護、訪問入浴、配食サービスと居宅支援、在宅介護支援センターの事業を行うまでになっている。「佳南園」名称の由来は旧約聖書 民数記 14章8節の「あの乳と蜜の流れる土地」というのが、カナンのことである。島唄が流れ、奄美の伝統を継承して、利用者と職員が生活を共にする中で生きがいを見つけ、最後まで、光り輝いた生活ができるケアをめざしている²³。

話を伺って、その地域奉仕や伝道形態が、喜界島でも牧師や伝道師たちによって行われてきていたことに気がついた。地域の活動への取り組み、町職員としての働き、集落の方たちへの特に高齢の方たちへお世話、保育や音楽を通しての教育や、小規模な教室である。他にもコーラス、音楽リサイタル、そして教会行事としての礼拝、教会学校、クリスマスなどの祝い会など多岐にわたる。

6. 考察と展望

6.1 考察

喜界島では規模的財政的に大きく関連事業をするには至らないまでも、その前身としての福祉や教育、音楽など働きは十分に培われ、小規模で行われてきた。地域に受け入れられてきた。それはさらに今後のあり方に方向を与える。

本土から離れた2つの島の教会形成の関係を受容と共生、交流から見てきた。プロテスタントが奄美大島では最初期にホーリネス教団だけであったことを考えると喜界島では早い時期に2つのルートを持って始めている。島だからこそ助け合って共に生きている。大朝戸も花良治も喜界島の中でも当時は不便な集落である。現在は車社会で互の集落が近距離であるが、当時は徒歩と馬の時代である。主島である奄美大島の中心地名瀬よりも周縁から、さらに喜界島の中でも小さな集落からの宣教である。小さくされたものの側の視座から働くことはどこに立って共に生きるかを示唆し、キリスト教の精神でもある。

兼山牧師の自筆資料「わが生涯」がある。本土とのつながりもうかがわれる。然し、磐井静治氏に関しては台湾から大朝戸に戻っているので別の交流ルートからつながる。本土と島の関係やつながりは、キリスト教の弾圧期にも影響を及ぼしている。

日本基督教団の戦前の開拓者、磐井氏は信徒伝道者で、資料や孫の証言が記録として残っている。故郷の大朝戸に磐井氏のレリーフがあり、地域の人たちや教会の思いをそこに見る。他教派系列の兼山牧師が洗礼授与や告別式をして、共に助けあっていた。

歴史の生き証人得本さんに喜界島でのプロテスタント黎明期からの100年以上にわたる証言が得られたことが大きかった。教会の記念文集²⁴には、兼山常益師の郷里伝道時の教会の方々の証を見ることができる。花良治での地域宣教の様子や教会員の本土での交流の様子をうかがうことができる。

喜界島では日本基督教団側が平和や農地を守る地域

23 奄美佳南園 2014「奄美佳南園 40 周年記念誌」参照

24 日本ホーリネス教団喜界キリスト教会発行 2002「21 記念文集 ウフンジュ」 p.25

の立場から、自衛隊通信傍受基地「象の檻」に反対していったのに対し、戦前の迫害をくぐり抜けたホーリネス教団は加わってはいない。地域社会と福音のあり方を角度の違いで捉えながらも教派間での伝道協力を続けていることから、互いの宣教の尊重と働きの受容と共生があった。

現在、人口流出は免れず高齢者が多いが、地域の中の教会としては歴史の過程でも、現在も喜界島の教会が地域で認知され受容されていることは教会員の数ではなく、証と質の成果である。女性牧師が戦後認められて地域に受け入れられてきたこともあり、喜界島でも日本基督教団の新しい牧師として教会員が招聘している。

置かれた集落が異なり、島が異なり、教派間の差異がありながらも交差しながら、現在も教会の人々や地域の人々は受容と共生に向かっている。

6.2 展望

地域社会と共に生きるキリストを喜界島、そして奄美から今後に向けて展望する。プロテスタントの教派間やカトリックとの協力、島々のそして本土との螺旋的関係をつないでいくことが大切である。音楽リサیتالや「はまゆうコーラス」や牧師就任式にもそのことが現れている。

子どもの姿が見られなくなって久しい。「ヤンママの会」や「どんぐり会」もその時々に合わせて休会にせざるを得ない時もある。そのような中で日本基督教団の教会教育館で行われている若葉会音楽教室は今も地域に定着している。音楽での地域との関わりはひとつのあり方を示している。

今後、地域にあっては福祉や教育での関連事業は人々への奉仕となる。特有の歴史的背景を理解し、文化や伝統も尊重しつつ受容と共生の新たなキリスト教宣教が必要と考える。

今回は関連性と分量から取り扱ってはいないが奄美のプロテスタントは他にも教会や「家の集会」など個々に開拓を単独あるいは教派性を持ちつつ興亡を重ねている。そこでの協力もある。

奄美におけるプロテスタント教会の受容と現状を、事例をもとに喜界島とその関係性から一部奄美に照射

した。そして地域奉仕や伝道を福祉や事業の一つ佳南園にみた。喜界島では島自体での規模が限られ、教会ではそのような地域での福祉や教育の関連事業は大きな規模ではおきなかった。しかし、小規模な音楽教室や教派を超えた島独特の音楽活動などの地域奉仕や教育が続けられてきた。他にも地域活動参与としての関わりが見られた。

何よりも牧師や教会員が人口減少地域の島という周辺から日本を見つつ、各々交わりを持ちつつ福音の働きを担ってきた。地域に仕える姿勢や人々と交流を通して受容と共生を未来につなげていくのに光明と重要性があると思う。

参考文献

雨宮 恵

2003『恵の足跡』聖隷サービス有限会社

安斎 伸

1984『南島の村落におけるキリスト教の受容と適応』第一書房

及川 高

2005『地域社会と宗教の受容 喜界島における宗教言説の再編を事例として』（修士論文）p.1-11

木ノ協悦郎

1998「奄美大島におけるキリスト教の受容とその展開の研究（3）—プロテスタント教会の宣教—」『関西学院キリスト教主義教育研究室編 キリスト教主義教育研究室年報 26』p.1-24

土肥昭夫

1975『日本プロテスタント教会の成立と展開』日本基督教団出版局

キリスト教年鑑編集委員会

2012『キリスト教年鑑』キリスト新聞社

喜界教会 50 年誌刊行会

1966『喜界教会 50 年の歩み 付 磐井先生の思い出』

日本基督教協議会文書事業部キリスト教大辞典編集委員会

1991『キリスト教大事典』教文館 p.785

参考資料

喜界町

2000『喜界町誌』

日本基督教団九州教区

2007『日本基督教団奄美伝道 50 年記念誌』 p.62-64

日本基督教団喜界教会

1966『喜界教会 50 年の歩み』

日本基督教団名瀬教会

2012『名瀬教会創立 50 周年記念誌』

日本ホーリネス教団

1991『21 世紀への飛翔 目で見える私たちの教団きのう・きょう・あした』 90 周年記念

2001『創立 100 周年記念写真集 ホーリネスの旗印を掲げて』

日本ホーリネス教団大島キリスト教会

2008『宣教百周年記念誌』

日本ホーリネス教団喜界キリスト教会

2002『21 記念文集ウフンジュ』 p.25

2009『創立百周年記念誌ホーラサ』

2014『喜界キリスト教会総会資料』

特別養護老人ホーム奄美佳南園

2014『奄美佳南園 開演 40 周年記誌』

参考 URL (2015 年 2 月 7 日現在)

「喜界町役場」

<http://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/kikai03.asp> 「ようこそ喜界町へ」

なかむら けい こ
中村 敬子 鹿児島県奄美市生まれ。奄美市在住。
マーサー大学大学院・マカフィー神学校（アメリカ合衆国）修士課程修了。バプテスト奄美キリスト教会牧師。

都市の商業立地パターンと地域構造

—中国重慶市区を事例として—

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 島嶼政策コース1年
張 秋菊

1. 研究背景

都市の土地利用の空間構造は様々な要因の複合的な産物である。都市の位置する自然環境の影響もさることながら、経済発展、社会的、文化的背景、制度的規制あるいは誘導などの総合作用の結果として都市の地域構造は生まれてくるものである。また、都市の内部構造はそれらの要素の変化に伴って時間的にも空間的にも変化しつつある。

現在、世界にわたって、都市の構造に様々な変化が起きている。たとえば、最近、先進諸国ではモータリゼーションや商業の近代化などに起因した中心市街地の衰退が続き、インナーシティ問題が深刻する一方である。特に1990年代以降は中心市街地の衰退が勢いよく進んできている。経済成長に伴って、住民所得が増加し、自動車が急速な勢いで普及してきたのがその背景にある。つまり、モータリゼーションにより通勤や買い物などの行動範囲は劇的に拡大した。自動車通勤によって職住分離が加速され、住民は中心市街地から郊外へ移動していったのである。

中国の都市においても構造変化の形態が様々である。例えば、北京、上海などの大都市では、改革開放以降の土地利用制度の変革や郊外区域の開発など、都市用地の拡大によって都市の内部地域構造が変化しつつある。中心市街地の空洞化まで進展していないものの、商業システムが周辺に拡散する形になって、都市中心部から商業機能の分散や移動が進んできた。また、人口の分散化に伴って郊外にある区レベルの商業中心地が大きく発展し、その一部は市レベルの商業中心地の域まで達するような勢いを見せている。

都市内部構造に関する理論として、バージェスの同心円地帯理論、ホイトの扇形理論、その発展としてハリスとアールマンが考案した多核心理論など、古典的な生態学のアプローチが挙げられるが、生態的なアプローチのみでは、現在の都市構造の変化を十分説明できなくなっている。他方、人間の購買行動、居住地移動などの主観的行動を重視する行動論的アプローチも重視されるようになった。

本研究は都市の内部地域構造を解明するのを目的とする。商業機能は都市の基本的な機能の一つである。商業立地は地域構造分析の重要な側面である。商業立地パターンは地域の歴史的、地理的、社会的要因により形成され、経済発展や人口移動等の要素の変化に対応して変容しつつある。そのため、本研究は中国重慶市区を事例として、まず、当該地域における商業集積地の立地パターンに焦点を当てて、商業立地の現状、歴史的変遷を考察する。一方、都市の地域構造は産業構造、人口分布や土地利用状況などによって反映される。本研究は研究対象地域の産業構造、人口分布、都市計画等を踏まえて地域構造を考察することにする。重慶市は特殊性のある地域である。重慶市は山岳都市であると同時に、工業都市でもある。独自の自然要素、社会的、歴史的要素が相互作用し、自己組織化の下で都市内部構造の基盤が形成され、さらに、国の都市計画など、外部アクターによってコントロールされる。このようなメカニズムの下で形成された重慶市区の商業立地パターンと地域構造の特徴を考察することにする。

2. 調査地域中国重慶市区について

2.1 調査地概要

本研究の調査地域である重慶市は中国の西部に位置しており、1997年以前は四川省に所轄の市であったが、1997年に北京、上海、天津に次ぐ第四の直轄都市となり、中国国家発展戦略「西部大開発」の重点地域でもある。重慶市所轄区域の総面積は8.24万平方キロメートルである。中心部である重慶市区は渝中区、大渡口区、江北区、沙坪壩区、九龍坡区、南岸区、北碚区、渝北区、巴南区という九つの区に分かれている。重慶市区の総面積は5473平方キロメートルであり、そのうち、「内環」といわれる幹線道路の内側にある約294平方キロメートルの範囲は都市機能が密集している核心部である。「内環」外側の約5179キロメートルは都市機能展開部である。

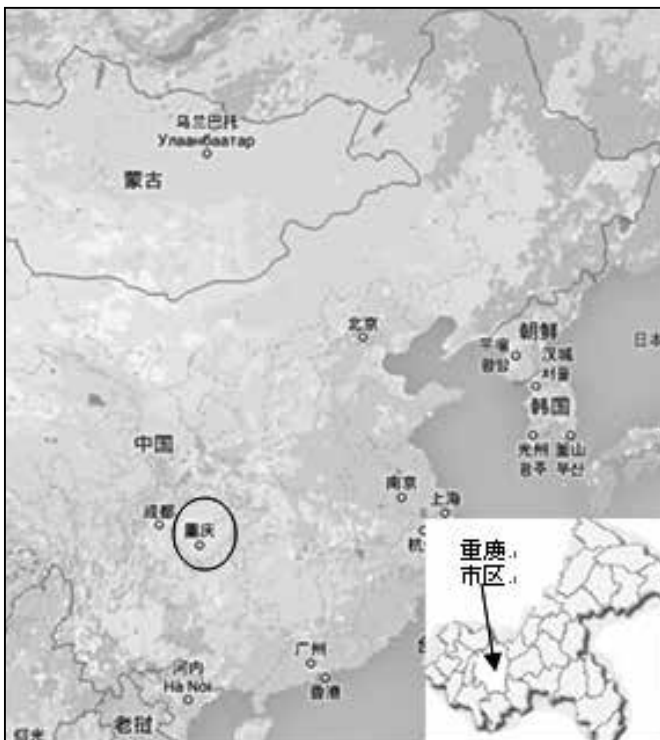


図1 調査対象地域地図

出所：Google 地図より作成。

2.2 経済発展と産業構成

重慶は約3000年の歴史を持つ都市である。地理的な特徴を見ると、ここには「両江四山」と呼ばれる地形を有している。長江とその支流である嘉陵江に挟まれる半島は「渝中半島」と呼ばれ、可航水路の地理的

優位性により商業が発達し、重慶都市の発祥地となり、「母城」と呼ばれる。現在では市最高次の商業中心地が渝中半島にある。市街地に縉雲山、中梁山、銅鑼山、南山という四つの山がまたがっている。地表の起伏が激しく、典型的な山岳都市であるため、「山城」とも呼ばれている。

重慶の市街は歴史上幾度かの発展契機を得てきた。1890年清政府と英国の「煙台条約継増専条」により、重慶は港町として開放され、英国など先進国からの商品は重慶を経由し、四川、雲南などの内陸地域へ輸入された。開港後には中国産品が大量に輸出され、また西洋の産品が多く入ってくることとなった。重慶を経由しての貿易活動や水上運輸の発展により、重慶は長江上流で最大の水上・陸上の商業拠点となり、それを契機として中国の南西部の経済的中心地は成都から重慶へ移転したと考えられる。重慶は中間地として商業経済が発展した。1920年代、市街地は両江半島を越えて、江北、南岸まで範囲を拡大してきた。その後、中日戦争の時期に、首都であった南京が陥落し、1938年に中国国民党は首都機能を重慶に移転させた。それに伴う工場などの大量の移転などによって、重慶の商業の発展が促進された。1997年に重慶は中央政府直轄市に昇格し、新たな発展の契機を迎えた。

重慶のGDP規模を見ると、1978年改革開放当時の71.7億元から1990年の327.75億元、その後、2000年は1791億元、2010年は7925.58億元に成長してきた。産業構成の比率を見ると、重慶では工業が高い割合を占めている。重慶市全体では、工業の占める比率は1949年の18%から、1978年の44%、その後2010年の46.7%まで伸びてきた。その内、重工業、特に鉄鋼業、重化学業の比率が高いため、重慶は重工業都市と位置づけされている。

2.3 人口変動と分布状況

都市の人口は商業の立地に影響するだけでなく、都市の内部構造の形成にも影響を与える。人口変動と分布状況は都市の内部構造を考察するのに重要な手がかりともなる。表2は分析対象地域1990年から2010年の人口変動を示したものである。図2は重慶市九区の2010年人口密度を占めたものである。全体的に見て

表1 2010年重慶市区のGDP構成

区域	GDP (万元)	第1次 産業	第1次 産業 比率	第2次 産業	第2次 産業 比率	#工業	工業比率	第3次 産業	第3次 産業 比率
渝中区	5,530,269	0	0.00%	286,247	5.18%	14,261	2.58%	5,244,022	94.82%
大渡口区	1,772,136	14,320	0.81%	1,219,516	68.82%	111,837	63.11%	538,300	30.38%
江北区	3,913,947	26,778	0.68%	1,549,581	39.59%	1,310,979	33.50%	2,337,588	59.72%
沙坪壩区	4,195,406	47,793	1.14%	2,153,720	51.34%	1,839,460	43.84%	1,993,893	47.53%
九龍坡区	5,895,846	71,627	1.21%	2,924,487	49.60%	2,687,740	45.59%	2,899,732	49.18%
南岸区	3,512,280	36,365	1.04%	2,167,848	61.72%	1,865,417	53.11%	1,308,067	37.24%
北碚区	2,323,726	94,727	4.08%	1,470,654	63.29%	1,269,138	54.62%	758,345	32.63%
渝北区	5,736,350	185,211	3.23%	3,385,053	59.01%	2,851,901	49.72%	2,166,086	37.76%
巴南区	3,087,180	275,082	8.91%	1,605,832	52.02%	1,286,984	41.69%	1,206,266	39.07%

注：第2次産業には工業、建築業が含まれている。

資料：2011年『重慶統計年鑑』により作成。

市中心部に人口が集中している傾向がある。ただし、各区内で人口が均等に分布しているわけではなく、相対的に

人口集中なエリアが存在し、それは商業立地の影響要素にもなるが、この図においてその点は反映されていない。

3. 商業集積地の空間立地と地域構造

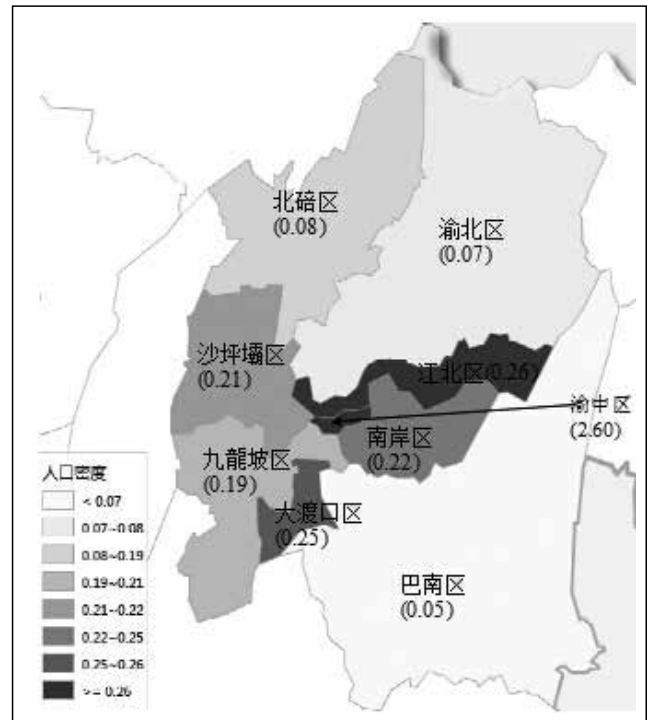
3.1 重慶市街地の地域空間構造

第2章で述べたように、重慶市区は地表の起伏が激しく、典型的な山岳都市である。そのため、産業と人口は全体的に分散的に分布しているが、河川、山岳、緑地を境に、局地的に集積している。重慶市の従来の都市計画には地理的状況に即した計画方針が見られ

表2 重慶市区の人口分布

行政区	渝中区	大渡口区	江北区	沙坪壩区	九龍坡区	南岸区	北碚区	渝北区	巴南区	九区合計
面積 (KM ²)	22	94	214	383	443	279	755	1452	1830	5472
人口 (万人)	1990年	57.69	19.75	41.91	59.69	65.08	36.85	60.76	74.13	79.86
	1995年	57.59	20.38	43.93	62.34	65.75	42	61.8	77.68	84.09
	2000年	58.23	20.28	46.04	66.45	71.21	46.29	63.17	80.26	86.12
	2005年	59.94	21.61	49.57	73.91	78.39	54.51	65.22	87.72	86.19
	2010年	57.26	23.69	54.61	79.08	82.24	60.79	63.5	102.47	88.3
2010年対 1990年 増加率	-0.7%	19.9%	30.3%	32.5%	26.4%	65.0%	4.5%	38.2%	10.6%	23.4%
2010年 人口密度	2.6	0.25	0.26	0.21	0.19	0.22	0.08	0.07	0.05	/

資料：2011年『重慶統計年鑑』により作成。

図2 重慶市九区 2010年人口密度 (万人 / km²)

資料：2011年『重慶統計年鑑』により作成。

る。1949年新中国成立以降重慶は都市の発展段階に応じて都市計画を立ててきた。新中国成立以降の最初の都市計画は1960年の「重慶都市初步計画」であったが、その計画では、「大分散、小集中、梅花点状」の都市用地パターンが採用された。つまり、全体的に分散型で、狭範囲内の集中、梅の花のような点状の都市用地計画の方針のもとで都市が開発された。その後、1983年版「重慶都市計画」では、「多中心、组团式」の都市用地計画が立てられた。その段階で、産業発展や人口の成長により、新しい集積エリアを成長させ、ブロック型の都市用地パターンを採用する方針が掲げられた。ここでいうブロックとは相対的にまとまりを持つエリアであり、各ブロック内は生産機能と生活機能が整備している。さらに、2007年「重慶市都市全体計画（2007-2020年）」は「一城五片、多中心、组团式」の方針を掲げている。1983年「重慶都市計画」の延長と発展として、ブロック型の都市用地パターンが続けられてきた。要するに、都市の分散的な用地空間は重慶市の地域構造の大きな特徴である。

産業構成と相まって、重慶市産業用地において大きな特徴は工業用地の比率が高いことである。従来の工業地域は長江、嘉陵江沿いに分布し、市街地に散在し

ている。就業地、住宅地、商業地の結合関係をみると、計画経済体制が要因で、職住近接型の分布が特徴で、工業に近接して労務者居住地域が整備されており、工業、商業、住宅が混在している。ところで、近年では、都市の環境保全のために、工業を郊外へ移転させようとする政府の動きがある。例えば、2010年、ハイテク産業を誘致するために、北部新区の範囲を含めた两江新区が設立された。環境問題などは旧重工業都市としての重慶が必然的に直面しなければならない問題であろう。

3.2 商業集積地の立地状況

1949年以来、中国では「生産重視、消費抑制」、「消費型都市から生産型都市に変化せよ」との都市建設方針のもとで、商業やサービス業の発展は軽視されてきたため、都市内部における商業施設などの占める面積が小さく、商業地域の形成や分化は不明瞭であった。都市機能として工業と行政機能が著しく重視され、商業機能が貧弱であった。加えて、中国では小売業は国营商店が中心をなし、都心部の伝統的商業地区と各区の中心部とに集中していた。しかし、1978年以降の改革开放政策のもので商業、サービス業は著しい変化を遂げ、今日では種々の階層の商業中心地が発展し、都市内部における新しい商業中心地構造が形成されつつある。計画経済体制下における都市商業施設計画に基づいて、都市内の区ごとに商業中心地が設けられている。1997年重慶は中央政府直轄市に昇格後、西部大開発の拠点として著しい経済発展を遂げたため、商業の発展も目覚ましい。

重慶における商業中心地は規模別に見ると、市核心商業地区、副次商業地区、ブロック商業地区、コミュニティ商業地区が4つレベルに分けることができる。最高位は市レベルのものであり、歴史を持つ伝統的な商業地である。重慶の場合は解放碑商業地区がそれに当たる。その地区のシンボルであるシンボル解放碑を中心に大型デパート、高級専門店が集積して分布している。商業だけではなく、娯楽、飲食など複合的な機能が揃う。中心地部ではCBDとCRTが混在している。複合的商業集積地は約120万平方メートルがあり、重慶市で最大規模の商業集積地である。改革开放

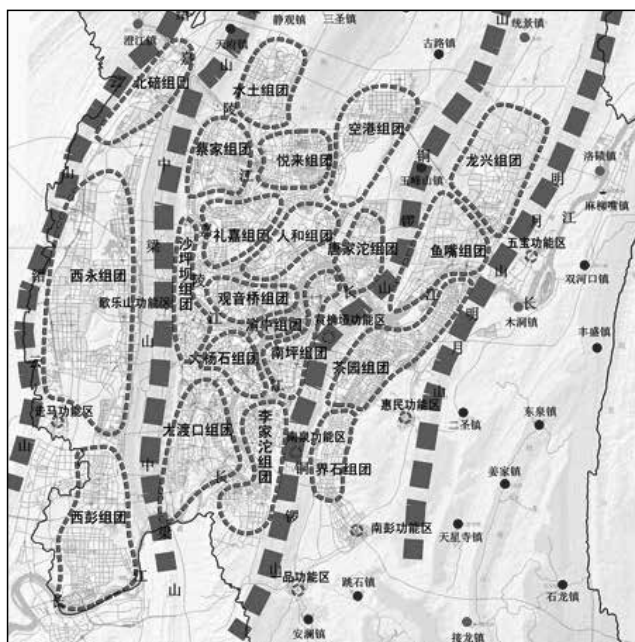


図3 重慶市区のブロック空間分布図

出所：重慶市企画局「重慶市都市全体計画（2007-2020年）」
2011年修正

以後副次的な商業地が次第に成立してきたが、解放碑商業地は市最高次商業地として地位は変わらない。

また、区レベルに当たるものとして、観音橋商業地区、南坪商業地区、楊家坪商業地区、沙坪壩商業地区がある。それぞれの面積は約120万、60万、70万、45万平方メートルである。重慶市商業委員会の公表データによると、2012年では、五つの核心商業地の小売販売額は市区全体の31.7%を占めている。五つの商業集積地にそれぞれ特徴的な機能がある。例えば、観音橋商業地区は建築商品の卸売市場の規模が多く、南岸商業地はコンベンションセンターとしての機能が大きい。

経済発展と所得の増加に呼応して、核心的商業地は依然として繁栄しているものの、副次的商業地の機能が拡大し、販売額が伸びている。

重慶市政府が打ち上げた『重慶市都市全体計画（2007-2020年）』に従って、現存の五つの商業集積地のほか、ブロック商業地として、九宮廟商業地区（大渡口区）、李家沱商業地区（九龍坡区）、江北嘴商業地区（渝北区）、兩路空港商業地区（江北区）、縉曇商業地区（北碚区）の建設を漸次着工した。また、茶園商業地区、陶家商業地区、西永商業地区、龍盛商業地区、礼嘉商業地区の建設計画が立てられた。経済発展と住

民所得の上昇や、都市化の進展に伴う工業の移転、郊外住宅の増加などによって生じた需要を満たすために、商業集積地の開発が必要となると考えられる。軌道交通の建設計画は商業集積地の開発とともに都市計画の重点ともなる。

3.3 交通状況と住民買い物の移動傾向

重慶の交通網は複雑に入り組んでおり、極めて不規則な都市景観を呈している。交通は都市の用地空間に影響を与える重要な要素です。交通の発達したエリアにおいて産業が集積するのが一般的である。重慶市街地は山、河川などの自然状況のため、平野都市の正方形格子状の交通網がなされていない。河航はかつて重要な交通手段であったため、河川にアクセシビリティのいい渝中半島に陸路交通が最も発達していた。江北、南岸エリアは相対的に陸路が発達した。図6と図7はそれぞれ新中国成立直後の重慶市街地と郊外の地図である。

2010年都市住民外出の交通手段の内訳を見ると、徒歩49.7%、公共交通機関33%(そのうち、バス32.2%、軌道交通0.8%)、タクシー6.7%、車



写真1 解放碑商業地 長江と嘉陵江が見える。

出所：筆者撮影。



写真2 解放碑広場 中央部は1950年立てられた中国人民解放記念碑である。出所：筆者撮影。



図4 重慶市主要商業集積地区の分布

出所：Google 地図より作成。



図6 1950年重慶市街地図

出所：重慶指南編集社 1950 年出版。



図7 1950年重慶郊外地図

出所：重慶新華書店 1950 年出版。



図8 2014年現在重慶市区の軌道交通とバス路線

出所：重慶市交通総合信息平台より作成。

れ軌道交通6号線、2号線、1号線、3号線が通っている。軌道交通竣工する前に5大商業地へのアクセスは公共バスに依頼したため、交通混雑が深刻な問題であった。軌道交通開通によって交通混雑が改善されている。

各ブロックと解放碑中心部の間にモノレールなどの交通の緊密なつながりがあるものの、ブロックの間の相互影響が弱い。空港に近接する北部の工業団地の建設が計画されている。将来にはブロック商業地の拡大に応じて軌道交通の建設が計画されている。

4. まとめ

都市の空間立地と内部構造の形成にあたっては自然、社会、文化、制度の力が作用すると考えられる。本研究では、このような要素を踏まえつつ、中国重慶市区商業の立地パターンに焦点を当てて、重慶市区における人口分布、産業構成、都市計画などを分析した上で当該地域の地域構造を考察した。

中国の都市づくりは、基本的には国家が打ち出した建設方針に従って進められている。政府の都市計画は市場メカニズムを活かしながらその不備な部分を補うという役割がある。経済発展とそれを政治的にコント

ロールする政策は、都市という空間において相互に絡み合い、結果として都市空間の形成につながる。

重慶の都市発展の経緯から見れば、自然状況が都市地域構造形成の一つの要因である。例えば、重慶のブロック型の用地計画は自然状況に即した都市計画である。商業の立地パターンを見ると、急速な経済発展の中、商業への需要が増大しつつあり、核心的商業中心地・解放碑商業集積地の役割分担の形で補助的な商業地が隣接して成長してきたが、また、近郊区域のインフラ施設の整備にともない、郊外において商業が発展してきているが、解放碑商業集積地が依然として伝統を持つ最高次の中心地である。都市の求心的構造が依然として存在している。

また、重慶市区において、産業用地、居住用地の混在が大きな特徴である。重慶は工業都市であり、工業用地と住宅地の混在の場合が多いが、現在、自然環境への配慮が益々重要となり、産業用地の分散と新たな集中が進む中、重慶の都市構造も変わっていくであろう。

参考文献

林 上

2003『現代都市地域論』大明堂

森川 洋

1998『都市と地域構造』大明堂

長谷川典夫・西原 純・阿部 隆・石澤 孝・村山良之

1992『現代都市の空間システム』大明堂

菅原 操

2009「中国重慶市の一時間経済圏と都市軌道路線網の整備」『日本地下鉄協会報』第177号

参考資料

重慶統計年鑑各年版

重慶市企画局

「重庆市城市总体规划（2007-2020年）」

重慶市交通科学研究院

「重庆市主城区综合交通规划（2010-2020）」

「2007年重庆市交通发展年报」

「2010年重庆市主城区居民出行调查报告」

重慶市交通綜合信息平台

<http://222.177.24.124:5080/jtxxpt/>

ちょう しゅうきく
張 秋菊 中国重慶市生まれ、鹿児島市在住、中央
大学大学院経済学研究科修士課程修了。

サステナビリティを実現する地方企業

——連続型イノベーションによる企業経営——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース 1 年
馬場 武

はじめに

企業活動の持続的成長は、企業においても地域社会においても、命題の一つとされる。また、企業の維持継続性を担保するための成長戦略の中核を形成するものの一つにイノベーションが存在する。

本報告においては、世界を舞台に活躍する2つの地方企業を対象に、それらの成長戦略をイノベーションの観点から概観し、地方にありながら世界市場を席卷するまでに至る要因を検討することを目的としている。また、企業の戦略が日々進展していくのと同時に、そのイノベーションの態様や捉え方も変化していくと理解される。本報告では、2つの地方企業のイノベーションの特徴から、今後の地方企業の成長戦略の方向性、あるいは地方企業のあり方も検討したい。

最後に、これら企業の調査を検討したうえで、一企業が地域に根付き、受容と共生を果たしていくことは、何を意味していくのか、本報告における見解を示していく。

1. 企業の持続的成長とイノベーションの類型

内閣府は、平成24年度の年次経済財政報告において、人口減少局面において、豊かさを維持できるような持続的成長の実現の重要性を説いたうえで、持続的成長には、生産性の改善が不可欠であり、イノベーションはこれに資すると述べている。持続的成長の中核に位置づけられるここでのイノベーションは、経済活動のあらゆる面における新機軸を包摂したものであり、技術的連続性のある場合もあれば、技術的に非連続な

発明といった場合も含まれるとされている。

シュンペーターによって定義されたイノベーションは、一般に、新たな発明・発見により経済・社会に大きな付加価値をもたらし、社会的に大きな変化をもたらすことを指し、新製品の開発や生産方法の改善に留まらず、マーケティング方法の改善、組織形態の改革もそれに含まれるとされる。あるいは、内閣府の第3期科学技術基本計画においては、科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し発展させ、新たな社会的価値や経済的価値を生み出す革新とも定義される。

シュンペーターは、企業家が、既存の価値を破壊して新しい価値を創造していく、いわゆる創造的破壊が経済成長の源泉であると述べ、イノベーションが包摂する概念として大きく以下の5つを挙げている。

- ①プロダクト・イノベーション：新しい財の生産
- ②プロセス・イノベーション：新しい生産方法の導入
- ③マーケティング：新市場の開拓
- ④サプライチェーン・マネジメント：原料の新しい供給源泉の把握
- ⑤組織イノベーション：新しい経済組織の実現

またイノベーションの類型には、分類視点により複数あるとされるが、技術の連続性の有無という観点からは、イノベーションは2つに分けて考えることができる。イノベーションの連続性は、技術進歩のS字カーブモデルにおける位置づけで説明されることが多い（一橋大学イノベーション研究センター、2001）。技術進歩のS字カーブとは、横軸を技術開発に投入された資源や時間として、縦軸を成果とした場合、技術進歩の様子がS字型のカーブによって示されるこ

とをいう。初期の技術進歩が緩やかなペースで進み、やがて加速する。しばらくすると再び緩やかな曲線を描くパターンである。これが限界に近づくころ、新しいS字カーブが誕生する（Foster, 1986）。このS字カーブ、つまり技術進歩が非連続的に連なる様子が図1である。これをもって非連続型イノベーションとされる。一方、連続型イノベーションとはこのS字カーブ上で起こるものとされている（図2）。

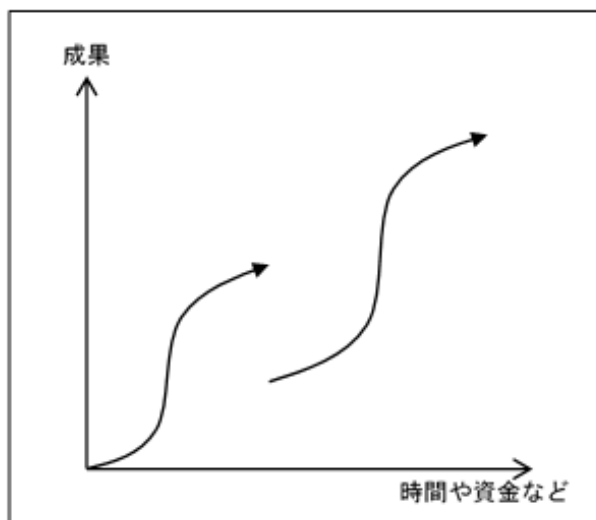


図1 非連続型イノベーション

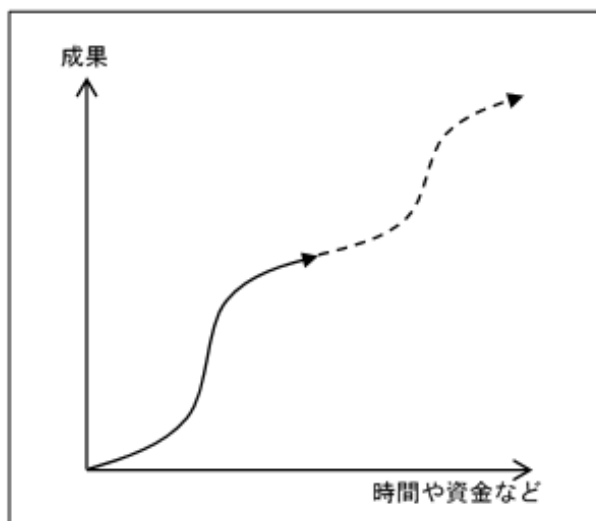


図2 連続型イノベーション

図1の非連続型イノベーションは、一般に、斬新で画期的な新製品を生み出すとされ、新技術や新規市場の出現を示唆するともいわれる。例えば、蒸気機関車や飛行機、コンピュータの登場などが考えられるだろう。しかし、このようなパラダイムシフトともいえ

る劇的なイノベーションを短期的に繰り返し発生させることは、地方の中小企業でなくとも高いハードルである。

本報告で取り上げる2つの地方企業は、広く技術という側面に注目すると、連続型イノベーションの企業と考えることができる。それぞれの技術分野やプロダクトは、全く異なるが、高い技術力をベースに連続的なイノベーションによって成長し、世界を相手にビジネスを展開していると理解される。次章以降では、この2つの地方企業の経営戦略について、インタビュー調査をもとに検討していく。

2. 調査対象企業の概要

本報告では、2つの地方企業を対象にインタビューを中心に調査をおこなった。一つは鹿児島県にあるE社で、もう一つは長野県にあるO社である。この2つの企業の共通点は、地方にありながら特定の市場あるいは特定の分野で世界市場を席捲しているという点である。まずは、これらの企業の沿革や概要について整理する。

2.1 E社の概要

鹿児島県のE社は、1980年に創業し、所在地は鹿児島県南さつま市である。2013年9月現在の資本金は5000万円弱であり、従業員数は52名である。

光ディスクの修復装置の世界シェアは90%に上り、その技術力と高品質な製品は、国内外で高い評価を得ている。これまでに、鹿児島県産業経済賞大賞の受賞や経済産業省より「元気なモノ作り中小企業300社」にも選定されている。

現在も、光ディスクの修復装置はもちろん、専門分野で利用されるLED電球の開発や太陽光発電など、精力的な製品開発を行っている。また、E社のスローガンは、「「想い」を「かたち」にそして「世界」へ」であり、製品への思いと世界を意識した志向性が伺える。

2.2 O社の概要

長野県のO社は、1920年に東京で創業し、現在は長野県上田市に所在を置いている。2014年3月現在の資本金は3億円であり、従業員数は437名である。

主要製品である繊維用針の国内シェアは100%であり、世界シェアも15%に上る。創業から100年近く経った現在では、O社の開発する繊維用針（ミシン針、メリヤス針、フェルト針）は、O社ブランドとして世界中から信頼を得るに至っている。

“一本の針に心を込めて、世界の顧客に手渡そう”との社是のとおり、創業当初より、製品である針への品質保証と世界市場を見据えた事業展開を強く意識している。

3. 二つの地方企業の事例（インタビュー調査）

本報告で取り上げるこれら2つの企業の共通点は、

①地方にある中小企業であること②製品の開発、製造、販売をおこなうメーカーであること③世界の市場で競争的優位性を持っていることである。率直な興味と疑問ではあるが、なぜ地方の中小企業が、世界市場を席捲できたのだろうか。

わが国の場合、一般に企業で製品を研究開発するうえでのリソースは、東京に一極集中しがちであり、インフラ面も含め、地方企業にとっては不利な要因が多い。そこで、本報告の背景であり問題の所在でもある地方の中小企業が世界市場で優位性を築いた要因を探るべく、両企業を対象にインタビュー調査を実施した。

3.1 鹿児島県E社の事例

図3は、E社の主力製品である光ディスクの修復装置である。E社は、創業35年弱の企業であるが、創業時からこの光ディスク修復装置の開発を行っていたわけではない。この創業から光ディスク修復装置の開発に至るまで、さらにその先の展望までをE社社長にインタビュー調査をおこなった。調査日は、2013年11月である。

E社社長の創業への思いは、「場」作りであった。創業前、エンジニアとして鹿児島県外で働いていた社長は、弟の誘いもあり、地元鹿児島で起業することに



図3 E社の光ディスク修復装置

なった。起業するにあたり、自社をエンジニアのための職場にしたいと考え、鹿児島に若者が帰って来られる「場」を作りたいとの思いが強かった。あわせて、鹿児島に一流のエンジニアが一流の仕事ができる「場」を作りたいという思いも同時にあった。そして、スローガンにもあらわれているが、鹿児島から世界を相手にビジネスがしたいと創業当初より考えていた。

つまり、E社はスタートアップの段階から①従業員指向、技術思考であり、②一流のエンジニアが開発する高品質な製品の提供を想定しており、③その高品質な製品を世界市場で展開することを目指していた。これら、技術・品質・世界市場という指向性が、後の光ディスク修復装置の開発に繋がっていく。

E社では、光ディスク修復装置の開発以前に、別の製品の開発に注力した過去がある。その製品は、ゴルフの練習装置で、スクリーン手前のネットにボールを打ち込むと、複数台のカメラが瞬時に弾道を計算し、スクリーンに映像として瞬時に投影されるという、ゴルフ場さながらに自宅で練習できる装置であった。この装置には当時のE社の技術が結集されており、製品発表前から、各所で高い評判を得ていた。航空機内での販売も計画されたほどである。このような前評判を投入市場での評価として受け取り、生産ロットも増

加して、満を持して販売したのである。しかしながら、市場の反応は芳しくなく、在庫を抱えることとなった。理由の多くは、高額であることと装置が大きいため部屋に置きづらいということであった。今でもE社にはこのゴルフ練習装置が展示されている。

これがE社の原体験となったのである。現在のE社はB to Bのビジネスのみ展開している。地方の中小企業が、コンシューマー向けのビジネスを展開するには、市場動向の予測を含め、リスクマネジメントに高負荷がかかるとの認識のためである。ゴルフ練習装置を教訓に、地方から「売る」ということを第一の課題とし、市場の動向予測と自社の技術力を勘案した結果、光ディスク修復装置の開発に着手することとなった。これがE社の最たるイノベーションともいえる。

光ディスク修復装置の開発当時は、まだVHS隆盛期であったが、今後はDVDが市場を席捲するはずであるとE社は予測した。DVDが大衆化されれば、そのDVDを効率よく修復できる全自動の装置の需要が高まるはずである。E社の予測は的中し、そもそもの高い技術力により開発された修復装置は、海外の競合他社の品質を優に凌駕するものであった。また、販売戦略として、最初から海外の展示場に出品するなど、国内市場ではなく、海外市場を意識した展開方法も有効に機能したと理解される。

前述のとおり、この光ディスク修復装置は、世界シェア90%を誇り、成功を収めるに至った。原体験から得た課題である地方から売るという目標も達成したと理解される。しかし、製品にはライフサイクルがあり、イノベーションは絶えず繰り返される。光ディスクも例外ではなく、陳腐化の対象である。現在のE社が展開する製品は、光ディスク修復装置だけではなく、LED電球や太陽光発電システムなど多岐にわたる。これら幅広い製品の開発も共有できる高い技術の賜物である。また、製品開発にあたっては、それぞれの製品の特性や対象市場などを意識した戦略の下、遂行されている。

ここで、光ディスク修復事業とLED事業を用いて、E社の事業戦略に対する考え方を概観したい。E社は、あるビジネスモデルが永続性を持つことの困難性を経営戦略の前提に置いている。この考えの下では、

光ディスク修復事業も永久には続かない。そこで、E社が光ディスク修復事業の次に取り組んだのが、LED事業である。

表1 事業ごとの戦略の違い

	光ディスク 修復事業	LED事業
市場規模	手頃	巨大
市場動向	縮小傾向	拡大傾向
市場性質	B to Bが主	B to Cが主
基本戦略	「世界の市場を 全てとる」 →『パイ』その ものを取る	「0.1%以上の市場には 手を出さな」 →細分化された『ピー ス』を取る →B to Bのピースのみ (B To Cには手を出さ ない)

表1は、光ディスク修復事業とLED事業との戦略の違いについてまとめたものである。この2つの事業は、市場の特性が全く異なることもあり、基本戦略に大きな違いがみられる。この基本戦略の違いが、光ディスク修復事業からLED事業へのイノベーションであるとも捉えることができると考える。

光ディスク修復事業は、そもそもの市場規模が大きいわけではなく、地方の中小企業のE社でも世界市場の全てを取ることが可能であった。したがって、基本戦略は、世界の市場を占有する（パイそのものを取る）ことがであった。しかし、LED事業の場合、その市場は、B to Cが主なため、巨大である。B to B事業のみを対象とするという方針のE社は、0.1%以上の市場には手を出さないという姿勢を示している。換言すると、パイそのものではなく、0.1%以下のパイを細分化されたピースを全てとるという戦略なのである。その戦略の下、電照菊の開花調整用のLEDや鶏舎専用のLEDなどを開発している。

このようにE社は、一つの事業で成功を収めたあとも、その成功体験に固着せず、常に変化を遂げようと試みている。一見、製品単位でみると非連続型のイノベーションを展開しているかのようである。しかし、技術に着目すると、既存の技術を一流のエンジニアの手によって、強化することにより、連続的なイノベーションを繰り返しておこなっていると考えられる。E社は、技術・品質・世界市場というキーワー

ドを根幹にして、技術指向な連続型イノベーションによって、持続的成長を遂げてきたと理解される。

3.2. 長野県 O 社の事例

図 4 は、O 社の主力製品である繊維用針である。O 社は創業約 100 年、まさに針一筋の企業といえる。この針を中心とした製品展開を 1 世紀近くも遂行し、地方にありながら、世界中で愛されるブランドとなったその経緯や事業遂行上の特色などを O 社の社長室にインタビュー調査をおこなった。調査日は 2014 年 12 月である。



図 4 O 社の繊維用針

O 社は、創業当時、レコード針の製造販売を事業の柱としていた。大正 9 年に東京都荒川区で起業した創業者は、多くの物品を輸入に頼るわが国をどうにかして栄えさせたいという思いがあった。そこで、国産品を世界へ向けて販売すること、つまり自社製品の輸出を目標とした。当時は、本当に何も無いところから開発しなければならなく、レコード針を作る機械から自社で開発した。ついには製品の品質に強いこだわりのある開発部門の技術者集団によって、国産初のレコード針を製品化することに成功した。その高品質な製品は、創業者のこだわりの一つでもある適正な価格で市場に投入され、広く認知されることとなった。

このことから分かるように、O 社も E 社と同様に、スタートアップの段階から①従業員、技術指向であり、②高品質かつ適正価格での製品の提供を前提とし、③国産品を世界市場で展開することを目指していた。つまり、技術・品質・世界市場という指向性は E 社と共通している事項である。

O 社のレコード針は、後に大手蓄音機メーカーの指定針となり、海外に輸出され、一旦の成功を収めた。しかし、レコード針事業のみに依存する経営はリスクが高いとの判断の下、ミシン針の開発に着手することになった。この点も E 社に類似している。当時、ミシン針も輸入のみだったので、国産品を開発したいという従来からの思いと、レコード針と形状が似ているという理由でミシン針の開発に乗り出した。このミシン針へのシフトにより、O 社が連続型イノベーションの指向性を強めていくこととなる。

そのミシン針の開発にあたっては、苦労の連続だったようである。レコード針とミシン針では、先が尖っているだけで、全くの別物であるため、開発部門は試行錯誤の日々だった。その後、昭和 14 年にミシン針の製造機が完成し、販売を開始することができた。創業者はレコード針同様にミシン針の品質に非常にこだわり、気に入らない製品は決して販売しなかった。また、適正な価格で販売し、必要以上に儲けないとのポリシーも変わらず貫いた。この品質と価格に関するポリシーは、現在にも引き継がれている。

O 社が長野県上田市に移ったのは、数年後の昭和 20 年である。軍の指定を受けていたため、疎開命令が下され、錆が発生しにくい乾燥した長野県に疎開することとなった。このころは、既にミシン針のみを製造していた。当時の国内シェアは、まだ 100% に届いておらず、針メーカーは国内に数十社存在していた。その後、戦後の高度成長期にメリヤス針とフェルト針の製造販売を順次開始し、現在の繊維用針の製品展開とはほぼ同様となり、事業の拡大も始まっていく。

O 社の社是は「一本の針に心を込めて、世界の顧客に手渡そう」である。この社是は 2 代目の社長である現会長が制定したもので、高い品質へのこだわりと保障や常に世界を見据えるという創業時からの理念が、須らく表現されている。ミシン針の事業戦略においても、昭和 25 年のアメリカへの初輸出を皮切りに、積極的な海外展開に取り組んだ。昭和 39 年には当時の通産省より輸入拡大の優良企業の表彰を受けるほどであった。海外販売網の整備についても、O 社のポリシーである高品質な商品を適正な価格で販売することを目的に、中間マージンを省くため、一つの国に対し一つ

の代理店のみ設置する戦略をとっている。
海外拠点の展開をみると、昭和42年に、台湾に工場を設立し、平成15年の中国進出をもって、海外拠点の整備に目途をつけた。現在の海外拠点は、アジアを中心に欧州にも広がっている。

O社の2014年現在の繊維用針の国内シェアは、ほぼ100%であり、世界シェアについても15%に上る。この高い市場占有率の状況においても、O社は、保守的な戦略は選択していない。繊維産業では、日々、新たな素材の布や糸が開発される。その都度、それらを縫うための新たな針が必要となるのである。また、新規技術に対応するため、繊維用針の種類や機能も複雑化し、O社の製造する針は、基本の針だけでも4000種類以上あり、表面のコーティングや先端の形状などの組合せによって2万種類は超える。したがって、繊維用針についても先駆的な戦略の下、製品開発をおこなっていると理解される。

現在のO社は繊維用針だけにとどまらず、「先が尖っていて、棒状のもの」は全て製品化の対象であるとしている。ここにも連続型イノベーションの特徴が見受けられる。O社は針の製造における技術を用いて、様々な製品を開発している。例えば、ドットプリンタのドットピンやビデオテープのガイドポスト、電子基板の通電検査針まで、その守備範囲は広範である。中には、遺物型取り器のマコまで作っている。すべてに共通するのは、先が尖っていて、棒状のものということであり、O社に蓄積された針開発の技術を他製品に展開した結果である。また、どれも研究開発部門の技術者の発案であることからボトムアップ型の技術者中心の企業であることが伺える。

このように、O社が、どの時代においても高品質な針を提供し続けてきたのは、弛まない研究開発の結果であると理解される。そこでは、蓄積された技術を磨き上げ、連続的イノベーションの実現が繰り返されてきた。O社もE社と同様に技術・品質・世界市場の3つを柱にして、連続的なイノベーションにより、持続的成長を遂げてきたと考える。インタビューの最後でのO社にとってのイノベーションとは何かとの問いには、「針作りの伝統的技術を活かせる新しい分野に進出すること」との回答を得た。やはり、O社のイノ

ベーションの源泉は、長年蓄積されたその技術力にあると理解される。

4. 事例のまとめ

本報告で取り上げたE社とO社の2つの企業は、どちらも地方にありながら世界を舞台に活躍し、持続的成長を遂げている。前章でのインタビュー調査によると、これら企業の維持継続性を担保する要因の一つに連続型イノベーションの遂行が挙げられる。プロダクトベースで概観すると、非連続型イノベーション企業のようにあるが、これら企業は、蓄積された技術をさらに強化していくことでイノベーションを成し遂げている。つまり、技術ドリブンな連続型イノベーション企業であると理解される。

また、E社・O社の両社とも、①従業員（技術者）を大切にしており、②顧客に対し、高品質かつ適正価格での製品の提供を目指し、③世界市場での製品の展開を当初より想定している。このような組織風土は、両者とも創業の段階で構築されていることも共通している。

この組織風土と連続的イノベーションには密接な関係があると考えられる。企業の組織風土の下支えがあつてこそ、連続的イノベーションの遂行が実現されるのではないだろうか。イノベーションの実質的な実施主体は企業内のヒト、つまり役員を含む従業員である。その従業員のイノベーションマインドを形成するのは、企業の組織風土・文化に他ならない。

本事例から、地方に所在する中小企業であっても世界で十分に競争できるということが示唆される。そこで本報告からは、今後の地方企業の成長戦略における方向性として、①常に世界市場を見据えることと②既存技術あるいは蓄積された知的財産の再結合を推進することの2点を挙げたい。地方企業の限定的なリソースであっても、既存の技術や社内に蓄積されたナレッジを再結合することで、連続的なイノベーションを遂行できる可能性があると考ええる。

むすびにかえて

平成 26 年度のプロジェクト研究の統一テーマは、受容と共生の地域学である。そこで、本報告を統一テーマに基づいて、捉えなおしてみたい。

本報告で取り上げた企業を取り巻く主なプレイヤーは、企業・創業者（役員）・従業員・顧客が挙げられる。2つの企業は、それぞれ鹿児島と長野という地域に根差し、創業者や技術者の思いを製品として形づくり、顧客に対して高い価値を提供していた。また、地域に根差しながらもその地域を超え、国際的にも広がり、各々の企業を中心に新たな地域を構築していったとも考えられる。

そこでは、企業を中心に地域を広げながらも、企業・従業員・顧客がそれぞれを受け入れ、共に生きる姿があった。換言すると、地域を舞台に企業・従業員・顧客がそれぞれを受容し共生していると考えられる。また、受容と共生を実現する要因は、企業風土・文化に他ならない。これらを踏まえ、本報告では、企業・従業員・顧客が受容と共生を果たすことで、持続的および拡張的な成長が実現すると理解している。つまり、受容と共生のその先には、成長する未来があると考え

参考文献

Foster, R.S.

1986, *Innovation: The attacker's advantage*, Simon & Schuster Adult Publishing Group.

Schumpeter, J.A.

1926, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung : eine Untersuchung über Unternehmengewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, (2. Aufl.) Leipzig : Duncker & Humblot.

(塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳 1977『経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究（上）（下）』岩波書店）
一橋大学イノベーション研究センター

2001『イノベーション・マネジメント入門』日本経済新聞社

内閣府

2013『平成 24 年度 年次経済財政報告—日本経済の復興から発展的創造へ—』

<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je12/index.html>

2007『科学技術基本計画』

<http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/honbun.pdf>

ば ば たけし
馬場 武 長野市在住。鹿児島大学人文社会科学
研究科前期課程修了。

「研究者を志す後輩達へ」

町 泰樹
(ゲストコメンテーター)

のっけから例え話で恐縮だが、研究は料理に似ている。作りたい料理のイメージ（研究目的や計画）があり、素材（研究対象）を吟味し、持てる道具と技術（研究法や理論）を尽くして実際の料理（論文や発表）を仕上げていく。プロジェクト研究では、テーマは共通であるから、個別の報告者の素材の選び方や道具・技術が問われることになる。以下、その点を踏まえた上で、事前に割り振られていたニコライさん、中村さん、張さんの報告にコメントを寄せたい。

ニコライさんの報告は、着眼点や素材選びの点で成功していた。マイクロ・アグレッションという概念を用いて留学生への「意図せぬ差別」を対象化し、「受容」と「共生」を論じる上で避けることのできない「差別」の問題に取り組んでいたからだ。

しかしながら、アンケート調査の結果報告において母集団が示されていない等、社会調査の基礎的な部分で不備が目立った。優れた着想を活かすための、道具立てや技術に磨きをかける必要がある。これらは鍛錬次第で伸ばすことができるため、今後の発展が期待される報告であった。

中村さんの報告は、喜界島におけるプロテストの「受容」を論じるもので、カトリックとプロテスタントあるいはプロテスタント同士の「共生」が報告されている点で、興味深かった。

ただ、それらの「共生」の面白みを、聴き手に分かりやすく提示する必要があっただろう。そのためには、なぜ「喜界島」なのか、「プロテスタント」なのか、他地域との比較の視点を交えながら説明する必要がある。いわば、自分の研究を突

き放して捉える視点が必要なのである。苦しい作業ではあるが、それは同時に自分の研究の独自性を客観的に把握し、他の研究者や一般の人々に伝えるための重要な作業であるので、是非とも取り組んでほしい。

張さんの報告は、中国の商工業都市重慶の都市構造を論じるものであった。「受容」や「共生」を論じるにあたっては、「異質な他者」との「出会い」や「交流」がキーワードになる。そう考えた時に、経済格差や民族問題を抱えている中国や「異質な他者」との「出会い」にあふれた大都市は、格好のフィールドといえるだろう。

しかしながら、張さんの発表では、重慶の都市構造に関しては細やかな分析が行われていたものの、それが必ずしも「受容」や「共生」といった問題と関連付けられていなかった。この問題を解決するためには、都市構造について、マクロな視点からだけでなく、どのような人々がどのような場所でどのような仕事をしているのかといったミクロな視点からも分析する必要がある。

さて、個別のコメントは以上である。こうしてみると報告者の3名は、ともに素材選びは非常によくできていたと言えるだろう。ただ、手持ちの道具や技術と、その応用の仕方（テーマとの関連付け）に、まだまだ改善の余地がありそうだ。改善の余地があるということは、報告者それぞれの研究が発展の可能性を大いに秘めているということでもある。

ここまで、わが身のことは省みずにコメントを述べてきた。共に学び研究する同志からの率直なコメントとして、ご寛恕いただきたい。報告者た

ち並びにプロジェクト研究のますますの発展を期待している。

まち たい き
町 泰樹 鹿児島工業高等専門学校 一般教育科
（文系）講師. 鹿児島大学人文社会科学研究科地
域政策科学専攻（文化政策コース）単位取得後退
学.

「自らのプロジェクト研究を振り返り感じたこと」

財部めぐみ
(ゲストコメンテーター)

今年度のプロジェクト研究は、2つの点で初めての試みがあったとお聞きしています。まず、コメンテーターに卒業生を起用したこと、2つ目は、これまでも郡元・奄美会場で同時中継が行われていましたが、今年はあらたにテレビ会議システムを使用したことだそうです。そうした意味でも、今回コメンテーターとしてお役目をいただいた時は、当時を懐かしく思い出し、また後輩の皆さんの報告を奄美会場から直に聞くことができると楽しみにしていました。ここでは私が経験したことを振り返って、最後に、今回のプロジェクト研究について全体の感想を記したいと思います。

2008年、私は鹿児島大学大学院人文社会科学研究科地域政策科学専攻に入学しました。その頃のプロジェクト研究は、現在のように各自の専門的な研究分野ではなく、全体のテーマを元にグループごとに分かれて共通の課題を決めていました。私のグループでは、メンバー4人で話し合った結果、奄美大島と大隅半島の過疎地域を比較して交通アクセスの現状と課題について調べました。各自はじめての研究分野だったので試行錯誤の連続でした。電話やメールで連絡をとりながら報告集を執筆し、発表会当日に向けて何度も練習を重ねました。また当時の私は、奄美在住の社会人学生でしたが、その頃から郡元と奄美のサテライト教室を結んだ衛星講義が始まりました。そのお陰で、鹿児島へ行かずとも奄美に居ながらにしてパソコンの画面を通して、プロジェクト研究をはじめ様々な講義を受けることができるようになりました。現在では、画質や音質も以前と比べると格段に良くなっていて、これは私を含め奄美の

学生にとって大変画期的なことだったと思います。

そのうえで、今年度のプロジェクト研究では、各報告者のこれまでの研究成果から一定の報告や課題が示され、それに対する質疑応答が郡元・奄美会場で活発に行われたことは良かったと思います。しかし、総合テーマの「受容・共生・地域学」については、3つのキーワードが独立して語られてしまい互いの関連性が見えづらかったこと、またプロジェクト全体としても共通性や方向性までは言及されていなかったように感じました。これは現在のように報告者が各自の研究分野を発表するスタイルからは難しいことかもしれませんが、私自身プロジェクト研究は共同して地域の様々な課題に取り組む視点を学ぶことだと理解しています。その意味からは、各研究分野とテーマとの関連性はもちろんですが、もっと報告者間の相互連携をはかり、共通の認識や課題についてすり合わせて個別・相互間でどのようにテーマを位置づけるかを明確にしておく必要があったと思います。

たからべ

財部 めぐみ 鹿児島大学非常勤講師。鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻（文化政策コース）修了。

「報告の整理および感想 ―総合テーマをふまえて―」

萩原和孝

(ゲストコメンテーター)

今回の総合テーマ「受容・共生・地域学」を意識して報告を拝聴していると、とくに「受容・共生」は、異なる文化・宗教・文学などが①互いに存在を認識し「出会う」段階、そして②互いに「お客様」として「おもてなし」をする段階、さらに③地域に根付き「定着」する（または定着しなかった）段階に区分されるのではないかと考えた。

①の段階は各報告とも、すでにそれを前提としていたであろう。②の段階については、私が報告会でコメントさせていただいた橋口氏の報告がそれに位置づけられるであろう。報告では英国公使の鹿児島訪問が成功裡に終わったとされていた。しかし、ウィリアム・ウィルスは「私たちの薩摩訪問はかなり欺瞞的なもの」「宴会が、吐き気のするほど長く続きました」と述べており、このイベントの欺瞞性を感じつつ、薩摩藩の歓待に少々うんざりしている様子もうかがえる。旧来からの儀礼の枠組みの中では最上級に近い「おもてなし」をする薩摩藩ではあったものの、それを受ける英国公使一行の側とでは若干の「ズレ」が生じていたのではないだろうか。また、報告者ギュレメトヴ・ニコライ氏の指摘によると、簡単な日本語のあいさつをただけにもかかわらず、「日本語お上手ですね」と言われることをマイクロアグレッションと感じる外国人もいるとのことであった。これも「おもてなし」をする日本人とそれを受ける外国人との間で生じる「ズレ」であろう。一見すると「受容・共生」したかのように見えるものの背後にある「ズレ」に着目すると、各報告に一層深まりが出てくるのではないかと感じた。

③の「定着」の段階については、丁氏・松崎氏・

中村氏の報告などがそれに位置づけられるであろう。また、コメントさせていただいた馬場氏の報告については、結論で示された地方企業の成長戦略の方向性が、今後いかに地域に定着していくのかということが課題の一つではないかと感じた。

「組織風土」のみならず、より具体的な方法論についての検討、すなわち、地方企業が連続型イノベーションを果たすために世界市場を見据えようとする際に抱えるであろう困難さを、報告にあった企業がどのように克服してきたのか、例えば、外国語の問題等を解決するための人材の確保・育成をどのようにやってきたのかなどを明らかにすることが、示された成長戦略を地域に定着させるための鍵ではないかと思う。

プロジェクト研究では、本来の自分の研究課題とは異なる観点の総合テーマで研究対象を捉え直すことが求められる。これは容易なことではないが、このプロジェクト研究を通じて得られたであろう、思考の柔軟さや研究対象への新しい視点、今後のそれぞれの研究の発展につながっていくことを願っている。

はぎはら かずたか
萩原 和孝 鹿児島高等看護学院非常勤講師ほか、鹿児島大学人文社会科学部地域政策科学専攻（文化政策コース）修了。

授業と報告会を振り返って

2015年2月14日（土） 13:00～17:35

会場（郡元会場と奄美会場をテレビ会議システムで中継）

郡元会場：総合教育研究棟（文系）3階 LL 教室

奄美会場：奄美サテライト教室

◇研究報告

丁 茹 （鹿児島大学大学院博士後期課程2年）

ギュレメトヴ・ニコライ （同博士後期課程1年）

橋口正樹 （同博士後期課程1年）

松崎大嗣 （同博士後期課程1年）

中村敬子（奄美会場） （同博士後期課程1年）

張 秋菊 （同博士後期課程1年）

馬場 武 （同博士後期課程1年）

◇ゲストコメンテーター

郡元会場：萩原和孝 （鹿児島高等看護学院非常勤講師）

町 泰樹 （鹿児島工業高等専門学校講師）

奄美会場：財部めぐみ（鹿児島大学非常勤講師）

◇司 会

丹羽謙治（鹿児島大学大学院教授）



1. 研究の形態と総合テーマの設定について

プロジェクト研究は、博士後期課程の授業の一環として行われています。従来は、学生が数人でグループを作り、地域が抱える課題を見だし、解決策を提示するという形態をとってきました。近年は総合テーマのもとで、各自が培ってきた研究成果を生かせるような個別研究および報告形態へ移行しています。

今年度は博士課程に在籍する1、2年生7名が研究報告を行いました。7名の研究は、外国人作家の地域的受容、非受容としての差別、異文化との交流、新しい調理技術の導入、異なる教派間の協力、都市の発展と立地、地方企業の成長戦略とイノベーションといった多様な内容でした。それらの共通点を見いだす過程で浮かび上がってきた

キーワードから、「受容」「共生」「地域学」を総合テーマとして設定、各自の研究内容を総合テーマに引き付ける形で研究に取り組みました。

2. 授業の様子について

ふだんの授業では、鹿児島大学と奄美サテライト教室をテレビ会議システムでつなぎ、さらに学生が在住する長野県とスカイプでつなぐという、三元中継で臨みました。

10月から授業を始めるにあたり、まずは昨年度の報告会で発表した2年生と3年生から、総合テーマを設定した経緯や調査手法、効果的な報告資料の作成方法等について、経験を踏まえた発表をお願いしました。各自の研究内容が大きく異なる中で、総合テーマを設定することには不安の声

も多く聞かれましたが、互いの研究が関連する可能性を探し、テーマの設定を行いました。テーマ決定後は発表を繰り返し、研究を練り上げていきました。

3. テレビ会議システムの導入について

今回、初の試みがテレビ会議システムを使った二元中継でした。これまでのスカイプを使った中継に比べ、非常にクリアな画像と音質であることに、報告会の来場者の方々から驚きの声がありました。会話にあまりタイムラグがなく、何より臨場感のある映像のおかげで、奄美会場との一体感もより高まったのではないのでしょうか。

今年度後期から授業に導入されたテレビ会議システムは、画像が鮮明なだけでなく、リモコン一つで基本的な操作ができ、簡単に扱えるという利点があります。とはいえ、当初は通信が何度も途切れるといったネットワークの不安定さや集音機能の弱さ等、多くの問題がありました。その都度、先生方をはじめ多くの方々にご協力をいただき、報告会直前により状態を整えることができました。

二元中継そして三元中継はまだまだ改善の余地



がありますが、遠隔地にいながら授業に参加できるシステムが整備されつつあることは、今後の授業運営を考える上でも、大きな収穫になったと思います。

4. 修了生による講評について

今回の報告会では、本専攻の修了生3名をゲストコメンテーターにお迎えし、講評をいただきました。これまでも修了生をコメンテーターとして招きたいという案がありましたが、ようやく実現に至りました。

コメンテーターの皆さんには、事前に担当する報告者の原稿に目を通していただいた上でコメントをいただきました。先輩研究者という立場からのご意見は、非常に新鮮ではっとさせられるような指摘が多くありました。分野を異にする研究者から意見をもらえたことは、学生にとって得難い経験であったと思います。時間の制約上、コメンテーターから頂いた意見を踏まえた議論や質疑応答が十分にできなかったことが悔やまれますが、次年度はこのような好機をいかに報告会の構成を検討できればと思います。

報告会の最後に桑原専攻長から、先輩コメン



テーターの報告会での活躍を評して、「自己資源の活用」という表現がありました。私は今年度、初めて特任助教としてプロジェクト研究に携わりましたが、授業にどのように関わればいいのか分からず、指導・助言も十分にできないまま報告会を迎えました。先輩たちはコメンテーターとして学生を導いてくれただけでなく、私が今後どのように学生たちと関わっていけばいいのかをも示してくれました。何よりも、同じ専攻で学んだ先輩からこの姿勢を学べたことが良かったと思っています。先輩たちに感謝するとともに、今後、研究者としてより一層学びを深めなければならないという思いを強くしました。

5. 報告会の運営について

今回のプロジェクト研究および報告会の運営にあたっては、2、3年生による協力が非常に大きな支えとなりました。1年生7名に対してサポート要員の2年生が1名という非常に厳しい状況にありましたが、報告会当日は、在学生の皆さんに設営作業から受付、撮影、片付けに至るまであらゆる場面でお手伝いをいただきました。

また、2年生の韓艶麗さんと3年生の熊華磊さんの二人には、報告会のポスターとチラシを作成していただきました。韓さんが思い描く「受容」のアイデアを、熊さんが形にするという両者の見事な連携が生んだポスターは、先生方からも高く評価していただきました。

このように、報告会を行うにあたっては、報告者だけでなく、運営に参加する役割もまた重要であるといえます。共同研究に臨む姿勢と運営手法を学ぶ良い機会になりました。

6. 今後の課題について

個別の研究報告は、各自の研究を磨くためには適した形だといえます。しかし、これまでの報告会でもたびたびご指摘をいただきましたが、互いの研究の関連性やそれを踏まえての全体的な議論が乏しくなる傾向にあります。今回も、総合テーマは掲げながらも、あくまでそれぞれの研究から導き出された受容や共生、あるいは地域への言及に留まり、各報告が最終的にどのような関わりをもつのかという議論にまでは至りませんでした。

また、今年度は特に7名の学生が持ち時間 25





分で報告を行ったため、4時間半という長時間にわたる報告会になりました。これも、上記の点と合わせて今後の報告会の運営を考える上での課題であるといえます。

おわりに

最後になりましたが、指導してくださった先生方をはじめ、突然のお願いにもかかわらずコメントーターを引き受けてくださった三名の先輩方、そして、運営面で支えてくださった在学生の皆さんと教務補佐員の遠矢さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。

ふくがさこ かな 福ヶ迫 加那 鹿児島大学大学院人文社会科学
研究科特任助教。

鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻
(文化政策コース) 満期退学。

プロジェクト研究を振り返って

丁 茹

今回の研究は共通テーマ「受容・共生・地域性」の基に、日本人作家である星新一の中国における受容特徴を論じました。「受容」という単語は「受け入れる」意味を持っていると同時に、文芸作品において「鑑賞の基礎をなす作用で、芸術作品などを感性に受け入れ、味わい楽しむ」意味もあります。中国における星新一小説の受容には、彼の小説が中国語に翻訳された最初の段階からいくつかの特徴が見られます。且つ「科学幻想文学」という文学ジャンルは中国で20世紀80年代はじめて復興し、今でも中国の文学界でそれほど重みを持っていないと言われ、新しいジャンルだと言っても過言ではありません。

星新一は専門的なショートショート作家と言えますが、同時にSF作家としても認められています。本研究は星新一の中国語訳の出版状況について他の日本SF作家の中国語訳出版状況と比較し、「出版時間、出版数、翻訳者及び読者、教育界からの受容」の四つの面から、星新一の中国における独特な受容特徴を分析しました。

共通テーマの決定から約三カ月を経て、いくつかの中国出版物データセンターから星新一と他の日本SF作家クラブ会員の中国語出版物のデータを整理し、分析しました。途中でも何回も検討及び修正をしてから、両者の異同を比較することを通して、星新一の「中国SF停滞期の出版数維持」、「作品ジャンル区分の柔軟性」、「中国義務教育界の受容」などの特徴を明確にできました。これら

の特徴によって、星新一の作品はショートショートSFという類型で中国のSF作品と共生できると考えています。

最後に、今回のプロジェクト研究にあたって、ご指導、ご助言をいただいた先生方、及び先輩、仲間に感謝を申し上げます。今回のプロジェクト研究によって、自分の研究に重要な一部分を築くことができました。今後の研究もこれに基づき、進めたいと考えています。

ギュレメトヴ ニコライ

私は教育制度の影響力とプロパガンダの可能性について興味を持ち、研究テーマを、教育制度を中心とした差別問題としている。現代の世界の中でも人種や性別、宗教などの差別問題がいまだに存在していることは事実であり、それについて研究したいと考えている。プロジェクト研究の授業ではいろいろな分野の学生と先生方が集まって、自分の研究テーマについてディスカッションもできて、沢山の意見とフィードバックを聞くことができ、大変貴重な経験となった。

自分の行っているフィールド研究は、鹿児島大学の学生の考えの中に存在する、海外に対しての固定観念について調べることであった。アンケートとインタビューを行い、アンケートの質問は海外・外国人に対するイメージ、意見とその変化に

ついてだった。33 人の参加者（日本人 12 名、外国人 21 名）からデータが集まり、興味深い情報を多くみることができた。例をあげると、マイクロアグレッション（意図しない差別的発言）を感じた留学生が多数あった——それは外国人からみるとマイクロアグレッションであるが、日本人の多くはそれを差別として認識していない。このアンケート回答者たちは（日本人も留学生も）、今後の日本社会がもっと国際的になる必要があると回答していた。そのためには、川村千鶴子教授の提唱する多文化共生庁の設置や、NPO や NGO、国民の協力が必要だと感じた。

今回のプロジェクト研究報告会で社会学的調査の方法について、とくにアンケートの質問形式、データ回収の仕方など批判的なフィードバックを受け、今後もアンケートなどを使用した調査をしたいので研究に活かしていきたいと感じた。

橋口正樹

今回の報告では、共通テーマ「受容・共生・地域学」に基づき、主に慶応二年の英国公使ハリー・パークスの鹿児島訪問における薩英双方の交流の実態を明示することで、薩英戦争後に薩摩藩とイギリスが友好関係を構築し、その関係を急速に発展・深化させていく過程の一端について考察を試みた。私自身の力量不足で甚だ不十分な報告になってしまった感は否めないが、今回頂いたコメントやご指導を基に、より良い研究になるよう更に努力していきたい。

近年鹿児島においては、幕末維新期の顕彰に関する様々な動きが見られる。主だったところでは鹿児島市における「明治維新 150 年カウントダウン事業」の実施（ちなみに今年は薩摩藩英国留学生の派遣から 150 年、来年は薩長同盟、そしてパークスの鹿児島訪問から 150 年である。）、いちき串木野市羽島の「薩摩藩英国留学生記念館」の開館、

旧集成館を始めとする「九州・山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録に向けた動きが挙げられる。明治維新からまもなく 150 年が経過しようとしているが、幕末維新史の更なる研究が進み、それに伴い多くの人々が関心を持ち、理解を深めていくことを期待したい。

昨年 10 月からプロジェクト研究の授業が始まり、当初は私自身全くの手探り状態で右往左往していたが、それから約半年が経とうとしている現在、報告会を無事に終え、このように報告集の巻末文を執筆している。時間の流れの速さを実感するとともに、ただ安堵しているというのが今の率直な感想である。また、一連の授業を通して各自の多種多様な研究に触れることもでき、大変有意義な半年間であった。

末筆ながら、今回のプロジェクト研究において、ご指導・ご助言を下さった先生方、共に研究する中で学問的刺激を与えてくれた博士後期課程の仲間達、そして毎回の授業の運営や報告会の準備等にご尽力下さった福ヶ迫特任助教、遠矢教務補佐員に感謝申し上げ、筆を擱かせていただきます。

松崎大嗣

本年度のプロジェクト研究は「受容・共生・地域学」という共通テーマでスタートした。7 人の専門分野が大きく異なるため、共通テーマを選定することは非常に難しい。しかし、プロジェクト研究を支えて下さる先生方、諸先輩方のご尽力により、なんとか自分たちの研究に引きつけられるような共通要素を導き出し、議論を重ね、本テーマを選定するに至った。

私は、考古学を専門領域とし、九州南部における律令制導入期の様相について研究を行っている。特に、律令制や外来文化の導入による人々の生活の変化に着目しており、比較的本研究テーマは私の研究課題に最適だと感じていた。そのため修士論文の内容をさらに発展させるために、「調

理技術の変化」という観点から、「律令国家形成期における蒸し調理技術の境界」という題目で発表させて頂いた。本研究は、考古資料（土器）の実見、実測、写真撮影などを行う必要があり、遠方まで必要な機材を運搬しなければならないため、プロジェクト研究に参加できないことも多々あった。そのような参加率の悪い私に対してもプロジェクト研究を支えて下さる先生方に、有益なご指導・ご教授を賜うことができた。また、研究の途中成果を発表した際には、プロジェクト研究参加の学生諸氏に多くのご指摘を頂くことができた。普段は考古学の世界だけで議論しているため、本研究を専門外の方々に理解してもらうためには、どの部分を詳しく説明しなければならないのか、他の専門からみた場合このような視点もあるのではないかなど、今まで気づかなかった着眼点や手法を学ぶことができた。また、他の専門分野を学ぶことこそ、自らの研究領域を理解することに繋がると感じたことは大きな成果だと思っている。

今後はさらなる研究の進展をはかるために、考古学領域はもちろんのこと、関連諸科学の研究にも目を向け、みずからの研究にフィードバックする必要性を感じている。プロジェクト研究に参加した学生諸氏に、今後とも様々な面で刺激を受ければ幸いである。

中村敬子

明治以降、キリスト教が開国と同時に日本に入ってくる。奄美、中でも喜界島において今日までの地域の変化の中でどのようにプロテスタントが関連していったのか調査研究をしてきた。まさに今回の共通テーマ「受容、共生、地域学」は的を射ていた。

フィールドワークを通して、多くの出会いがあり、聞き取りや事例から見えてきたものがある。教派の違いを超えて受け容れ、助け合って、共存

してきたという、世界の潮流からは特殊な「島」という地域で生まれた教会教派関係である。戦前戦中の迫害はあったものの教会員は時が良くても悪くても信仰を守り、奉仕が続けられた。そのことは地域の人々の受容につながる。さらに100歳を超える生き証人の証言が資料となり裏付けられた。

過疎化や人口流失が続く中で、教会活動や事業が精神的なもののみならず地域の人々への奉仕や雇用、教育に役立っている。キリストの十字架に現された神の愛は異質な人間に向けての神の「受容と共生」でもあることから、小さな島という周縁から教派を超えた受容と共生がおきた。そして地域に受容があった。そのことが異質な世界の国や地域の宗教や文化の違い、格差や争いに対しても何らかの緒を見いだせるのではないかと考える。さらに身近なことでは島々や本土との螺旋的關係の構築が受容や共生の輪を広げていく。

このプロジェクト研究報告準備の期間中に、介護をしていた父の入院や手術そして召天があった。牧師として自らが告別式準備と司式をし、後日の弔問客や諸手続に当たるという過密さと近隣地域での関わりが加わった。十分な時間がなかっただけに、今後は残された研究課題に取り組んでいきたい。

今回の準備で助け人に支えられて窮地を脱し、プロジェクト研究報告を進めることができた。最後に御礼を伝えたい。「御指導くださった先生方や地域の熱い思いで協力くださった皆様に心から感謝申し上げます」

張 秋菊

都市の内部構造は時代とともに変化するものがある。現在、中国国内でも都市の構造変化が様々な形態で起きている。私の研究対象地域である重慶は地理的、経済社会的、歴史的に見ても特性のある地域である。重慶は典型的な山岳都市で

あり、工業都市である。経済発展、産業分散と再集中、人口増加、都市規模の拡大が進む中、都市の地域構造が大きく変貌している。それに加えて、政府の行政手段も都市の内部構造の形成と変化の一つの要因である。このようなポイントを押さえつつ、今年のプロジェクト研究の共通テーマ「共生・受容・地域学」に関連付ける形で重慶市の地域構造分析を自分の研究テーマにした次第である。都市は住民の生活の基盤である。都市住民は自然に働きかけながら、社会活動を通してお互いにかかわっている。このような複雑なかかわりのなか、人、自然、産業などが如何にして相互作用し、さらに受容、共生して有機的な全体をなしているのかが人類にとって重要な課題である。重慶地域の事例を通して都市の中の「受容」、「共生」の具体例を探ってみることで共同研究に資することは私のもう一つの願いである。

プロジェクト研究と言えば、「求同存異」という当時中国の周恩来首相が政治上の問題解決のために使われた言葉を思い出す。その意味はお互いに相違を認めた上で同一のものを求めることである。私たちは「求同存異」の方針を持つグループである。多分野の人が集まって、お互いの研究に溶け込んで知恵を絞りだして切磋琢磨し、この過程で分野にまたがる共通の研究方法を身につけることができ、研究能力の成長ができたと思う。そして、共同研究を通してチームワークの在り方について再考することもできた。さらに、自分の個別分野の研究について、たくさんの有益なアドバイスをいただき、今後の展開の方向性に大きな示唆を得た。プロジェクト研究で調査を行った結果、重慶市区における高次中心地の立地パターンがある程度考察できたことから、今後は零細商業中心地の調査を進め、重慶市における中心地の構造分析を深めていきたいと思う。

今回のプロジェクト研究は、「受容と共生の地域学」を統一テーマに、我々院生7名が、それぞれの立場から調査・研究し、報告をおこないました。これまで参加してきた学会や研究会では、当然ながら特定の専門分野の枠内での研究報告や議論が中心であり、今回のように報告者それぞれが多様な背景を持ちながら、統一テーマで論じ合う本会は、初めての経験でした。統一テーマに対する様々な分野からの見解を伺い、新たな知識と思考の幅を享受することができ、今後の研究の糧ともなりました。

正直に申し上げますと、当初、統一テーマである受容と共生については、私の研究分野である経営学や情報マネジメントの観点から、どのように取り組むべきか悩ましく思っておりました。そこで、今回は、博士論文の研究テーマからは一旦離れて、自分自身が興味を持った企業を取材することから始めました。今回取材にご協力いただいた2社は、鹿児島と長野という地方にありながらも、世界で活躍し、持続的な成長を遂げている特徴的な企業です。取材調査を通じて、企業が地域に根付きサステナビリティを実現するということは、企業を取り巻く様々なプレイヤーと受容・共生を果たし続けることではないかとの考えるようになりました。そして、その受容と共生から生まれるパワーが、企業と地域を未来へと導く原動力になっているのではないかとの見解に至ったのです。

今回のプロジェクト研究では、これまでの研究のように定量的な分析手法を用いて自らの見解を示すのではなく、定性的に分析・検討を重ねた結果から論理を展開するよう努め、自身の研究に対する考えの幅も広げることができたのではないかと考えます。今回の報告にご協力いただいた鹿児島県のE社と長野県のO社には、この場を借りてお礼申し上げます。

平成 26 年度「プロジェクト研究」参加一覧

履修院生：ギュレメトヴ ニコライ（文化政策コース 1 年）

張 秋菊（島嶼政策コース 1 年） 中村敬子（島嶼政策コース 1 年）

橋口正樹（文化政策コース 1 年） 馬場 武（地域政策コース 1 年）

松崎大嗣（文化政策コース 1 年）

丁 茹（文化政策コース 2 年・10 月入学）

韓 艶麗（文化政策コース 2 年）

担当教員：長嶋俊介（島嶼政策コース・国際島嶼教育研究センター教授）

丹羽謙治（文化政策コース・人文社会科学研究科教授）

市川英孝（地域政策コース・人文社会科学研究科准教授）

指導補助：福ヶ追加那（人文社会科学研究科特任助教）

プロジェクト研究報告集 第 12 号

印 刷 2015 年 3 月 20 日

発 行 2015 年 3 月 25 日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

（博士後期課程）地域政策科学専攻

〒 890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目 21 番 30 号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=2561

印刷・製本 濱島印刷株式会社

©2015 無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648